# 異常性に導かれし者

star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異常性に導かれし者

【Ｎコード】
Ｎ１１９６Ｕ

【作者名】
ｓｔａｒ

【あらすじ】
黒神めだかと人吉善吉には一人の幼馴染がいた。六年前に別れた異常者、六道直人（ろくどうなおと）である。彼はめだか達と同じく箱庭学園に入学し、理事長と面会する。彼も望まぬまま、『異常性』が彼を波乱の学園生活へと導いていく。

# プロローグ

皆さんは人生の分岐点、あるいは人生の分かれ道というものを聞いたことはあるだろうが、経験したことがあるだろうか？

俺は正直言って、いままでそういう経験は無かった。あったかもしれないが、自覚は無い。

それほど大きな決意をした覚えは無い。多分勘で選んだりしたと思う。

……だけど今日この日こそ、俺の人生にとっての最大の分岐点となっただろう。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

……何故こうなった？

みなさん始めまして。六道直人（ろくどうなおと）と言います。突然何言ってんだこいつ、と思うかもしれないが、これが俺が今一番思ってることなんだ。

たしか俺は……高校受験の面接に来ていたはず……そのはずだ。学校からの推薦と、後は小論文、そして面接だけという簡単な受験であるはずだった。いや、面接には変わりないんだが……

「はじめまして、私が箱庭学園理事長の不知火袴です。この度は、数ある高校の中でも我が校を受験していただき感謝しますよ、六道君」

……なんで！？　なんで面接の相手が理事長なの！？

## プロローグ（後書き）

作「皆さんこんにちは。初めての方もいらっしゃるかもしれませんが、現在ギアスの小説を書いているｓｔａｒです」

六「今作の主人公、六道直人だ」

作「いやぁ、何をやってるんでしょうね？　向こうまだＢ．Ｒ編も終わってないのに……」

六「お前が編実逃避したいとか言ったからだろ」

作「そうなんですよねー。活動報告に書いたんですけど、昨日までテストだったんですよ。だけど、結果が……」

六「まぁ、察してくれ」

作「それでテスト中に考えるのに疲れ、小説のことを考えてたら設定ができてきて投稿しました。ギアスと並行して投稿していこうと思うので皆さんこれからよろしくお願いします」

## 1話　『フラスコ……計画？』（前書き）

一度投稿した以上、できる限り頑張ろうと思います。

いつでも感想お待ちしております。

## 1話　『フラスコ……計画？』

「ははは、そう緊張しないでください。あくまで面接ですから。
なにもあなた自身に問題があるというわけではありません。ただ、個人的に聞きたいことがあって私がお願いしたんです」

「そ、そうですか……それを聞けてなによりです」

良かった！！　本当にびっくりしたよ。
俺だけ控え室から別の場所に連れてかれるし……嫌な予感がしたけど、どうやら杞憂だったようだな……

「それで六道君、君は問題無しで入学が決まりました」

「……え！？　面接はいいんですか！？」

ちょっと待って。じゃぁこの面接は何？まさか高校受験って面接とは意味無いものなのか！？

＊＊＊＊違いますから、本来なら面接にも不合格とかありますから＊＊＊＊

俺、中学時代頑張ったのに！　評定平均４．８取ったのに！　面接の練習もばっちりしたのに！

……でもなんでだ？　一応俺が申し込んだのは特別普通科の十組。学費免除するだけあり、決して簡単に入れるものでは無いはずなんだが……

「ええ、そのことで君を呼んだんです……君には十組では無く、十三組に入学してもらいます」

「十三組？　……どうしてですか？」

「六道君……君は昔、ある医療機関で自分が『異常者（アブノーマル）』であるか検査をしましたね？」

「？　異常者（アブノーマル）？」

なに、それ。俺が異常（アブノーマル）だと言いたいのか？

検査とか言ったけど……あれか？　たしか俺が皆と出合った時の……あんまり覚えてないな……

いや、正確に言えば覚えているには覚えている……ただ、そのこ

ろの記憶が飛び飛びだったりするんだよな……

「……すみません、したのかもしれませんけど……俺はよく覚えていません」

「まあ、それも仕方がないでしょう。１０年ほど昔の話ですからね。……君はあの時、たしかに『異常』だと診断されたのです。しかし、医師は最後の最後まで解析ができないまま、ある事件によって病院が崩壊、君はそのまま退院しました」

……そういえばそんなことあったな。あのころの記憶はあいつらとのことばっかりで曖昧なんだが……適当に答えておくか？　いやでも、入学がかかってるみたいだし……

「そこで六道君、老人の実験に付き合ってくれませんか？」

「実験……ですか」

「ええ、ここにあるサイコロを同時に振ってもらえませんか？」

……何の実験？　一体何を試したいんですか、あなたは？　……

しかし、サイコロか。

「わかりました。普通にふればいいんですよね。」

俺は六つのサイコロを同時にふった。サイコロは……全てが６の目で、しかも横１列に綺麗にならんでいた。

「……すみません。どうも俺がサイコロをまとめて振ると、横一列に並んでしまうんですよね。出る目も六だけですし。」

「……いえ、それでこそ……それでこそ君を誘う意味がある！
……六道君、フラスコ計画に参加してくれませんか？」

「フラスコ……計画？」

何ですか、それ？
……フラスコで理科の実験でもするのだろうか？　俺的には数学とかの方が得意なんですが……

## 1話　『フラスコ……計画？』（後書き）

作「いきなりフラスコ計画への勧誘…」

六「俺、面接に来たんだよね？そうだよね？」

作「はたして理事長の思惑とは？六道はどうするのか？次回に続きます。」

## 2話　『そんな簡単な話じゃないのか……！？』（前書き）

感想が来てて驚きました。ギアスのほうは感想などほとんど来なかったので（泣）

感想はいつでもお待ちしています。

## 2話　『そんな簡単な話じゃないのか……！？』

「フラスコ計画とは私が主催するプロジェクトのことです。
――『人為的に天才を作り出す』、そのために異常を理論立てて解明していくものです」

「……質問をしてもよろしいでしょうか？　そもそもあなたの言う『異常』とは？」

さきほどから話に出てきた単語――『異常（アブノーマル）』。
普通に考えれば、常識を外れた異質なもののことを言っているんだろうが……なぜそれを俺に言うんだ？

「そうですね……たとえば『新聞の内容を全て記憶する』、はたして可能でしょうか？」

「全ては無理でしょう。人には限界というものがありますから……」

「そうです、人体では不可能なことを成し遂げることは『偉業』ではなく『異常』です。
サイコロにしても先ほどのように、『何かをすれば必ずそうなる』などということは『異常』なんです」

……さっきのサイコロにはそんな意味が……ただの遊びだと思ったのに…

「……フラスコ計画の定員は一三名、『一三組の一三人（サーティン・パーティー）』と呼ばれる者で構成されています。
本来一年生は参加しないのですが……君には彼らを補佐してほしいのです」

「……その計画は、途中で抜けることも可能なんですか？」

「参加者には報酬があり、逆に本来は抜けるときに厳しい罰則があるのですが、君はまだ補佐ですからね。罰則は無しにしましょう。」

「そうですか、それなら私は別に構いませんけど……！？」

何か来るッ！！
俺はとっさに椅子から飛びのいた。すると俺がいた場所に大男の拳が振りかざされていた。

「ほう、今のを避けるか。なかなかいいじゃぁないか」

「……誰ですか？　一応、面接中のはずですけど……」

「それは悪かったな。だが、計画を抜けるとなればどうなるか、簡単に教えてやろうと思ってな。」

……俺が甘かった。フラスコ計画とは、そんな簡単な話じゃないのか……！？

「……他にもいますね、誰ですか？」

「！！　……気付きましたか。いいでしょう、今のうちに挨拶をしておくのもいいかもしれませんね」

理事長が右手を上げた瞬間、残ったメンバーが出てきた。大男を含めて四人もいたのか……

おそらく、この人たちがフラスコ計画の中心人物！！

「んじゃ、改めて。俺は三年一三組、高千穂仕種（たかちほしぐさ）だ。験体名『棘毛布（ハードラッピング）』」

先ほど襲ってきた大柄の男。その体系といい戦闘要員か……？

「僕は三年の宗像形。験体名『枯れた樹海（ラストカーペット）』。よろしく」

この中では一番まもとそうな人だな、見た目も普通だし……だけど、なんで刀を持っているんだ？

この学校には銃刀法など通じないのか？

「ボクは行橋未造！三年一三組の『狭き門（ラビットラビリンス）』だよ。」

高校生にしては小柄な先輩。仮面をしているせいで素顔は見えない……仮面ははずさないのだろうか？

「都城王土だ。験体名『創帝（クリエイト）』。俺の邪魔にならなければ、俺の視界に存在することくらいは許してやろう」

なんだこの人……見るからに異常だと、存在自体が異常だと分かる。
敵に回さないようにしよう。なんだかすごい嫌な予感がする……多分、この人と俺では相性が悪すぎる！！

「他のメンバーは全員2年生で今日は来ていません。
また、『裏の六人（プラスシックス）』という異常度の高いメンバーも来ていないのですが……彼らとの挨拶は別の機会にしましょう。」

「そうですね、僕も正直混乱しているので……」

まさか面接に来てこんなことになるとはな……嫌な予感が当たったか……
本当に、どうしてこんなことになっちゃたんだ……俺が異常だからか……

「六道君、一三組は他の組と違い登校義務はありませんが、研究施設である時計塔地下には来てください。
補佐なので毎日でなくても構いませんが……こちらが連絡したときは必ずね。」

「……わかりました。今日はここで失礼させていただきます。」

これ以上厄介ごとに巻き込まれないうちに俺は理事長室を後にした。できれば危険なことに巻き込まれないよう、そう祈りながら…

## 2話　『そんな簡単な話じゃないのか……！？』（後書き）

作「簡単に入ったと思ったら……やっぱり先輩達に狙われて……」

六「入試の面接中にいきなり襲われる学校があるか！？　いや、ない！！」

作「感想のところに書きましたが、主人公の『異常』についてはだんだんと明かしていこうと思います……多分、風紀委員会関連の前後あたりになるかな？」

六「……まだ決まってないのかよ！？」

作「話が思いついたら書いていこうと思います。これからもよろしくお願いします」

## 2．1話　『予測できないからですよ』

六道が去った後でも、理事長室では話が続いていた。
彼――『六道直人』という異常者について……

「それで君達はどう思いましたか？　彼は……」

残った四人に向け、理事長は質問する。

「まだなんとも言えねぇな。
俺の拳を避けるところをみるとそれなりの実力のようだが……だいたいあいつの異常はなんなんだ？
まさか反射神経とか言わねぇだろうな？」

「それはないよ。彼は君を見さえしなかった。
……反射神経なら、さっきのような背後からの攻撃には反応できないよ」

「かと言って予知能力とかでもないね。彼、考えてすらなかったようだし。
もしも予知能力だと言うのなら、僕が何かしら彼から感じ取れるはずだからね……」

「そのような些細なことはどうでもいい。
……それよりも袴、なぜあいつをフラスコ計画に加える？　まさか研究施設にいたからという理由だけではあるまい？　一体何を考えているのだ？」

各々が意見を出す中、都城のみが理事長である袴に疑問をぶつける。
たしかに彼の言うとおり在学している十三組性も多数おり、なにも六道でなくても良かったはず。

「それは、彼の異常が予測できないからですよ。
……当時の話ですが、レポートによると彼は友達と話していた最中、突然背後から飛んできたボールを寸前でよけたそうです。
反射神経なら見えなければ反応できない、また予知能力の可能性もありましたが、直前で避ける必要があるのか疑問に思われました。もっと早く予知できなかったのかと……今回、行橋君のおかげで予知能力ではないとはっきりしましたがね」

「……なら一体？」

「わかりません。似たような状況でのテストもしたのですが……どうもムラがありました……」

「偶然だったんじゃぁねぇの？」

「その線もありますが……驚いたことに、彼は致命傷となる攻撃は全て回避したんです。
避けられなかったのは、怪我する心配の無いほどのものだけで……」

「まったくわからないね……条件があるということ？」

「分かりません。だからこそ、私は彼をフラスコ計画に参加させたのです。
（……しかし、反射神経でなければ予知能力でもない……ならば彼の異常は一体？）」

「だが、袴よ。それならばなぜやつに『時計台に毎日は来なくてもいい』などと言ったのだ？
実験をしようにも、やつがいなければ意味がないだろう」

「そうですね、主な理由としてはすでにパーティーが全員揃っているということです。
たしかに彼のことは気になりますが、君達のほうが実験しやすいですからね。
そしてもう1つは彼を自由に動かすためです。彼に任務を任せられるように。彼のようなタイプは、実戦でこそ結果が出る場合がありますからね。」

結局その日、六道直人の異常が明かされることは無かった。
むしろ、彼の異常性について謎が深まるばかりであった。

## 2．1話　『予測できないからですよ』（後書き）

作「早く本編に入りたいと思いつつ、まだ入れない…たぶん次回は他のメンバーとの邂逅になると思います。」

六「あのメンバーと……？」

作「さぁ、はたして六道は彼らと向き合えるのか？　というかその前に『拒絶の扉』を通ることができるのか！？」

六「……え？　大丈夫でしょ？」

作「通れなかった場合、六道は退学……連載終了？」

六「……え？いやいや嘘でしょ？」

作「ではまた次回！！」

六「おい、ちょっと！！　まさか3話で終了とか言わないよな！？俺の異常さえまだ分かってないんだよ！？」

## 3話　『一三組の一三人！！』（前書き）

小説を書いていて……「自分も学校休めたらなぁ」とか思っちゃいました。

でも本当にめだかは授業どうしてるんでしょう？　先生がちゃんと教えてるんでしょうか？

……まあ、めだかなら先生はいらないんだろうなぁ……先生より頭いいだろうし。

## 3話　『一三組の一三人！！』

……眠い。昨日徹夜でゲームをしたツケが回ったか。
どうも推薦の合格が決まってから生活リズムが完全に崩壊してしまっている気がする。

二度寝するか。どうせ、一三組に登校義務は無いしこのまま寝ても何も……【お兄ちゃん、電話だよ！　お兄ちゃん、電話だよ！】
……寝たかったなぁ。

どうやら神様は不真面目な学生を許すことはないようです。

「……もしもし、なんでしょうか理事長？」

『おはようございます六道君。今から時計台地下に来てくれませんか？
この前は全員を集められませんでしたが、今日は以前いなかった【一三組の一三人】がそろっています。彼らに君の事をぜひ紹介しておきたいのですが……』

「……わかりました。できるだけすぐに行きます」

『では、お願いしますよ』

……もう少し時期を選んでほしい。断ったら他の方々が怖いし断れないんだよ。
……十三組に入ったの間違いだったのかな？　ただ学費のことかを考えたら、やっぱり今のがベストなんだよな……

だがもう仕方がない。とりあえず朝食をとってすぐ行こう。
なんだかんだ言って時計台行くの初めてなんだよなぁ。
入学式が終わって三日がたつというのに、呼び出しが来ないから……すっかり遊び呆けてたなぁ……

―――時計台入口―――

「「いらっしゃいませ。」」

……門番って双子？　似すぎだろ！？　髪以外まったく同じじゃん！！
こいつらも異常者か……

「えー、理事長に命じられて来ました。一年一三組の六道直人です。通ってもいいんですか？」

「ああ、君のことは理事長から聞いているよ」「好きに通ってくれて構わないよ」

「「ただし、この『拒絶の扉』を通ることができたらだけど」」

「……拒絶の扉？」

なんなんだこれは？　パスワードを入力しなきゃ、この巨大な扉は通れないのか？

俺、パスワードなんて聞いてないのだが……おい、理事長！！

「6桁の暗証番号を入力すればこの扉は開く」「ただし、1人通るたび番号は変更されていく」

「フラスコ計画に関わると言うのなら、」「これくらいクリアしないとその資格さえ無い！！」

いちいち番号変わるってどういう仕組み？　金かけすぎだろ。

と言うか……えぇぇ、今更資格無いとか困るんですけど。理事長になんて言えばいいんだよ。

「……これってみんな適当にやってるんですか？　他の先輩達は？」
「「適当ねぇ……そんなんで開くなら誰も苦労は……「あ、開いた」……って嘘ぉぉ！？」」

「いや、勘で入力しただけなんですけど……」

むしろ俺がビックリだよ！　……まぁよかった。これで少なくとも退学の心配は無いな。
さぁ理事長が言っていた地下二階に行こうか……ってまたパスワード！？なんでエレベータにまで……

「エレベーターの暗証番号はさっきみたいにはいかないよ！！
キーボード入力による漢字かな交じり文字制げｎ「あ、できた」ｎなしの……っってえぇぇぇ！！」

いや、だってできたんだもん。
……ていうかもう一人の門番はどうした？　なぜ黒髪がいない？
……門番だからか。一人おいてきたのか……

「……なんでもう1人の先輩はいないんですか？」

「理事長の命令でね。君が通ることができたなら、一人は君に付いているようにと」

また理事長か。俺のことを観察するためか……まぁいい、どうせ地下2階なんてすぐに……！？

「って！なっ……！？」

「よう、お前が新入りか？なんだ、まだお子様じゃねえか」

あんたに言われたくない！！つーか誰だあんた！？
なんでエレベーターから十人くらい一気に出てくるんだ！？

「冥利君、落ち着けよ。ソイツ、何がなんだか分かってねえようだぜ？」

包帯巻いている方、ご親切にありがとうございます。本当にどういう状況ですか、これ！？

「ケケケ、そうだな。なぁにただ待ちくたびれたから直接来てやっただけだよ。
六道とかいったか？　俺は『一三組の十三人』の一人、雲仙冥利だ。風紀委員長を兼任している」

……風紀委員長？めずらしいな。
十三組だし、登校義務もないのに学校の委員会に所属するなんて……飛び級かこの身長は……

「俺は名瀬夭歌。フラスコ計画の今期統括を任されてやってる。」

先ほどの包帯を巻いている方。この人が統括か。
……個性豊かなあのメンバーを良くまとめられるな……その包丁はどの様に刺さっているんですか？

「私は古賀いたみ。名瀬ちゃんの大親友だよ！」

名瀬さんの親友と自称している露出狂の先輩……寒くないんですか？

「だがちょうど良かったぜ。俺達はこいつらと一緒に居たくなかったからな」

「……後ろに居る人たちですか？」

「なんだ、やっぱ分かるか。
……あぁそうだ。後ろに居るのは『裏の六人（プラスシックス）』といわれてるやつらだ」

言われなくてもわかる。この三人はまだいい。だけど他の人たちはなんというか……次元が違う！！
都城先輩ではないけど……もう、見ただけで異常だとわかる！わかってしまう！！

「自己紹介は終わったか？俺は裏の六人の一人、糸島軍規だ。仲良くしてね」

「湯前音眼だよ。仲良くしてね」
「百町破魔矢なる者です。仲良くしてね」
「筑前優鳥……らしいんだ。仲良くしてね」
「鶴御崎山海という。仲良くしてね」
「上峰書子と申します。仲良くしてね」

……すみません先輩方、仲良くできそうにはありません。
なんだこの人たちは？　都城先輩達もあんまり近寄り難い印象はあったが、この人たちとはもう関わりたくないとすら感じるぞ！？
本当にレベルが違う！
これが理事長が言っていた、異常度が異常なメンバー『裏の六人』！！

「ま、お前は正直言ってあんまり俺達とは関係を持たねぇかもしれねぇがな、一応宜しくたのむぜ。
……くれぐれも、俺達と敵対するようなことにはならねぇようにな……」

軽い挨拶だけ交わすと先輩達は立ち去っていく。

……動けなかった。これが『一三組の一三人』！！

全員と顔を合わせては見たけど……だめだ。一人として敵に回せない

理事長は辞めてもいいと言っていたけど無理だ。その瞬間、まちがいなく俺はやられる！

俺は知らぬうちに、戻ることのできない茨の道を歩いていたのかもしれない……

## 3話　『一三組の一三人！！』（後書き）

作「ちゃんと拒絶の扉を通れたか…そしてけっこう早くなった『一三組の一三人』との邂逅」

六「あの人たちは本当にヤバイ…！！　異常が異常すぎる！！」

作「ふむ、まぁあまり『一三組の一三人』内での描写を書くつもりはないですけど……正直言うと早く原作に入りたいので……」

六「結局俺はポジション的にどっちなんだ？」

作「微妙なところなんですよ……私の中では、『理事長の命で生徒会、めだかちゃんに協力している裏で監視』みたいな感じにしようかと……」

六「暗躍かよ……」

作「でも、ネタが思いつけば変わるかもしれません。皆さん楽しみにお待ちください」

## 4話　『遊びに来たんだよ』（前書き）

早く原作に入りたいと思いつつも、まだ入れないという……善吉たちも出したいな……

## 4話　『遊びに来たんだよ』

「いい天気だなぁ」

皆さんこんにちは六道直人だ。

今日は久しぶりに外出して気分転換しようと思っている。昨日の『一三組の一三人』とのあいさつですっかり気分が滅入ってしまって……

学校には行っていないが、それが何か？　別に大丈夫だと思うんだけどな。

今、他の学生も学校終わってる時間だし……ちなみに今日のスケジュールを順に追ってみると……

１３：００　起床
１３：３０　昼食
～１６：００　自由行動
１６：００～　外出

……あれ？なんか俺だめ人間になってね！？　異常と呼ばれようと、だめ人間になるのはいやだぞ！

……明日から頑張ろう。中学時代は真面目だったんだし、俺ならやれる！俺の本気を見せてやる！！

「あれ、君ってもしかして直人？」

「？　……君は？」

俺が一人決意を固めていたら箱庭生が声をかけてきた……だれだこの女子？こんな小さい友達いたっけ？

「あれ、おじいちゃんから聞いてない？
あたしは不知火半袖（しらぬいはんそで）。理事長はあたしのおじいちゃんなんだよ」

「へぇ、君が理事長の……俺は六道直人だ。よろしく」

「こちらこそ、おじいちゃんから直人のことは聞いてるよ。謎の多い不思議な子だってね」

「……あの人は一体俺をどういう眼で見てるんだ？」

人のことを勧誘しておきながらその評価は酷くないか？
……まあ、謎だから勧誘したんだろうけど。

しかし、もう少しまともな評価をしてほしい。推薦で入ったんだし……

「まぁまぁいいじゃん。それより今日はどうしたの？一人でほっつき歩いて。」

「気分転換に遊びに来たんだよ。最近どうも精神的に参っててね……」

「じゃぁさぁ、あたしとどっか行かない？おなかも空いてるし、どっか食べに行こうよ。」

……それも悪くないか。小腹も空いてるし、誰かと一緒にいるのも久しぶりだしな……

コイツはそんなに、俺にとっては危険ではないようだしな……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

……前言撤回。

完全な誤算だった。なに、この子？　小腹とかの問題じゃないん

だが？
軽く十人前は食ってたな。終いにはメニュー表を指差して「ここからここまで全部お願いします」とか言うから止めたけど……俺の財布の中身が……！？
俺、１０００円分も食べてないはずなのに……！？　なのに、なんで！？

「ごちそう様でした。直人今日はありがとね」
「……あぁ、もう二度と会わないことを願う」
「つれないなぁ、いいじゃん楽しかったし」

……楽しいか。たしかに高校入ってから友達と遊んでなかったな……学校にも行ってないし……

「まぁ今日はありがとね。学園であったらまたよろしく。おじいちゃんにもよろしくね」
「おう、またな不知火」

そう考えると不知火が高校で始めての友達かもしれない。
友達か……高校ではそういう関係をちゃんと作らないとな……今の俺に作れるかどうかは疑問だがな。

だけどその前に、理事長に生活費もらわないとな。
……あぁそういえば言ってなかったけど、俺は理事長に金銭的支援を受けている。
フラスコ計画の報酬とやらで何がいいかと聞かれたのでお願いしたのだ。
あなたの孫が搾り取ったんだ……たっぷり返してもらうぞ！！

## 4話　『遊びに来たんだよ』（後書き）

作「めだかや善吉を差し置いて、不知火初登場！！」

六「……あいつの胃はどうなってるんだ？」

作「せいぜい気をつけるんだね。またこういうことあるかも知れないし……」

六「理事長もよく金あるな……連絡してすぐ部下の人が届けてきたぞ」

作「そこらへんもフラスコ計画関連でしょう。孫の食費のせいで破産するなんて笑えないし……」

六「そんなんでフラスコ計画つぶれたら苦労しない……」

作「さぁ、めだか達の出番はいつになるのか！？それは作者さえ知りません！！」

六「……って、え！？お前も知らないの！？」

作「うん、次回出るかもしれないし、まだ小話を挟むかもしれません……まぁ皆さんお待ちください。お願いします」

## 5話　『変わったのが俺だけなのか…』

鬱だ……

皆さんお久しぶりです、六道直人だ。今現在、俺は生徒会総会というものに出席している。

……え？　一三組生は参加しなくてもいいはずだって？

いや、そうなんだよ。そうなんだけど……理事長がね……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

『六道君、君には生徒総会に参加してもらいます。』

『……何故ですか？』

『新しい生徒会長のことはご存知でしょう？　黒神めだかさん。彼女を見てきてほしいのですよ。』

『支持率９８％となればやはり気になりますか？』

『そのとおりです。彼女は異常とみて間違いないでしょうが、君に

も見てきてほしいのです。』

『……わかりました』

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

断ると何かしらあとで嫌なことがあると思ったからなぁ……引き受けてしまったんだよなぁ……

でも嫌だ。別に総会が長いから嫌だとか言う理由じゃない。
……周りの空気が嫌だ。他の一三組生は一人もいないし……

俺、一三組になってからは本当に学校にほとんど来なくなってしまった。
登校義務もないし……そうしたらさっきから周囲の会話がほとんど俺に関することばっかりで……

『あの人誰？』『知らなーい、どこのクラス？』
『ひょっとして転校生？』『……何？なんだか胸が……熱い……！』

……うん、最後だけちょっとちがったけど……友達どころか知り合いが一人もいない！！
常識的に考えて、こんな早い時期に転校生なんてまずいないだろうに！！

嫌だ、今度からは学校に来るだけでも来よう！　理事長の呼び出しもめったにないしな。

……お、そんなこと言ってる間に早速生徒会長のおでましか……
箱庭学園第９８代生徒会長、理事長が注目している異常者――黒神（くろかみ）めだかが……

『……世界は平凡か？　未来は退屈か？　現実は適当か？』
『安心しろ、それでも……生きることは劇的だ！』

……うん『異常』だ。
就任式の最初の挨拶で、しかも1年生で、こんなことを言える者が居るだろうか？　いや、居ない！！

……頼むからもう少し『普通』にやってくれよ、めだかちゃん。
本当に変わらないな、お前は……

『そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ』
『学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで悩みごとがあれば迷わず目安箱に投書するがよい』
『２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受けつける！！』

……変わらないなぁめだかちゃんは。きっと善吉も一緒なんだろう。
……変わったのが俺だけなのか……
なんでお前達はそんなに、何も知らない他人のために行動することができるんだ？
何も知らない他人を、信じることができるんだ？

結局人は、つながりの無い人のことなんて、簡単に裏切るというのに……
自分を守るためなら、他人どころか親友さえ見殺しにするという

のに………

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

『違う！！俺は何もしてない！！』

……そうだ、あの時……

『本当なんだ！信じてくれ！！』

あいつにだれも味方しなかった……みんなあいつを見捨てた……
自分を守るためにも、責任を全てあいつに擦り付けて、押し付けて

……

『直人……お前も、なのか……？』

俺もあの時、あいつになにもしてやれなかったんだから
自分のことばかり守ろうとして、自分のことばかり考えて……

## 5話　『変わったのが俺だけなのか…』（後書き）

作「遂に原作主人公、黒神めだか登場！あと、原作に突入！！」

六「…なんだか、話が急に飛んだ気がするが…」

作「細かいことは気にしない！これで原作の主要人物も出せるわけだし…これからもよろしくお願いします！！」

## プロフィール　六道直人（前書き）

よく考えたらまだ直人のプロフィールを掲載していないことに気付きました……ただ異常についてはまた後日に……

追記：異常のことは別に掲載します。

## プロフィール　六道直人

六道直人（ろくどうなおと）

容姿　茶髪　黒目

１７５ｃｍ　６４ｋｇ

性格

普段から落ち着いてはいるが、理屈ではなく本能で動くことが多い。

基本的他人をあまり信用せず、自分から友達を作ろうととはしない。

だが、本当に信用できる者とは名前で呼び合うなど、フレンドリーになる。

友達や仲間を大切に思い、いざという時は自らを盾にしてでも守る。１人称は俺。

経歴

かつて異常の検査をしたが、彼の異常が解明される前に病院が崩

壊してしまい、結局彼の異常が明かされないまま、彼は幼少期を過ごした。そのときにめだかや球磨川、善吉と出合う。
めだかや善吉とは小学校も同じだったが、彼らが小学校４年生のときに、親の転勤を理由に六道は引越し。
高校受験の際は親の負担を減らすため、学費免除があるフラスコ学園を推薦受験した。

異常者であるが総合能力が高く成績も優秀。

小学校時代はめだかの『見知らぬ人のため』という意見に賛同していたが、
中学校時代に彼の友達が『ある暴力事件』に巻き込まれ、濡れ衣を着せられたことから、
『なぜ何も知らない者を信じられる？　いつ裏切られるかもわからないというのに……』と疑い始める。

それからというもの、初対面の相手に対して警戒心を持つようになる。

## プロフィール　六道直人（後書き）

作「活動報告に書きましたが、金曜から月曜まで投稿できません。そのため、これが私の作品の今週最後の更新です。」

六「できれば皆、作者を見放さないでくれ！な！？」

作「次回投稿するとき、まだ見てくれる方がいることを信じています。では、また来週！！」

## 6話　『仕事のほうはきっちりやりますから』（前書き）

久しぶりに話を書いたんですけど……話が少し飛んだ気がする……

そして短いです、かなり。

## 6話　『仕事のほうはきっちりやりますから』

……え？

「……今、何て仰ったんですか理事長？」

「君に黒神さんの観察をお願いしたい、そう言ったんですよ。六道君」

めだかちゃんの観察を、俺が？

理事長いわく、めだかちゃんは能力・人格・人望といったあらゆる面で見ても、『異常』が『異常』すぎるほどであり、今後フラスコ計画に重要な影響を及ぼす可能性がある。

ゆえに俺に彼女の動向を観察してほしいとのことなんだが……

「でも、どうして俺なんですか？他にも適任がいるんじゃないですか？」

「君が一番動かしやすいからですよ。他の『一三組の一三人』はみな実験が進んでいます。

それに君は補佐という形で計画には今はほとんど参加してませんからね」

……あれ？俺ひょっとして結構面倒なポジションに？　雑用みたいじゃん！！
まさかとは思いますけど理事長、本当は雑用がほしかったとかじゃないですよね！？

「そのかわり、しばらく君には彼女のほうに専念してもらいます。フラスコ計画のほうはしばらく気にしないでください。私からの連絡が無い限り、報告も構いません」

「……え！？いいんですか！？」

「はい、ただし、私が連絡した時は必ず報告に来てください」

やった！　それ滅茶苦茶いいじゃん！！
怖かったよ先輩達が……本当にまともな先輩がいないし……

「生徒会に入らない限りはどんな手段をとってもかまいませんよ。なんなら彼女達に会ったみたらどうですか？　幼馴染だったのでしょう？」

「……よろしいのですか？　観察対象に接触して」

「ええ、むしろその方が好都合です。できるだけ近くで彼女を観察してください。統括の名瀬さんには私のほうから言っておきましょう」

幼馴染か……でも小学校で別れて以来、何の接点も無かったからなぁ……

覚えてるかな？　まぁ、めだかちゃんは記憶力も異常だったから覚えてるだろうけど……善吉はどうだろう？

「その辺は考えておきますよ。とにかく仕事のほうはきっちりやりますから」

「頼みますよ、六道君。期待しています」

さて、どうしようか。影から観察というのも見つかったら面倒だしな……会ってみるか。

六年ぶりに、めだかちゃんと善吉に……

果たして二人は俺のことを覚えているかな？そして俺のことをどう思うのかな？

## 6話　『仕事のほうはきっちりやりますから』（後書き）

作「次回、幼馴染と接触します」

六「…会いたいような…会いたくないような…」

作「複雑だね。まあ、まともな友達いないわけだし、会ったほうがいいんじゃない？」

六「…それ言わないで、マジへこむから」

作「次回は原作で言うと……多分、日向との一件あたりだと思います。これからまたよろしくお願いします！！感想いつでもお待ちしています！！」

## 7話　『久しぶりだな』（前書き）

原作で言うと、一話の日向を倒した次の日です。

つまり、善吉が生徒会入りを決意した日です。

## 7話　『久しぶりだな』

「ここが……生徒会室か」

来てしまった……遂にここに。
いやー、やっぱいざとなると緊張するな六年ぶりだし……仕事のためにも、そして何より俺自身のためにもここには来なきゃいけなかったわけだけど……

しかしめだかちゃん大丈夫か？
さっき聞いた話だと昨日の役員募集会で姿を現さず、役員が増えなかったそうだが……まぁそのときは善吉と二人でなんとかなりそうなわけだが……

ま、今はとにかく二人との再会をはたすとするか…

「失礼しまーす。生徒会長、黒神めだかさんはいらっしゃいます……か？」

「ん？　黒神なら私だが？」「！？　な、ちょ、ちょっと待て。これは違っ……」

「……失礼しました」

俺はおもわず扉を閉めてしまった。
いやーめだかちゃんますます大胆になったな、学校で善吉を押し倒すなんて……善吉も別に否定なんてしなくていいのに……ただ鍵くらい閉めような。

さて、二人の『お楽しみ』を邪魔しないうちに帰るとするか……

……

……って違う！！　危ない、挨拶すらしないまま帰ってしまうところだった……ひとまず接触だけでもすませておかないと……もう一回行ってみるか

「……えーと、今大丈夫ですか？」

「問題ないぞ、入ってよい。先ほどはどうした？　入ってくるなり立ち去って……」

「いやめだかちゃん、俺達のせいだから……さっきのはマジ違うからな！？」

善吉必死だな……まあ大方、めだかちゃんが善吉に感謝したりして普段は見られないデレが出たんだろうが……

「しかし貴様……どこかで見た顔だな」

「……少なくとも、面識はあるぜ。めだかちゃん、善吉」

「……まさか貴様……直人か！？」

「え、直人って……まさかお前が！？」

……以外だ。めだかちゃんはまだしも、善吉まで覚えているとは……友情って大切だね。

「そうだよ。久しぶりだな、めだかちゃん、善吉……六年ぶりかな？

幼馴染の六道直人だよ。相変わらず元気そうで何よりだ」

「驚きだな、貴様までこの学園に来ているとは……小学校で別れて以来、一度も会っていなかったからな……」

「俺も驚いているよ。いきなり生徒会長なんてやってるし、学校で善吉を襲ってるし……」

「直人！　だからあれは違う！！　というかお前わかってて言ってるだろ！？」

わかっているけど何か？　そのほうが面白いんだって。

……本当にこの感覚も懐かしいな。こうやって三人が仲良く集まるのも、本当に久しぶりだ。

「まあまあ、いいじゃんか。二人とまたこうして会うことができて俺は本当によかったよ…」

「まあ、そうだな。まさかここで会えるなんて思っていなかったからな。

……っていうかお前何組なんだよ？　今までお前のことどのクラスでも見かけなかったぞ？」

ああ、やっぱそれ気になるか……別に言っても問題ないか。
二人はフラスコ計画のことも、『一三組の一三人』のことも知らないわけだし。
もしここで俺が言わなくても、どうせ後でめだかちゃんが生徒名簿で調べるだろうしな……

「知らないのは仕方が無い。俺が所属しているのは登校義務の無い一三組なんだから……」

「!?　直人も同じクラスだったのか!?」

「といっても、めだかちゃんみたいにまじめに登校してないけどね」

そう、十三組ではまず、まともに授業を受けてるのがめだかちゃんと雲仙先輩だけなんだから知らなくて当然だ。
まして俺は学校にもほとんど登校してないわけだし……

「ならば明日からでもちゃんと学校に来るが良い。なんなら私が指導してやるぞ?」

「……ちゃんと教えてくれるのか?言っとくけど、俺が教えてほしいのは採点ミスを回避する方法ではないんだけど?」

「私を誰だと思っている！善吉の受験勉強を教えたのは私だぞ？」

「……そうなのか、善吉？」

「ああ、『先生が普段やるように普通に解き方を教えてくれ』って言ったら……少し時間がかかったけど教えてくれたよ。完璧なほどにな。

めだかちゃんのおかげで、俺もこうやってこの学園に問題なく入学できたわけだしな」

なるほど、それなら俺も今度から学校に来ようかな。

一三組はどうせ授業だって自習なわけだし、そのほうがめだかちゃんの近くにいられるしな。最近勉強してなかったから不安だし……

「じゃあそうするよ。なんなら授業が終わったら生徒会の手伝いもするけど？」

「そうか。なんなら生徒会に入らないか？ちょうど人手が足らなくてな…」

「……いや俺はあんまり目立ちたくないしやめとく。毎日手伝えるか分からないしな……」

「そっか、まあ手伝ってくれるだけでもありがたいぜ。なにしろまだ会長と庶務しかいないからな…」

「？　善吉って庶務なのか？　副会長とかじゃなくて？」

善吉は確かに一部の才能が特出したりしているわけではないが、それでも能力は高いほうだし、なにより努力家だ。他人への配慮もきちんとしている。めだかちゃんとの付き合いも長い。

だからこそ、善吉にはもっと良い役職が与えられていると思っていたのだが……

「うむ、善吉には手柄を立てて這い上がってもらうからな。
……それに私は副会長には多少は私に敵対心を持つ人間を入れたいと思っている。
生徒会内部に反対勢力も入れなければ、私が独裁者になる可能性があるからな」

……ああ、やっぱりだ。やっぱり二人とも変わってなんかいなかった。
めだかちゃんはただ純粋に人を信じてる。
そして善吉もそんなめだかちゃんを助けるために、守るために強くなってたんだ。

……そんな二人を騙してるのか、俺は……大切な幼馴染を……

「反対勢力ね……でも大丈夫かい？　生徒会のトップ2に反対勢力を置くなんて。
めだかちゃんが望まない形で、生徒会（お前達）を裏切るかもしれないぞ」

「なんだ、心配してくれるのか？　だが無用だよ。
私は敵対心を持つものなら誰でもいいというわけではない。
面と向かって対立でき、あくまで学園のために裏切ってくれる者のことしか任命するつもりはない！！」

「ああ、それに本当に自分のためなんかに動くような奴は、俺が近づかせねぇ！！」

「……一途だな。でも気をつけたほうがいい。信じれば信じるほど、裏切られた時の代償は大きいから……」

そう、俺も結局はお前達に嘘をついているんだから……

「……直人。貴様何かあったのか？私達と別れてから……」

「いや、何もない。ただ、人の本質を知っただけだ」

「……どういうことだよ。俺達にも言えない事なのか？」

「いや、本当になんでもない。それよりこれからよろしく頼む。何しろ、学校に来てなかったから友達もいなくってさ、二人と会えたのは本当に助かったよ」

「……まあ良い。話したくないと言うなら無理して話させるつもりはない」

「こっちこそ、よろしく頼むぜ」

「ああ」

そう、これでいい。お前達は何も知らなくて……人を純粋に信じ切れるのだから……

俺はもう無理だから……友達を見捨てて、今また幼馴染のお前達に嘘をついているんだから……

## 7話　『久しぶりだな』（後書き）

六「最後……暗っ！！」

作「明るく終わらせようと思ったんだけど…こうなっちゃいました」

六「で、俺は今度から学校にも通うことになったと…」

作「少しでもめだかといられるようにね。次からはどんどん進んできますよ！」

六「……いつになったら俺の活躍する場面が出るんだ？」

作「わかりません！！」

六「おい！！」

## 8話　『最初から先輩ですか……』（前書き）

本当は1話にまとめるはずだったんですが…６０００文字とか普通に超えたので前半、後半にわけました

## 8話　『最初から先輩ですか……』

一一一年一三組教室一一一

「……であるからして、この式を積分して、さらにtの式を代入し……」

「そこで、xの式にして……おお！　できた！！」

すばらしい、めだかちゃんの教え方は！！
本当に教えてくれるのか心配だったが、その心配は無用だった。
要点を絞って順に解説してくれるし、計算ミスや誤字などもちゃんと指摘してくれるから本当に助かる。

……ただ、やはりこういうところを見てもめだかちゃんは『異常』なんだとわかる……
小学生のころは「めだかちゃんだから」とか「やっぱりすごい」など、さも当然のように考えていたが、冷静に見ていると優れているどころか優れすぎていると感じる。

そもそも、他人に勉強を教えるという単純な作業もとても大変なことなのだ。
少なくとも教える内容をきちんと理解しなければならないし、それを言葉で、論理を分かるように説明しなければならない。

自分があっているかという不安も必ず感じるはずなのに……

それをめだかちゃんはノートや教科書を見ずに教えているのだから……

「さて、そろそろ生徒会室に行くぞ直人。善吉もすでに向かっているだろうからな」

「了解〜」

しかも、めだかちゃんもその周りの人間もそのこと自体を『普通』だと認識してしまっているのだから……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――生徒会室―――

俺達が着いた時、めだかちゃんの言った通りすでに善吉は生徒会室の中にいて、一人で鏡と向き合っていた。

善吉は制服変えたんだ。そういえば、生徒会専用の制服があったな。

普通は白なんだが、生徒会役員は黒……俺も今度頼んでみよう。

生徒会に入るわけではないが……一人だけ浮いている存在みたいになるのは嫌だからな。

「くっそーやっぱサマになんねーなー。大体、俺黒い制服似合わねーよ。

だから制服白いこの学校に来たってのに……」

「いやそんなことはない。善吉には黒が良く似合う」

「……というかお前、そんな理由でここを選んだのか？」

てっきりめだかちゃんと同じ高校に行きたいとかそんな理由だと思っていたが……制服の色って……箱庭学園の制服が黒だったらどうしたんだろう……

なんだかんだ良いつつも、色々こじつけて結局同じ学校に入っただろうけどさ。

「うお！だから何でお前はいつも後ろに居んだよ！」

たしかに……めだかちゃんっていつも気がついたらいるよな……ミスディレクション？

「見てくれが気になるなら内側にジャージでも来てみたらどうだ？」

「いや、めだかちゃん。それはいくらなんでも……」

「……うわなんだコレ！？　デ、デビルカッケェ！！　反骨精神の塊みてーだ！」

「……え！？」

人吉君、美的センス０だね。わかってたけど……昔はそんなでもなかった気がしたけどなぁ。

「……目安箱をチェックしてきたぞ。明日から目安箱の管理は貴様らの仕事だ。
本生徒会の最優先事項なのだから、くれぐれも手を抜くでないぞ？」
「ＯＫ！！」
「ふむ……どうやら今回はきちんと記名をしておるようだな」
どれどれ……本当だ。陸上部所属、二年九組　有明……最初から先輩ですか…
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
「あの……ごめんね。本当ならあなた達下級生に相談するような内容じゃないんだけど……」

現在、有明先輩から話を伺っています。

「遠慮はいらんし構えるな。私は誰の相談でも受け付ける！」

「（なんでこいつは先輩に対しても偉そうなんだろう……）」

「（なんでめだかちゃんは上級生に対しても敬語を使わないんだろう……）」

「（なんでこのコ制服の下にジャージ着てるんだろう……）」

「それで相談っていうのは、このことなんだけど……」

有明先輩が出したのはボロボロに切り裂かれたスパイクと、『陸上部辞めろ』と書かれた紙。つまり、脅迫状だな……

「……酷いな」

「私、今度の大会で短距離走の代表に選ばれて、二年生で代表に選ばれるなんて滅多に無いことだからすごく嬉しかったんだけど、三日前……スパイクがこんな風にされて……」

「……犯人に心当たりは？」

「わかんない」

まあ大方、有明先輩と同じ種目でレギュラーの座を取れなかった、あるいは奪われた人の仕業だろうが……ここまでするとはな……

「あたしこんなことをしたかもしれない人たちと一緒に練習なんか出来ないよ！

みんな怪しくて！　誰も信じられなくて！　不安で不安で……夜も眠れないんだよ！？」

「……安心しろ有明二年生。眠れぬ夜は今日で終わりだ。この黒神めだかが、今日中に犯人を突きとめてやる！！」

「は！？」

「今日中！？」

ちょっとちょっと、めだかさん？貴方何言ってるの！？無理でしょ！？

一日で犯人を突き止めるなんて……普通に考えて無理！！それなんて鬼畜ゲー！？　高橋名人の冒険島も真っ青だ……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「大丈夫なのかよめだかちゃん。今日中とかまた大言壮語しやがって……この程度の材料じゃ犯人の特定なんてまず無理だぜ？」

「ああ、情報が少なすぎる。陸上部の女子では在るだろうが……そうなると人数を絞り込めたとしても１０人にはなるぞ？」

「――『陸上部女子』で『陸上暦はそれなりに長く』『短距離走を専門』とし『有明二年生と同種のシューズを愛用』『左きき』で『文車新聞を購読』し『２３区に住んでいる』――誰かだ」

「「………は？」」

え？　何この言葉の連続は？　ひょっとして今言ったのって……

まさか……

「まさか今の……もうわかったのか！？」

「もちろんだ」

「え？　どういうことだよ、直人？」

「めだかちゃんが言ったのは……この犯人に当てはまる特徴だよ」

「マジ！？」

「まあスパイクの切り口、脅迫状の切抜きで推理したんだろうが……」

「「（推理力がありすぎて気持ち悪い！！）」」

なんだろう、今善吉と同じことを考えた気がする。

……あの短時間でここまで見極めたこの推理力も当然『異常』すぎるんだが、脅迫状の手紙の切り抜きは全ての新聞の、全ての記事を覚えてなければ無理なもの。

理事長の言うとおり、これはもう人体では……脳構造的に不可能なことだ！！

普通の人間には、一生かかってもできないこと！！　それを普通にやるなんて……！！

……本当に、めだかちゃんは何者なんだ！？

「そういう直人も分かっていただろう？」
「え！？　お前わかってたの！？」
「ん？　俺？　……まぁ、なんとなく？」
「わかってねえじゃん！！」

そう言うなよ善吉。俺はめだかちゃんみたいな完璧超人ではないということくらい、お前だってわかっているだろう？

というか、比較対象が違いすぎる。

「他人の努力を否定する行為、頑張る人間の足を引っ張る行為、私はそういう行為が大嫌いだ！
私は怒っているぞ善吉、直人！　目安箱の投書に基づき生徒会を執行する！！」

……めだかちゃんの怒りに反応したのか、紅茶から泡が出ている。
まさか紅茶にまで影響を及ぼしたのか！？　急激な温度上昇による沸騰……？　怖すぎるだろ……
犯人の方、もしも近くにいるなら今すぐ自首することをお勧めする。
じゃないと……どうなるか保障できないぜ？

「ま、そのためにはひとまずさっきの条件に当てはまる奴を探さねえとな……あいつに聞いてみるとするか……」

「？　善吉、あいつって誰だ？　心当たりでもあるのか？」

「ああ、俺の親友でこういうときに役に立つのがいるんだよ。任せておけ」

善吉の親友で、おまけに情報収集に長けている……そんな奴いたか？

少なくとも、俺が転校してから知り合った奴なんだろうが……

## 9話　『人を信じすぎだよ……』

―――箱庭学園グラウンド―――

「陸上部所属、三年九組諫早先輩。
有明先輩と同じ短距離を専門とするアスリートで利き腕は左。同じスパイクを履いているのは見てのとーり！
お住まいは２３地区で３年前から文車新聞を購読中……だってさ♪」

善吉の親友というのは……何を隠そう、俺もこの前会った不知火だった。
何でも善吉と同じ一組であるらしい。たしかに俺が転校してから知り合ったという点では間違ってはいなかったが……

その不知火は先ほどから携帯をいじって調べている……まさか理事長関係か！？

「いつも思うんだが、不知火、お前どっからそういうの調べてくんの？」

「俺もそれは気になるんだが……」

「あひゃひゃ。人吉や直人が正義側のキャラでいたいならそれは知

らないほうがいいね♪」

「……そうか、なら聞かないでおこう」

……やはりまともな手段ではないようだな。フラスコ計画も関係しているのかもしれないし。

しかし、本当にこの学園は一三組でないにしても曲者が揃ってるな……

「ちなみにあの諫早先輩、有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしてます♪」

「「！！」」

……これは、さすがに

「……決まりだな」

「ああ。三年が二年に抜かれたとなれば屈辱だろうし、犯人はほとんど彼女で間違いないだろう」

条件に当てはまり、反抗動機も十分ある……意外とあっけなかったな……あとは彼女と接触して……

「しかしな善吉、それに直人よ」

「！！」

「……ちなみにいつからそこにいた？」

突然めだかちゃんが善吉の上から顔をだした。本当に神出鬼没だ。

「実質的な証拠はまだ何も無いのだ。ほとんどという言葉の意味は絶対ではない。

状況証拠だけで他人を悪人と決め付けるのはよくないな」

「……じゃあどうするつもりだ？」

「上から目線の性善説もいーけどさ、物的証拠なんて集めようがねーだろ。俺ら警察じゃねーんだから！

まさか本人に直接聞くわけにもいかねーし……ん？」

まったくだ。俺たち学生が証拠なんて集められないし、指紋は調べようが無い……ってあれ？
めだかちゃんはどこ行った？

「ふぅー」
「諫早三年生、貴様が犯人か？」
「！！」
「いや、このスパイクの件なのだが……」

……あの馬鹿ーーー！！！　馬鹿だ！！　頭のいい馬鹿がいる！！！

不知火は腹を押さえて大爆笑してるし、善吉はずっこけてるし……俺も力が抜けて地面に座り込んでますけど何か？

「しっ、知らないっ！！」
「……？」

「「あっ逃げた！！」」

「いやまあそりゃ逃げるだろ、追うぞ！」

「いや、善吉よ。陸上部が本気の本気で逃げたというのに、普通に考えて俺達が追いつけるわけがない……ってめだかちゃんがもう追いついてるーー！？」

嘘だろ！？　めだかちゃんあれを追いつくのか！？
スタートだって明らかにめだかちゃんのほうが遅かったというのに……

万能型（オールラウンダー）が専門家（エキスパート）にその専門分野で勝つなんて……
同じ女子高生で筋力の差も言うほどないはず……なのに……！！
当然だけどめだかちゃん小学生の時よりあきらかに能力が高くなっている！！

あ、言っている間についに追い越したよ……諫早先輩を飛び越えて……どういう脚力だよ……

「諫早三年生、貴様が犯人か？」

「（こ、殺される！！）ちっ、違う違う！！　知らないってあたしそんなの！
有明さんのスパイクにスパイクにハサミなんて入れてないし！
『陸上部やめろ』なんて手紙も出してない…！！」

ああ、終わった……諫早先輩、めだかちゃん相手といえ焦りすぎ。
それは自白しているようなもんですよ？

死刑宣告だ……

「……そうか。知らないと言うか……知らないのであればそれでよいのだ。練習の邪魔をして悪かったな」

「……え？」

……え？　黒神さん？

ええー、諌早先輩涙をこぼして怖がっていたというのに……何もしないの？

「あ、あの…ちょっと…」

「ああ、言い忘れていた。さっきは本当にいい走りであったぞ。貴様の普段からの鍛錬の程がうかがえる。その調子で精進し続けるがよい！

私は、がんばる人間が好きなのだ！」

いいのかよそれで……そのまま立ち去って……

「……なんなのあのコ？　人を疑うってこと知らないの……？」

「違いますよ諌早先輩。めだかちゃんは人を疑うことを知らないんじゃない。

――人を信じることを知ってるんだ！！……今回だけは俺も会長の流儀にならっときますよ。

あんたはもう二度とあんなことしねえって……信じてやる！」

善吉も善吉だな……これでめでたく終了ってことね……

「はぁ、終わりかよ……」

「ん？直人は生徒会長様の処置に不満でも？」

「違うよ不知火。別に不満があるわけじゃない……ただあいつらは、あいつらのやり方は綺麗すぎる。
少なくとも俺は人を許すという行為がそんなに簡単なこととは思えない。
今回はいいかもしれないけどな……ったく、あいつらは人を信じすぎだよ……」

「なるほど☆　直人にもいろいろ事情があるようで」

「まあな……不知火、お前のためにも言っておくが余計なことはするなよ？」

「了解～また楽しいことがあったら呼んでね♪」

めだかちゃんのあの超人なまでの能力。
それでもあいつがあれだけの人望を持つのは、お人よしすぎるあ

の性格がなすものか……

甘すぎるのも考えものだと、俺は思うがな……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翌日

ーーー生徒会室ーーー

「くっそー、このカッコよさがどうして伝わんねーかなぁ」

「……善吉、それはもう諦めたほうがいい」

こいつはいつになったら成長するんだろう……せめてこれだけは変わって欲しいのだが。

「あの……人吉くん、六道くん。ちょっといいかな……？」

「あっ、有明先輩！」

「こんにちはー！　今日は何か変わったこととかありましたか？」

「う、うん。それがその……今度はロッカーから代用してたスニーカーがなくなってて……」

「「！？」」

なん……だと……！？　まさか諫早先輩が改心しなかったのか！？
俺も今回は大丈夫だと思ったから手出しも口出しもしなかったというのに……！！

「それでね……代わりに新品のスパイクとこんな手紙が入ってたんだけど……どういうことだと思う？」

そこには新しいスパイクと、切抜きで『ごめん』と謝罪文がはられた手紙があった。なんだちゃんと解決したのか……
……あれ？スニーカーとった意味なくね！？

こうして事件は無事解決した。有明先輩も今晩からはぐっすり眠れるだろう。……ただし……

「おのれ犯人め……今度はスニーカーを盗むとは……」

「「（なんでこいつあれだけ賢いのにバカなんだろう……）」」

めだかちゃんがそのことに気付くのはもう少しあとの話である。

まあ、それもめだかちゃんの個性なんだし構わないけどな。

## 9話　『人を信じすぎだよ……』（後書き）

作「六道驚きすぎじゃね？幼馴染だったのに…」

六「めだかちゃんが成長してるんだよ！！」

作「えっと、私の中でのめだかちゃんは、
最盛期＞＞＞現在＞＞超えられない壁＞小学校当時
となっています。また、小学校当時は嫌がらせ程度のことしかなかったので、めだかが犯人をあんな風に許したことが六道には初めてだった…みたいな？」

六「だって……簡単に許しすぎだろ…」

作「そして、ちゃんとめだかの観察は忘れない六道……はたして今後どうなるのか！？」

## 10話　『確かにお前は』

ーーー生徒会室ーーー

皆さんこんにちは、六道直人だ。今日も生徒会の仕事だ……

いや、フラスコ計画の実験よりはいいんだけどな……最近また依頼が多くなってきたような気がする。

……みんな困りすぎじゃね？

あ、ほら。善吉が今日も依頼を持ってきたよ……

「そんなかんじで本日の投書は三件。バスケ部部室の普請要請、学食の新メニュー開発、そして……子犬探しだ」

「「子犬探し？」」

「去年の冬休みに学園内ではぐれちゃったんだってさ。それからずっと行方不明で、そいつを見つけてくれって相談だ」

また面倒くさそうな依頼が……ま、不知火が場所さえ調べてくれればすぐか……

というか、この学園はペットの連れ込みが許可されているのか？

「……ではバスケ部と学食の件は私が担当しよう。子犬探しの件は貴様らに任せる」

「？　珍しいな。俺達に一任するなんて…」

「貴様らは……私のことを知っているであろう……動物が、苦手なんだよ」

……忘れてた。そういえばそんなことあったな。小学校時代に、トラウマじみたことが……

それなら今回は仕方が無い。善吉の手伝いに専念するとするか……

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一箱庭学園敷地内一一一

現在、不知火の案内の元、迷子の可愛そうな子犬を捜索中……

「で、不知火どうなんだ？　心当たりの場所とかあるのか？」

「まあ心当たりっていうかさー、ちょっと前から学園内に住みついてる犬がいるらしいってだけなんだけど……えーっとたしかこの辺に……」

……？？？

たしかになにかいましたよ？　でもあれって……まず犬じゃなくね！！？

なにか「グルル、グルルル」と、獣の鳴き声みたいなものが聞こえるんですけど！？

模様しか一緒なのないじゃん！！

大きさとかも、もはや子犬レベルじゃねーぞ！

「……不知火さん、あれは散歩中に飼い主とはぐれた可哀想な犬じゃねーよ」

「そうだよ、あれは……大都会にいる金持ちが飼いきれなくなって手放した、ワシントン条約で保護されているなにかだよ！！」

善吉、声が震えてるぞ？　……俺もだけど……

「やだなぁ二人とも。あれはボルゾイって種類のれっきとした犬だって！
別名ロシアンウルフハウンド！」
「「ほら！　ウルフって入ってんじゃん！！」」

恐らく、今までで一番善吉と息があった気がする。
でもどうする？　このメンバーだと軽く死人が出そうだぞ？

ガウ、ガウッ！！ガウッ！！！

だから、鳴き声がもはや獣だーーーー！！！！！　あれはもはや狩る側の鳴き声だぞ！？
なんで犬の咆哮で空気がこんなに振動するんだよ！！？

「ほら☆　『お兄ちゃんこっちにおいでよ！一緒に遊ぼうよ！』って言ってんじゃん☆」
「どうだろうな。俺には『ヒト共！今度俺様の眠りを妨げたら食い散らかすぞ！！！』って聞こえたけど」
「善吉、俺には『お兄ちゃん、お腹が空いたからそこの黒いお兄ちゃん食べてもいい？　というか食べるよ？』って聞こえたが？」

「なんで俺限定！？　……嘘だろ！俺今からあいつ捕まえるの？マジで？
くっそ……不知火、お前手伝ってくれるんだよな！？」

「え！？　あたしが！？　なんで！？　やだよ！！
あたしは親友のあんたが酷い目にあうのを安全圏から見ていたいだけの人間なんだから！！」

「いや……お前は人間じゃねえよ……くそ、直人！！　お前はもちろん来るよな！？」

「すまない善吉。俺の中の『生きろ！』というギ〇スが、ここは逃げろといっている！！
それほどまで危険な相手なんだ……ロシアンウルフハウンド！！」

「お前は幼馴染の俺だけを死なせる気か！？　おまけにそのネタ、作者が別に書いてる小説のものだろ！！」

「？　善吉何言ってるの？」

善吉よ…メタ発言するなよ。新規のお客様や知らない読者が混乱するだろうに……
そして不知火。情報通のお前が知らないのか……いいのか作者？

「善吉、行くんだったらこれを持って行くんだ！」

不知火が出したもの…ソーセージ？

ああなるほど。そいつで餌付けにしろ、ということか……意外と冴えてるな不知火……

「んーん、そーじゃなくってさ。コレをおなかに仕込んでね？　『ぎゃああ！内臓食われたー！　……と見せかけて実はソーセージでした☆』……ってギャグやって欲しいの☆」

「そのギャグさあ、やった二秒後に本当に内臓食われるよな？」

「……というか、お前は本当に善吉の親友なんだよな？」

善吉、死ぬなよ……無理かもしれないけど。骨は拾ってやるから。だから……安心して逝け！！　俺もすぐ逝くから！！　お前を一人では逝かせないから……多分！！

「くそっ！！　とりあえず貸せ！　うっ、うおおおおお！！」

ついに善吉が死を決意し、犬に立ち向かっていく……あ、犬起きた。

そしてそのまま善吉に飛びかかり……！？

「ぎゃああ！　内臓食われたー！　……と見せかけて実はソーセー……ってマジでぎゃあああっ！！」

善吉よ…お前の勇姿、確かに俺が見届けたぞ！！

……あ、やばい。マジで内臓が出てる！？

「ああステキ！　ステキ！　人吉君てば超ステキ☆」

「……って違うだろ！！　善吉今行くぞ！！」

手遅れかもしれないが善吉救出のため、俺も戦場へと駆けて行った……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翌日

ーーー生徒会室ーーー

「……というわけで、ターゲットを発見したがその後の逃走を許してしまいました」

無理でした。俺？　……善吉を連れて逃げることが精一杯でしたけど何か？

本当にね、俺にはめだかちゃんみたいな化け物並の戦闘力なんて持ち合わせていないんだよ。いたってそこらへんは普通なんだよ。

「要するに行方知らずになっていた半年間で、子犬は成犬になってしまったというわけか？」

「……それどころか完全に野生化してる……」

あの姿、獰猛性、凶暴性……どれをとってもペットとはまず呼べない。

あのままだと依頼主まで犠牲になる恐れがある。

「だけどほっとくのはまずいだろ。近いうちに保健所が動き出すぞ。」

「……保健所だと？」

「ま、俺達がやるしかないな。

依頼人のためにも俺達で片付けないと……不知火も嫌がるだろうが協力はしてくれるだろうしな……」

「……やはりその件、私が動こう！

私の不甲斐なさが原因で、貴様らが他の誰かに頭を下げるなど我慢ならん！！」

お！？　めだかちゃんが突然やる気になった！！
なんとも頼もしい！！　これでこの一件、解決したも同然！！

——————————————————————————————
——————————————————————————————
——————————————————————————————
——————————————————————————————

———箱庭学園敷地内———

そこには犬のような格好をした人がいた。

「「誰だ！？」」

「当然私だ」

「……お前じゃなければ良かったのに」

……犬のきぐるみって一体どこから……そしてなぜそんなに自信満々なんだ？

「お嬢様。つかぬことをお聞きしますが……なんですかその格好は？」

「ん？　みてわからんか？」

「……俺は見てわかるけど聞きたいな」

「……同じく」

「ターゲットに私を仲間と思ってもらう作戦だ！
動物と触れ合う時は、こちらから歩み寄ってやることが大切だからな！」

……俺たちの時がとまった。そんな気がした。

「（……ねぇ人吉。このお嬢様ってひょっとしてさぁ……）」

「（あ、気づいた？　うん。一週回って基本バカだよ）」

「（……本当に残念なタイプだな……）」

本当、こういうところはめだかちゃんも完璧ではないというか……人間らしいっていうか……

「それで、あやつがターゲットか。なかなかどうして可愛らしいワンちゃんではないか！」

どこらへんが？　というかあれ犬じゃないですよ？
……捕まえられたとしても、飼い主はちゃんと飼いきれるのか？

ザッザッザッ

めだかちゃんがどんどん犬に近づいていく……お？　犬が起きたか？

「さあ、怖くないぞ。撫でてやろう。ぎゅっとしてやろう。一緒に遊んでやろう！
だから、さあ！　私に貴様を触らせろ！！」

……黒神さん？なんかゴゴゴゴゴって音が聞こえるんだけど気のせいかな？　威圧感を感じるですけど気のせいかな？
そして最後なぜか命令になってるんですけど……ってうおっ！！
犬がいきなり走ってきて俺たちの後ろに隠れた！！　何かにおびえるように、震えながら……

「え……と、人吉くん、六道くん。これどーゆーコト？」

「今のでわかったろ不知火」

「めだかちゃんが動物を苦手なんじゃなく、動物がめだかちゃんを苦手なんだよ。」

小学校の飼育係でも動物はめだかちゃんの前に姿を現さなかったし、動物園の猛獣でさえ、彼女の前に姿を現さなかった。
動物は力あるものには屈する。そしてめだかちゃんの力が圧倒的すぎるんだ。

だからこそ、今回も最初から自分でやらなかったわけだ。
こうなるということがわかっていたから。
また、こうして傷つくのが嫌だから。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翌日
ーーー生徒会室ーーー

「えー、というわけでポルゾイ君は無事飼い主の元に帰りました。
子犬の頃よりも若干おとなしくなってるそうですが、一件落着には違いないかと」

そう、依頼は解決した……だが、その解決に貢献した当の生徒会長様が……

「……私はあんな可愛いらしいワンちゃんにもなついてもらえないなんて……私はどうしようもなく駄目な人間だ……」

「いや、まあな？　確かにお前は人間だよ？」

結局、めだかちゃんも優れているだけで、喜んだり、落ち込んだりもする。
ちゃんと人間味のあるやつなんだ。

……あの獰猛な獣がひとにらみで屈服したということ……
動物に人格は通用しない。圧倒的な力の前にひれ伏すだけだ。
つまり、めだかちゃんがあれほどのステータスを持ちながら生徒会長として存在していられるのは、彼女の人格や心といったもののおかげなのか……

## １０話　『確かにお前は』（後書き）

作「一回あのセリフを誰かに言わせたかった」

六「…果たしてあのネタを理解した人はいたのだろうか？」

作「いいのかそんなこと言って？実はあのセリフが君の異常のヒントに…」

六「そんなわけあるか！！阿呆かお前は！？あれか！？俺の異常は『絶対遵守の王の力』とでも言う気か！？完璧に都城先輩と能力かぶるじゃねえか！！」

作「……たしかに！！人を従えるという点でかなり似てる……」

六「えー、作者が大変おかしな発言をしましたが、俺の異常はそんなものではないので……みなさん惑わされないでください」

作「面白いと思ったんだけどなぁ……」

## 11話　『本当に頑張った！！　』

「善吉、直人。今日は柔道部に行くぞ」

……めだかちゃんに善吉を呼んできてくれといわれて連れて来たら……下着姿のめだかちゃんがいました。

＊＊＊＊直人がめだかちゃんの着替え姿を見るのが初めてだったりする……＊＊＊＊

ピシャッ、バチッ、シャーッ、パチッ、パチッ！！

善吉が目にも止まらぬスピードで戸締りをする。なんという速さ！！　本当に手馴れてるな……

「鍵をかけろ！　カーテンを閉めろ！　人目をはばかれ！　何遍言ったらわかるんだ！！」

「？　さっぱりわからん。
練り上げたこの肉体を衆目にさらすことに一体何を躊躇う必要がある？」
「「むしろ見せたいみたいなこと言ってんじゃねえよ！！／／／／／／」」

古賀先輩といい、めだかちゃんといい……この学園には露出狂の女子しかいないのか！？

＊＊＊露出狂の方が少数です＊＊＊

本当に将来が心配になってくるな……善吉、がんばれよ……

「……それで？　今回はなぜ柔道部に？」
「うむ。柔道部部長の鍋島3年生は知っているな？　彼女から目安箱に投書があったのだ」
「鍋島って特待生（チームトクタイ）の鍋島猫美さんか？　柔道界の『反則王』と呼ばれたあの人？」
……誰ですかそれ？　まったく知らない。

まあすごい人というのはわかったが……『反則王』？　海賊王でも目指したのか？
　にしてもこの作者の小説『～王』って多いな……どうでもいいが……
「部長とは言えもうすぐ引退だからな。そこで私たちに後継者選びを手伝ってほしいそうだ。
　何にせよ行ってみようではないか。柔道部といえば懐かしい顔にも会えるだろうしな」
「……ああ、そうだな」
「ん？　誰のことだ？」
「ああそっか、直人は知らないか。俺達の中学で『破壊臣』って呼ばれた悪党が今、柔道部にいるんだよ」
「……それがなぜ柔道部に！？」
「そんなの知るかよ」
　なんかさっきから善吉の様子がおかしいような……そいつと何かあったのか？
――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「やーやー！　ようこそいらっしゃいませ！　ウチが差出人！　柔道部部長の鍋島猫美でっす！
　本日はどーぞよろしく！」

　この人が反則王の鍋島先輩……意外なキャラだな、気さくだし……もっと攻撃的、あるいは陰険な人かと思ったが……けっこう良い人っぽいな。人望もありそうだし。

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもらうぞ」

　だからなんで先輩に敬語を使わないの？　仮にも最上級生だぞ！？　どう考えても失礼だろうに……

「うんうん。頼りにしてるで黒神ちゃん！」

握手してるし。分かり合うものでもあったんだろうか？　あるいは上下関係にうるさくない人なのか？

……それともこれもめだかちゃんの人望なのだろうか……

「あー、そーやその前に！　ジブンに挨拶したいゆー奴おんねん。阿久根！　おーい阿久根クン！」

「直人、あいつだよ。阿久根高貴。二年十一組所属で特待生でもある」

「あの人か……」

なんだ？　この金髪ロン毛は……この人も『破壊臣』には見えないんだけど……めだかちゃんによって改心したやつか……

だが、スポーツ選手がこの髪型で良いのか？

しかし……『主要人物でありながら、人気投票でトップ五はおろか十位以内にも入れず、自分より上位のモブキャラに励まされそうな奴』だな……

１１組……つまり特別（スペシャル）。この先輩も様々な面で能力の高い人か……

「ご無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にお気をわずらわせてはいけないと控えておりましたが、ずっとあなたに再会できる日を心待ちにしておりました」

確かにめだかちゃんを心酔する人は少ないが……ここまでくるとレアだな。普通に部員がいる前で跪いてるし。

「……硬苦しい真似は止せ阿久根二年生。貴様ほどの男がそのように振舞っては示しがつくまい」

「いえ、誇りこそすれ、あなたにかしずく姿を恥とは思いません。今の俺があるのはあなたのおかげなのですから。めだかさんにはいくら感謝してもし足りない――！？」

「私に感謝してるのならば頭を下げるな！　胸を張れ！！」

「は、はい！！　めだかさんの御心のままに！！」

きもい……マジきもい。大切なことなので2回言いました。

善吉だってもはや呆れを通り越してるし……上級生でもあれはマジないわ……正直言って関わりたくない。

『裏の六人』には及ばないが……

「おっと。それはそれとして生徒会を執行せねば。後継者、つまり新部長の選定だったか。
とりあえず貴様は特別枠だ阿久根二年生。善吉との再会を楽しんでくるがよい。」

まだ「はわわん」としてる人がこっち来たよ。浮かれすぎだろ……ってあれ？

なんかこの人……顔も、雰囲気も変わったような……なんというか、敵意むきだしというか……

「……久しぶりだね。えーっとキミ名前なんだっけ？」

「人吉善吉クンですよ。ところでアンタ一体誰ですか？」

「虫が！　相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出してるらしいな。
言っておくが、めだかさんの支持率が１００％に達しなかったのはキミのせいだぞ！！」

「カッ！　あんまり意地悪言わないで下さいよ！
人格者で通ってる柔道界のプリンスが下級生いじめなんて、ファンの子が知ったら泣いちゃいますよ？」

……何、この空気？　俺、アウト・オブ・ガンチュウ！！

「フン！　俺は心身ともにめだかさんに仕える者だ。
めだかさんのためになるなら、毒蛇の如く嫌われようと望むところだ！」

「カッ！俺は虫で、アンタが蛇ですか」

……帰りたい！！　今すぐ全力でこの場から離れたい！！　この場に俺の居場所はない！！
もういっそ時計台でいいから、フラスコ計画の実験でもいいから、今すぐこの場を立ち去りたい！！！！

「……ところで人吉クン。話は変わるが、先ほどからキミの隣にいるのは誰だい？
生徒会は今、役員は他にはいないはずだが？」

「ああ、直人のことですか。こいつは俺やめだかちゃんの幼馴染で、六道直人といいます。

この間再会したんですよ。最近は生徒会の仕事をよく手伝ってくれてます」

「……はじめまして、阿久津先輩！！　貴方の噂は私のような者の耳にも届いております。

『柔道界のプリンス』とまで呼ばれるほどの実力者にして魅力あふれる人格者！！

さらには勉学にも秀でていらっしゃると。まさに私の憧れです！！

私も学園のために、誠心誠意努めていく所存です！！　これからよろしくお願いします！！」

……頑張った。本当に頑張った！！　営業スマイルも問題ない！！　まさに完璧な……完璧な挨拶だ！！

誰か褒めて！！　本当にこれは賞賛に値すると思うんだけど！？

「ああ、こちらこそよろしく。共にめだかさんのためにも頑張ろう！！」

「光栄です！！　ありがとうございます！！」

「……いやぁ六道君は行儀が良くて助かるな。キミと違って！　これなら生徒会も安泰だな！！」

「ハッ！　本当ですよね！

歳が一つ上というだけのアンタみたいな人にも礼儀正しくいられるんですからね！！」

「なんだと！　この虫がっ！！」

「阿久根先輩！！　それよりもめだかちゃんが選定を始めるみたいですよ！！　見届けましょう！！」

「……そうだな。ありがとう六道クン」

疲れる……多分、今までの依頼の中で一番疲れる！
もうヤダ。めだかちゃん頼むからさっさと終わらせてくれ！

「さて、私に言わせれば柔道は教わるものではなく、学ぶものだ。
それゆえに！　まずは選定してやろう、貴様達の値打ちをな。
我こそはと思う者から名乗り出よ！　全員まとめて一人残らず！
私が相手してやろう！！」

……いったいどこから出てくるんでしょうかこの自信は？　なぜに天地魔闘の構え？
ま、めだかちゃんがそこらへんの『普通（ノーマル）』や『特別（スペシャル）』に負けるとは思わないが……

「ククッ！　ナメられたもんやなー、我が栄光の柔道部も！」
「無理からぬ話ですよ。いくら専門分野と言っても、めだかさんと勝負になるのは俺かアンタくらいでしょう。
あとは精精――」
「よぉし！　だったら最初は俺からだ！！
俺は副部長の城南！　フツーに考えたら次の部長は間違いなく俺だろうし！」

お！　さっそく勇者が現れた。ひとりでめだかちゃんに立ち向かうとは……なかなか勇敢な人だな。
副部長だし、実力もありそう……

「ヒヒ！　それにこれ、うっかりおっぱいとか触っちゃっても、不可抗力ってことでいいんだよな！」

ヒュッ

「勿論だ」

グシャ

……

「しかし伝わらなかったか？　私は全員まとめてかかってこいと言ったつもりだぞ？」

……前言撤回。いやらしいことを考えていた変態副部長は一瞬でめだかちゃんに投げ飛ばされました。
だいたいそういうことは間違っても口に出してはだめだろうに……みごとなかませ役だな……

「……おいしいなあ城南クン。阿久根クン、『あとは精精――』誰やって？」

「誰でもありませんよ。しかし……さすがだなめだかさんは。中学生の頃より輝きを増している！」

この人、普通の状態ならまだ良い人なのに……完全に自分の世界に入ってる……
駄目だコイツ……早くどうにかしないと……！！

「……ウチはそうは思わんけどな。あのコはできることができるだけやろ？　不可能を可能にしとるわけやない。
それよりは凡人のくせに天才（バケモン）に付き従っとう自分の方がよっぽどスゴイやん。なぁ？　人吉クン？」

ん？　鍋島先輩が善吉に興味を持ち始めた……いや、最初から気になっていたのか？
……善吉は善吉で顔を赤くしてるし……

「付き従ってるっていっても、俺はあいつに振り回されてるだけですよ。生徒会だってムリヤリ入れられたようなもんです」

「そうか無理やりとほざくか…だったら俺が変わってやろうか？
思いつきで言ってるわけじゃない。
めだかさんの同情心に免じてこれまで見逃してきたがさすがに潮時だろう。
何もできない虫とはいえキミももう高校生だ。そろそろ独り立ちするべきじゃないのかい？」

また始まったよ……嫌な感じだな。
この人、完璧に善吉を引きずりおろそうとしてるよ……めだかちゃんを心酔してるのは本当みたいなんだけどな……

「……独り立ちできてねーのはどっちですか。何もできない？
変な変態をめだかちゃんに近付けないことくらいのことはできますよ？」

あ、いかん。善吉も相当キレてる。一発触発の空気だな……よほど中学でなにかあったと見える。

「まーまーケンカはやめーや二人とも。ここは神聖な柔道場やでー？　なんやったらどーや？　ここで柔道で決着つけるゆーんは？」

鍋島先輩、仲介に入るのはいいんですが一体何を……！？　まさか！！

「ほんで阿久根クンが勝ったらジブンら交代や。
阿久根クンは生徒会に入り、人吉クンは柔道部に入ってウチの柔道の後継者になる」

「……鍋島先輩アンタ……ひょっとして最初からそのつもりで投書したんですか？」

やっぱりそう思うよな、善吉よ。

「うん！　人吉クンみたいながんばり屋さんが、ウチはめっちゃ好きなんよ☆」

……さすが反則王。考えることまでズルイ。善吉の勝率が限りなく低いということまで見抜いて……

普通（ノーマル）と特別（スペシャル）の対決……善吉には荷が重い！！

## １１話　『本当に頑張った！！　』（後書き）

作「やっと阿久根が登場した…」

六「俺あの先輩苦手だよ…」

作「原作どおり次回は善吉ＶＳ阿久根。感想いつでもお待ちしています！」

六「また次回！！」

## 12話　『よくやった』

「ほんだらルールは柔道部恒例の阿久根方式な！
無制限十本勝負　対　無制限一本勝負！　阿久根クンに十本とられる前に一本でもとれたらジブンの勝ちや人吉クン！」

厳しい……相手が10本決めるまでに1本というのは簡単に思えるかもしれないが、特別相手（スペシャル）には厳しすぎる！
おまけに今回は柔道。反則を取られやすい上にラッキーパンチなんてない競技だ。

だが、それでもやはり……善吉がここでいなくなるとは思えない……！！

「フン！　尻尾をまいて逃げなかったことだけは褒めてやろう。ああ、でも虫に尻尾はなかったか」

「なんですか、逃げるってアリだったんですか。先に言ってくださいよそういうことは」

いや、善吉。それは男としてどうなんだ？　めだかちゃんだって見てるぞ。

「逃げる？　そうなものアリなわけなかろうが。
誰からの相談でも、誰からの挑戦でも受け入れる！　如何な内容

でも如何な条件でも！　如何な困難でも如何な理不尽でも享受する！　それが箱庭学園生徒会だ！！
人吉善吉、私は貴様に負けるなとは言わん……しかし、逃げることは許さんぞ！」

「……めだかちゃん、今日も一段と厳しいですね」

さすが生徒会長。見事に幼馴染の逃げ道を封じた。
これで逃げれば善吉は色々と失うからな……プライドとか、信頼とか、友情とか。

「一気に決めるぜ……先手必勝！」

「人吉クン。俺は何もキミの全てを否定しているわけじゃない。めだかさんについていくために費やしてきたキミの努力は認めている。
……だが努力以外は認めない……後手必殺！！」

「ガ……ガハァッ！？」

「立て、あと九本だ。キミはめだかさんの前で何度も何度も虫のようにひっくり返り、醜態をさらして負けるのだ」

なんともまあ綺麗に投げ飛ばすものだ。さすが優秀（スペシャル）、といったところか。
これは阿久根先輩も本気だな。今の言葉も決して嘘ではないだろう……

「あー、さっすが阿久根クン、綺麗な一本やなー……ホンマ天才的で、つまらん柔道や……」

「……どうやら随分、天才が嫌いなようだな、鍋島三年生」

「うん、嫌いやで。大嫌いや。黒神ちゃんのことも阿久根クンのこともな。
才能を努力で踏みにじりたぁてウチは柔道をやっとんのよ」

「……それで善吉が欲しいんですか。才能ではなく、努力で這い上がってきた善吉が……」

珍しいな。普通、特待生（チームトクタイ）、つまり特別（スペシャル）は基本能力（スペック）が全体的に高く、悲観的になることは少ないんだが……こういう風に考える人もいるのか……

「なるほど。さすが柔道界の反則王は言うことが違う」

「ま、黒神ちゃん。天才は天才同士、凡人は凡人同士でつるもやないか。
ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんかし人吉クンくれや。取替えっこしよーで」

「ふむ、ならば安心しろ鍋島三年生。天才などいない」

……『天才はいない』、か———凡人はそんなこと言わないんだよめだかちゃん。

天才がまるで言い訳をするみたいに言う言葉だ、それは……

……まずい。言ってる間に善吉が九本取られてしまった！

だけどすごいな善吉。今まで一個も反則を取られていない！！

「……訂正しよう。努力以外に、その根性も認めてやる。

普通九回も叩きつけられたら立ち上がれないものなのだがな。一寸の虫にも五分の魂が……いいだろう！　その往生際の悪さに敬意を表して、もう楽にしてやろう！

めだかさんの足を引っ張る仕事も、今日で終わりだ！人吉クン！！」

「善吉！！」

お！？　ここでついにめだかちゃんからの応援か！？

「いつ如何なる場合においても決して、私は貴様に負けるなとは言わん！！

……だから勝って！！！　貴様がいなくなったら私はすごく嫌だ

ぞ！　困るぞ！　泣いちゃうぞ！！」

……何ですか、このかわいい生き物は？　マジかわいいんですけど……ギャップありすぎるんですけど……キャラ違うんですけど……

『きゅる～んっ』としてるし、目もウルウル震えてるし……俺でさえ今までこんな顔見たこと無かった……俺が転校する時でさえこんな顔しなかったのに……

あ、善吉倒れそう。俺も倒れそう。

「あーーーっもうっ……お前が泣くとこなんて見たことねえし、見たくもねえよ！！」

「うっ、うおおっ！　しっ、しまっ……！　がっ……！！」

双手刈り……！！　善吉が……勝った！？　めだかちゃんの応援スゲーな……

「文字通りアンタの足も引っ張ってみました――――ってところで、何を認めてくれるんでしたっけ？　阿久根先輩」

「……負けを認める！　一本取られたよ……」

よくやった、善吉……

「お疲れ様、善吉。はい、タオル」

「お、サンキュー」

「……阿久根先輩も、お疲れ様でした」

「……ありがとう」

「あなたの真剣さ、俺にも伝わりました。また会う機会があれば、よろしくお願いします」

「ああ、その時はこちらこそ。人吉クンもすまなかったな」

「……お互い様ですよ」

こうして柔道対決は善吉の勝利で幕を下ろした。
これで善吉もまた生徒会にいられるし、良かった……かな？

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

翌日

「ふーん、そんなことがあったんだー。
大変だったねー！　遠慮せずにあたしを頼ってくれたらよかったのに！」

「……お前に頼ってたら何がどうなってたっつーんだよ」

「今回は肉体労働みたいな感じだったからな……だいたい不知火がいたら、事態がもっと酷くなってただろ」

「直人ひっどーい！」

今、善吉と昨日の話を聞いた不知火と一緒に生徒会室へと向かっている。
確かにこいつの情報収集力は認めている……が、強そうには見えないもんな。

「で、本題の後継者問題はどうなったの？」

「結局めだかちゃんの推薦で城南って人が継ぐことになったらしい。
元副部長で勇気も一応あったみたいだし、妥当な線だろう」

「ああ。鍋島先輩もこれで俺のことは諦めてくれるはずだし、一件

落着ってとこだな」

「……そうだねぇ。諦めてくれるといいねぇ」

甘いよ善吉。ああいう人は多分、しつこく付きまとってくるぞ……

「じゃあプリンスは？　阿久根先輩はどうなったの？」

「さてな。なんか居辛くなって柔道部やめたとか聞いたけど……ま、俺にはもう関係ねえ……」

……生徒会室に入ると、なぜか阿久根先輩がいた……下着姿で……不知火、あまり騒ぐな。気持ち悪いぞ。

「なっ……なんでアンタがここにいるんだ！」

「ん？　ああ人吉クン。六道クンも一緒か。フッ、確かにキミを追い出すのは諦めたが、俺はめだかさんを諦めたわけではないのでな」

まさか……この人……

「鍋島先輩からも三行半をつきつけられたのでね――――本日付で生徒会執行部書記職に任命された二年十一組の阿久根高貴だ。よろしくお願いします。先輩！」

……やっぱりか。まあ、役員が増えれば仕事も楽になるし、別にいっか。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふざけんなぁぁっ！！！」

善吉は良くないだろうが……あんなに精一杯戦ったのにな……

「まあ、次の機会というのがこんなに早いとは思いませんでしたが、これからよろしくお願いします。阿久根先輩」

「ああ六道君。共にめだかさんを支えよう！」

箱庭学園生徒会執行部――――現在三名。

## 12話　『よくやった』（後書き）

作「柔道部編、終了」

六「阿久根先輩は本編どおりに書記に……」

作「でも本当にこの人1巻（単行本）ででてるのになんであんな結果になったんだろう？（人気投票）」

六「……キャラ的な問題？」

作「不思議だな……」

## 13話　『問題なのは……』

「早くも一ヶ月が経ちましたが……どうですか六道君？　黒神めだかさんと接触してみて……彼女の印象は？」

今日俺は理事長から呼ばれて、理事長室に来ていた。
めだかちゃんの監視を始めてからはこれがはじめての報告となる。

「すばらしい……というよりすさまじいですね。
生徒会長としての仕事はもちろん、彼女が公約の一つとしている目安箱。生徒達の悩み・問題を次々と解決しています。
始めは会長一人でしたが、彼女の幼馴染の一人、人吉善吉が庶務に。そしてつい最近、『柔道界のプリンス』とまで呼ばれた阿久根高貴が書記に任命されました」

「……つまり、今の生徒会は異常一人（アブノーマル）、普通一人（ノーマル）、特別一人（スペシャル）ですか。なんとも言えないバランスですね……」

「あまり二人を甘く見ないほうが良いですよ。
人吉善吉は十三年の間、黒神めだかの側から離れなかった唯一の男。阿久根高貴も、中学時代『破壊臣』と呼ばれ恐れられていたそうですから……」

「……そうですね。直で見ていたキミの意見です。参考にしましょう……それで、彼女の能力のことは……どのように思いました？」

……やはりそれを聞いてくるか……だが、俺とてまだめだかちゃんのことを完全に理解してないんだよな……

「わかりません。彼女が一体どういう異常（アブノーマル）を所有しているのかは。
しかしながら、完璧すぎる気はしますね……専門家以上の実力を見せ付けたり、とにかく彼女は強すぎる……」

「そうですか……」

「ですが、彼女とて天才でこそあれ、力だけある獣というわけではありません。
それでは生徒会長として認められないでしょうからね……」

「ええ。力がありすぎる者は集団では排除されるのが当たり前です。
君の言うとおり、彼女が今も生徒会長をつとめているという事実がすでにひとつの異常事態なんです」

そう、正直言って彼女のなすことの全てが最近では異常に思えて

きた。
まるで、黒神めだかという存在自体が「異常」であるかのように……

「黒神さんのことはこれくらいにしておきましょうか。今後も彼女のことはキミに一任しようと思います」

「……わかりました」

なんだろう……このまま何も起こらなければいいと思っている自分がいる。
あいつらをだましているというのに、あいつらと一緒にいたいと思う自分がいる。

俺にはその資格さえ、もうないというのに……自分で捨ててしまったというのに……

「ところで……六道君。キミ自身の『異常』については話す気はありませんか？」

「またその話ですか……以前も言いましたが、私の『異常』など、とても他の一三組生のように、『異常』と呼べるものではありませ

んよ」

「そうですか残念です。しかしながらキミのことは私も本当に知っておきたいのです。
名瀬さんもキミを一度実験しておきたいと言っておりましたからね」

「……申し訳ありませんが期待には応えられそうにありません。名瀬先輩にもよろしくお伝えください」

……冗談じゃない。なぜ自ら進んで人体実験に参加しなければならない！？
ただでさえ、あのメンバーに近づくだけでも度胸がいるというのに！！

「また連絡があればこちらに伺います。それまでは生徒会活動に参加しておりますので……」

「ええ、袖ちゃんのこともよろしくお願いします」

「……前向きに検討させていただきます」

俺はそのまま、理事長室を後にした。
できれば、ここにはあまり来たくはない。ここにいると、自分の立ち位置を思い出してしまうから……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「おー善吉。今日も花の世話か？本当にまじめだな」
「直人か。これも仕事の一つなんだからやるしかないだろ」
生徒会室に入ると善吉が花の水遣りをしていた。
めだかちゃんは目安箱の投書を一つ解決するごとに一輪の花を飾ることにしている。
しかし、わずか一ヶ月で生徒会室は花でいっぱいになっていた。

「しかし、この部屋もそろそろきつくなってきたんじゃないか？」
「そうだな。会長就任一か月でこの有様か……この分じゃ、学園中をお花畑にするっつーのも、あながち夢物語じゃ……」

ん？　生徒会室の扉からノック音が……
誰だ？　……阿久根先輩？

「やあ人吉クン、今日も雑務に精が出るね。
俺はキミのことを害虫だとばかり思っていたが、花を育てているところを見ると益虫なのかな？」

「……俺に対するいつもの悪口はともかく、なんですかその着こなし」
「なんで胸元を露出させてるんですか？　昔のロックスターみたいですよ」
「フッ、この阿久根高貴は生徒会の一員だ。会長のめだかさんを模範として見習う義務がある。
だから俺もめだかさんのように、胸元を露出する！！！！！！」

「……サタンかっけえ！！」

「……阿久根先輩、それは見習ってはいけないと思います。
そして善吉、お前は本気でそう思っているのか？」

どんどん馬鹿が増えていく……理事長にはもっと簡単に報告すればよかったな……
しかし、阿久根先輩じゃないが、めだかちゃんの真似を何でもしてしまうのは良くないな。特に制服のことは校則にも関わってくるし……雲仙先輩達、風紀委員会が関わってこなければいいんだが。

「そんなことよりめだかさんはどうした？　まだ来ていないのか？」

「そういえば俺も遅れてきたけどまだ見てないですね。
今日は自習も休んだので……善吉、知ってるか？」

「あー、目安箱に投書があったもんでね、会長自ら投書主を迎えに行ってるところです。
なにぶん、人材不足でしてね。そーゆー厳しい職場ですから。ま、やめたくなったらいつでも言ってください」

「やめたくなる？　フッ、ありえないね」

「そいつは上等。じゃあ今日もはりきって生徒会を執行しましょう！」

善吉もサマになってきたな。人手不足だし、阿久根先輩も今回が始めての仕事だから早く慣れていってもらわないとな……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「それでは八代三年生。詳細を聞こうか」

めだかちゃん……なぜにノースリーブになっているんですか？　もはや制服を私服と勘違いしていませんか？
阿久根先輩、あなたは袖を切り落とそうとしないでくださいね！？

「つーか、詳細ってほどのこたーねーんだけど。黒神さん、あんたに手紙の代筆をお願いしてーんだよ。
選挙ポスターなんかで見たんだけどさ、黒神さんて硬筆でも毛筆でもすげー綺麗な字ィ書くじゃんよ」

たしかにめだかちゃんの達筆は有名だ。小学校三年生の時に、名のある書家を三ヶ月で引退させたという伝説をもつ。

俺もめだかちゃんに教えてもらったり、ノートを見せてもらう時は本当に助かってるし……

「あたし、ガキん頃から字が汚いのがコンプレックスでさ、だからあたしの代わりに手紙を書いてほしいんだ、お願い！」

「ふむ、私が引き受けてもよいのだが……そういうことなら私より適任がおるな。

阿久根二年生、いや阿久根書記。貴様に初仕事をくれてやろう。貴様に全権を委任する。生徒会書記の実力をみせてやるがよい！」

「お……お任せください！　この阿久根高貴、必ずやめだかさんの期待に応えてみせます！」

ふむ、まあ書記に選ばれるくらいだし、実力だけをみれば何の問題もないか……となると問題なのは……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「……ふーん、確かにこの投書を見る限り、綺麗な字とは言えねーやな。
でも、今はケータイとかあるんだし、そんな気にしなくてもいいのに」

「やっぱり直接、手書きのものをわたしたいんじゃないか？　そういうことだってあるだろ」

「カッ、なんにせよ阿久根先輩も結構な達筆だったし、問題ねーよな」

あ、やっぱり字上手いんだ。本当に優秀だな、あの先輩。

「そう、何も問題はない。それが問題なのだ」

「……だね。実力・役職共に問題は無い。となると阿久根先輩がはたしてどうやって解決するか……が問題かな？」

「……？」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「書き終わりました。確認してください。めだかさん」

「……」

「いやー、大変でした！　なにせ女子の気持ちになって男子の恋文を宛てるなど初めての経験だったものですから……しかしその甲斐あって、かなりの名文が仕上がったと自負しています！」

「つまり、文面も貴様が考えたわけだ」

なんでも今回はラブレターの代筆をしてほしかったらしい。たしかにこれは手書きで送りたいだろうが……阿久根先輩……多分、それじゃ駄目だ。間違ってはいない……けど、正しくもない……

「阿久根書記……八代三年が意中の男に伝えたいのは……言葉か、それとも気持ちか……どっちだ？」

「……え？」

「貴様の字で、文章で…伝わるものとはなんだ？　思い上がるな！
人が人に代われるものか！
貴様なら彼女を諭してやれると思っていたんだがな……貴様には
失望した。もう何もしなくていいぞ」

「……！」

……めだかちゃんもけっこう厳しいこと言うな……これ普通の人
だったら軽く挫けるぞ……

「気にしちゃだめですよ。アンタは何も間違っちゃいない。例によ
ってめだかちゃんが正しすぎるだけ――」

「黙れ」

「……」

「俺は虫に慰められるほど、落ちぶれてはいない。そして一度や二
度拒絶されたくらいであきらめられるほど、できた人間でもない！」

「「！！」」

……自ら手紙を破り捨てた……どうやら大丈夫そうだな……

「……阿久根先輩、なんなら手伝いましょうか？」

「必要ない。六道クンの気持ちはありがたいが、今回は俺が委任された仕事だ！！　俺だけで解決する！」

強いなこの人。精神的にもこれほど打たれ強いとは……この人もめだかちゃんと付き添ってきただけのことはあるってことか……

——————————————————————————————

——————————————————————————————

——————————————————————————————

——————————————————————————————

その後、阿久根先輩による個人授業は一週間続き、八代先輩は意中の男子に自筆の手紙を出すに至ったそうだ。

血と汗と、心のこもったそのラブレターの結果は、個人情報保護の観点から伏せておくとして———

「うむ。終わってみたら百点満点の仕事ぶりだ。見事な手際だよ」

「一体何を評価されているのかわかりません。俺は当然のことをしたまでです」

「まあそう言うな。成果をあげた時は謙遜するでない。
私に貴様を、褒めさせろ――よくやったな阿久根書記。私が間違っていた……ありがとう！」

「こっ、こちらこそ！　ありがとうございますっ！　勿体ないお言葉ですっ！！」

……そこでその笑顔は反則だと思いますよ、めだかさん。阿久根先輩なんて軽く感動してますよ？

まぁ……こんな感じで……生徒会長黒神めだかの学園お花畑計画は、ついに生徒会室の外に進出したのだった……

## 13話　『問題なのは……』（後書き）

作「久しぶりに理事長登場」

六「あの人と最後に会ったのも一ヶ月前だったからな……すごい久しぶりだ」

作「六道がめだかちゃんを観察し始めて一ヶ月ですが、私がこの作品を書き始めてからも丁度一ヶ月となりました！」

六「あ、本当だ。始めたのが六月十六日で、今日が七月十六日」

作「このままがんばって続けていこうと思います！　感動いつでもお待ちしています！！」

## １４話　『なんという命知らずだ……』

生徒の自主性を何より重んじる箱庭学園。
その生徒会業務は多岐にわたる。

それが何を意味するかというと――――俺達の限界（めだかちゃんを除く）

……俺、役員ではないんだけどね……

「……人吉クン、俺生徒会やめちゃダメかなー？」

「あっはっは！　逃がしませんよ！　阿久根先輩☆」

二人ともやばいな。声にいつもの元気がない。体もそうだが、声まで震えている。
俺も人のこと言えないんだが……

「善吉、俺は実際役員じゃないし、そろそろ潮時かと……」

「何言ってんだよ直人。俺達友達だろ？」

「だから、友達として見守っててやるから……」

「いや六道クン。終わる時は一緒だよ」

……だめか。というか実際俺が手伝わなければならないってことでもないんだよな。

確かに同じ生徒会に所属することで業務連絡も知ることができ、めだかちゃんを直で観察できるけ　ど……高校生活の中で一番疲れている気がする。

「……しかし、さすがにめだかさんはさすがだなあ」

「俺達の十倍は働いているはずなんですけどね」

どうやって両手同時作業で書類を片付けてるんだ？

脳の情報処理とかで考えても人間には不可能なことなんだが……

もはやスーパーコンピュータ並じゃないか？

「否、さすがの私も少し参っている。部活動が本格化してきたのが大きいな。部費に関する陳情が多すぎる！」

「カッ！　副会長はともかく、会計の不在はやっぱ痛いな」

「元柔道部の人間から言わせてもらえば、部費は一円でも多い方がいいですからね。陳情する連中の気持ちはわかりますよ」

「大体部活動が多すぎるんだよこのガッコ」

「……だな。たしか格闘関係の部活だけでも二十はあったか？」

なぜか箱庭学園は部活動が多い。ダーツ、ボウリング、ボブスレーといった部活動まで存在している。

これも理事長が生徒の様々な異常性を調べるために許可したのかどうかはわからんが……それにしても多い。

「とはいえ、増額できる部費の予算枠は限られておる。全員で分け合えば、雀の涙ほどしか行き渡らん。公平性をかくことになりそうだな———どうしてもと言うなら、私が私財を投じてもよいのだが……」

「「どうしても止めて！」」

ちなみにめだかちゃんは自活している。

中学一年の頃、当時の数学界で最大の難問と言われていたジュグラー定理を難なく解き、その際の懸賞金を得ている。

そんなふざけた金銭感覚を持つめだかちゃんは、確かに会計の作

業だけでは不向きなのかもしれない。

「……だったらどうです？　いっそ逆に、増額枠をひとつの部の総取りにしてしまうというのは？
俺が担当している業務の中に部活動対抗戦のリレー大会というものがあったでしょう。
本来は交流会的なイベントですけど、あれで優勝した部が予算増額とか！」

……いい提案ではあるが、この人さりげなく自分の仕事減らしにかかりやがった！！
この人抜け目ないな。さすがは反則王の弟子。

「なるほど、妙案ではある。しかしリレーは専門競技だ、遊び心抜きでは陸上部が優位にすぎるだろうな」

「ん？　ああ、だったら丁度良いかもしれねぇ。
あとで話そうと思ってたんだけどさ。目安箱にこんな投書があったんだ」

また目安箱か。内容は……

『黒神めだか様
新設された５０メートルプールがあまり活用されていないのがもったいないと思います。
何かあれを使った学校行事を開くことはできませんか？』

プールでのリレーか。いや、それならいっそ種目を増やし、ミニ運動会みたいな形にするか……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――日曜日　部活動対抗運動会　当日―――

「さあ、まもなく部活動対抗運動会が始まります！
本大会、実況はわたし放送部部長代理の阿蘇短冊が！　解説は――――」

「この世に知らぬことなし！　一文字流不知火ちゃんでーす！」
「そして俺！　生徒会長より解説に選出されました六道直人がお送りします！」

……なぜかめだかちゃんに解説にされました。
いや、競技が三人一チームの参加というルール、そして不知火が暴走しないための保険だそうだ。

なんだか面倒ごとを押し付けられた感がしないこともない。

「今日は二人とも、よろしくお願いします。
六道さんは黒神生徒会長より解説を任されたそうですが、お二人はどういった関係で？」

「ああ、俺は生徒会長、そして庶務の善吉とは幼馴染です。
高校で再会し、役員ではないんですが生徒会の仕事を手伝っています。
目立つのは嫌なんですけど、今日は精一杯やらせていただきます！」

「なるほど。あのお二人の幼馴染でしたか！
……ならばやはり、今日は生徒会チームの応援ですか？」
「解説という立場上、公平にいきたいですが……そうですね。
それに生徒会チームが負けたら私財が投じられるそうですからね
……」

そう、なぜかめだかちゃんは開会式で生徒会執行部より点数が高かった部活に私財を投じ、予算を三倍にすると宣言してしまった。

……どうしてもやめてって言ったのに……先生の許可だってどうせもらってないんだろ？
おそらくこれが終わったら先生の呼び出しをくらうだろうな……

「まず第一種目の水中玉入れですが、どう見ますか？」
「玉入れ自体は小学校の運動会でやっているような競技ですから、得意不得意はないと思いますがね……」
「強いて言うならバスケ部とかかにゃー？　結局はカゴに玉を入れられなきゃ意味ないし」
「やはり、普段そういった部活で慣れているバスケ部あたりは有利ですかね」

ふむ。不知火もまじめに解説するな。
こいつけっこう情報収集得意だし、意外とこういう仕事に向いているのだろうか？

「それでは時間です。位置について……よおおおい！　…ドン！！」

阿蘇先輩の開始宣言と共に、皆が玉を集めにもぐっていく。だがプールの底の深さ、そして男子生徒にハンデとしてつけられたヘルパーのせいでうまくもぐれない。

せっかく集めた玉も水をふくんで重くなっているせいで上手く投げられず、かごには入ることなくまた水中へと落ちていく。

「おーっと、早くもプール内はアビキョーカンの様を呈しております！　どう見ます、解説の――――」

「あひゃひゃひゃひゃひゃ！　人間が右往左往してて面白ーいっ！！」

前言撤回。やはりコイツは駄目だ！　少しでもこんな状況を見たら面白さを優先してしまう！！
解説者が笑ってどうする！？

「……見ての通りですね。たしかに玉入れには変わりないですが、場所が水中であり、玉を拾うことにも力がいるというふうに、なかなか難易度が高い」

「そうですね。それで、六道さん注目の生徒会は……ってあれ！？生徒会メンバーが二人共プールから上がっていますが！？」

「いえ、あれでいいんです。善吉や阿久根先輩はめだかちゃんの邪魔をしないために上がったんでしょうから」

「え？　……おっ、おおおおおおおおっ！？
黒神めだかっ！　お手玉をっ！　一気に！　まとめて投げ……！
はっ、入ったァァァッ！　生徒会執行部！　一気に二十ポイント獲得！」

……すばらしいな。一人で玉を集め、一度で決めるとは。

それからそこの二人。お前ら何もしてないのにカッコよくハイタッチすんな。

「あんな滅茶苦茶な方法で……！」
「いえ、あれで正しいんですよ」
「うん。玉入れって一球ずつ投げるより固めて投げた方が効率が良いんだ。
　マトは狙いやすくなるし、重力と慣性が働くからね。
　まっ、今まで潜ってた肺活量の方が驚きだけどね！　さすがはさすがの生徒会長ってところかな！」
「なるほどー！　ですが……今それ言ったらみんな真似しちゃいません？」
「「あ」」

　しまった、まだ競技中か。でもこれで生徒会の圧倒的有利は無くなったし……いいんじゃない？
　善吉も生徒会が独走することを警戒していたからな。さすがに主催者の一方的展開は避けなければならないし。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

　競技終了したが……ほぼ横並びになったな。みんな二十ポイントとってるし。

「第一種目ではご覧の通り互角の結果でしたが、さすがは生徒会ですね。最初から見せてもらいました」

「……いや、阿蘇先輩。俺には競泳部の方が異様に見えました」

「競泳部ですか？」

「ええ、彼らは生徒会より先に、二十ポイントを獲得していました」

「え！？　本当ですか！？」

　……競泳部の三人。男子二人はヘルパーがある状態で潜っていた。だが、絶息による強制潜水。肺の空気を全て捨てて潜った。なんという命知らずだ……

## １４話　『なんという命知らずだ……』（後書き）

六「競泳部編突入！」

作「と言っても多分次回で競泳部編は終わるでしょうけど……その後は風紀委員会編に入るんですが、その前に、ちょっとしたハプニングが起こると思います」

六「？　ハプニング？」

作「まあ、それはお楽しみにということで。感想はいつでも誰でもお待ちしています。これからもよろしくお願いします」

## 15話　『これでお終い……じゃないのか』

「二回戦、水中二人三脚です！
各チーム代表二名が足を紐で結び、五十メートルプールでかけっこしていただきます！」

「一位は十五ポイント、以下二位十四ポイントと続きます。最下位の０ポイントは避けたいところですね」

だが実際つらいだろうな。一人であろうとプールを歩くのはなかなか力が必要なのに、それを二人三脚で五十メートルだ。
筋力的問題もそうだが、持久力・体力も必要となってくる。

「どうですか、この競技は？」

「これも普通に考えれば水中というだけなので、陸上部が有利に思えるのですが……」

「そうだね☆　それでも競泳部と生徒会の走りの期待したいね☆
あひゃひゃ☆」

「その生徒会ですが、どうやら黒神さんは参加しないようですが？」

「男子二人でかためてきましたね。先ほどめだかちゃんが一人で活躍しましたし、出番を与えたのでは？
まあ、善吉も阿久根先輩も運動神経は優れてますからね」

だが心配だ。運動神経とかは問題ない。心配なんてしていない。
問題なのは、二人三脚というチームワークが必要な競技であの二人がどうするか……

「それでは、時間ですので競技に移りたいと思います！
位置について、よおぉぉおい……どんっ！！」

競技が始まった。

……お？　なんだ、あの二人がいきなり飛び出した……って、えーーー

「生徒会執行部、二人で協力していると言うより、二人で競争しています！」

「何やってんだー！！　善吉、阿久根先輩！！」

思わず解説なのに叫んでしまった。でも俺は悪くない……はずだ。
というか、こんな状況を見たら叫ばずにはいられない！

『不愉快な虫が！　生意気に俺のペースに合わせるな！』

『ああ！？　アンタこそさっさと足つって沈めや！！』

「……」

「いがみ合いながら走っております！　これは醜い！　悲惨な絵だ！！」

「あーひゃひゃひゃひゃ！！」

「会場中に不仲を見せ付けております！　生徒会執行部！！」

……なんで二人の悪口がここまで聞こえてくるんだ？
これ、俺が出たほうが良かったんじゃね？　主催者の面子が台無しだよ……

「おや？　その生徒会に対し、お二人が注目の競泳部は大きく出遅れているようですが？」

「……走ってすらないですね」

何をやってるんだあいつら？　いくらなんでも遅すぎる。文化系の部活にも負けてるぞ。

後半の追い上げを狙っているのか？　ただ、水中を走る競技で逆転なんて厳しいはずなんだが……

「そりゃ仕方ないよ。屋久島先輩でも種子島先輩に合わせられるのは二十五メートルがやっとだろうしね☆」

「？」

「不知火、それってまさか……って、なっ！？」

「きょ、競泳部！　なんと！　足をつないだままで泳いでおります！！」

マジで……！？

足をつないでバランスをとりづらい上、至近距離のために腕もかきづらいっていうのに……！！

あの二人、全力で泳いでいる……！！

「競泳部、全チームをごぼう抜きし……そのままゴールイン！！
十五ポイントげっとおおおー！
二位は陸上部！　生徒会は後半遅れて三位となりました。ここは団結力の差が出たかぁー！？」

いや、団結力とかそういう問題じゃない。あの運動能力もそうだが、死さえも恐れない戦い方。
こんなもの、もう運動会じゃない……！！　もはや戦場になってるじゃないか！！

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

三回戦も競泳部の独壇場だった。

三回戦は『ウナギつかみどり』。一匹一ポイント。
各チーム代表者一名のみ参加のこの競技。
鍋島先輩でさえ九匹がやっとだったのに関わらず、競泳部の一年生エースの喜界島十三匹のウナギをつかまえた。

一方、生徒会はめだかちゃんが参加。
スキル『動物避け』により、ウナギは一匹も近寄らず、まさかの0ポイント！
もともとこの競技は生徒会の独走を防ぐための競技だったのだが……もはや余計な判断だった。

現在、一位競泳部　四十八ポイント　二位陸上部　四十二ポイントに対し、生徒会執行部は八位の三十三ポイント。
この時点で一気に離されてしまった。

次が最終競技なのだが、その競技内容は阿蘇先輩が任されたらしい。
「しかし、任されたのはいいですが決められませんねー。お二人とも、最終競技は何がいいと思います？」

「ポイントがけっこう離れていますからね。ここで下位チームにも逆転の可能性があるようにしたいんですが……」

「じゃあさ直人。こういうのはどうかな？」

……なるほど、さすが不知火。最後まで盛り上げてくれるな。

逆転があり、そして最終決戦の舞台まで作り上げるとは！！

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「では不知火さん、六道さん！　最終競技のルール説明をお願いします！！」

「了解しました！　といってもこれも普通の騎馬戦です。ハチマキの奪い合い。

ハチマキを取られたり、騎馬が崩れて水中に落ちたりしたら失格です」

「たっだし～！　今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなので、ここでクイズ番組的救済ルール！
集めたハチマキの数ではなく質で獲得ポイントを決定！　上位チームのハチマキほどポイントを高く設定します！！」

「具体的に言いますと、現在一位のチームのハチマキは十六ポイント。それから二位は十五ポイントと下がっていき、最下位チームのハチマキは一ポイントだけです」

「なるほど。つまり上位チームほど他チームから狙われやすいということですね？」

「そういうことです」

ふっ。参加者も戸惑ってるな。逆転のためにはより上位チームを狙わなければいけない。
つまり、一位の競泳部などは周りがみな敵のようなもの。

だけど、実際は違う。これは競泳部と生徒会を戦わせるための挑発ルール。
現在三十三ポイントの生徒会はトップの競泳部のハチマキを奪えば四十九ポイントになり、ちょうどトップになる。

結局のところ、トップ争いが本音のルールなのだ。生徒会執行部と競泳部の一騎討ちがな！

「では、位置について、よぉーーーーい……どんっ！！」

始まりと同時に、いきなり生徒会と競泳部がぶつかった。
ん？喜界島とめだかちゃんがなんか叫んでるな……

ま、大方めだかちゃんが『命より大切なものがある』みたいなこと言って、それに反発してるんだろうが……まずいな。　めだかちゃんの足場が悪い！！　やはりチームワークに関して言えば向こうの方が上か！！

「あーーーーっ！　生徒会！　黒神めだか！　ここで突き飛ばされたーー！！
騎馬も無惨に崩れ！　これは勝負あったーーーー！！」

「……いや、まだだ！」

「え！？」

騎馬が崩れたが、善吉がとっさの判断でヘルパーを投げていた。
そしてその先は……

「せ、生徒会長！　水の上に！　立っているだとぉぉぉぉーーーっ！？　……いえ、違います！
あれは、ヘルパー！？　ヘルパーです！　生徒会長！　なんとヘルパーの上に立っています！！」

めだかちゃんの落下地点に善吉がヘルパーを投げていた。
……狙って投げていた善吉もすごいんだが、それに立っているめだかちゃんは一体……

「おおっ！　黒神めだか跳躍――――！　そのまま競泳部の騎馬に飛びつい……た？」

「……ここでキスするか、普通？」

めだかちゃんの真骨頂の一つ、行き過ぎ愛情表現。
めったに見られるものではないが……ここで！？

「おおおおおおっ！　これは！　両者同時に着水だぁーっ！！」

「うん、でもその前に。お嬢様がいいこと言いながらちゃっかり競泳部のハチマキ奪ってたね♪」

「本当に抜け目ないな……」

「えー……この場合どういう判定になるんでしょうか？」

「どーもこーも！　水中におちたら失格ってルールなんだから！浮かぶヘルパーの上はまだ水上だし！　ゆえに最後の攻防は有効！！」

「で、では生徒会執行部は１６ポイント見事に獲得！　総合得点トップですね！」

「決まったな……」

陸上部はなぜかすでに倒されてるし、もう点数的に生徒会に並ぶことは不可能だろう……

最後の最後で逆転劇。めだかちゃんはやっぱり勝者じゃないとな……

「そしてここでホイッスルーッ！　部活動対抗水中運動会！　全競技ここで終了でーす！！

それでは解説の六道さん、優勝チームの発表をお願いします！」

「わかりました……って、え？」

あれ？　俺の予想とは違っている！？　なぜ！？

「あ、それであってますので安心してください」

「……それでは発表します！！！優勝はーーーー

鍋島猫美さん率いる柔道部チームです！！　おめでとうございます！！」

『『『『『…………は？』』』』』

……やっぱりその反応だよな。いや、俺も驚いているんだけど！？

「えー柔道部！　生徒会と競泳部がごちゃごちゃ戦っている間に、そのほかの全チームのハチマキをゲット！　合計１０３ポイント分のハチマキを獲得してトップになりましたー！」

「そんなのアリ！？」

俺でさえわからなかった。
トップ争いのあいだにそのほかの全チーム撃破って……セコッ！！
１０３ポイントとかありえないだろ！！

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

こうして第一回水中運動会は幕を閉じた。

優勝した柔道部の部費は約束通り増額されたのだが、『こんなにいらんわ』と、鍋島先輩は獲得賞金を適当に分配してしまったそうだ。
相変わらずとぼけたおねーさんである。

だがこの一件でめだかちゃんもお金のことには注意することになるだろう。
めだかちゃんが喜界島に声をかけてたところを見ると、会計にでも任命するだろうし。

部費のことも片付き、役員も増えて、一件落着！！

今日はこれでお終い！　……じゃないのか。

「……何の用ですか？　都城先輩」

「ほう、見ることなく俺の存在を当てたか。俺の王としての存在感にあてられたか？
なんにせよすばらしい。褒めて遣わす」

……普通に考えてここで終わりだろうに。終わりでいいだろうに。

なんでよりによってこの人が来るのかな？　フラスコ計画最重要人の、この王が……俺のところに。

## 15話　『これでお終い……じゃないのか』（後書き）

作「最後の最後で都城が登場」

六「なぜここで？」

作「いろいろありまして……なお、次回で直人の異常が明かされる予定です」

六「……やけに長かったな」

作「皆さんもう予想できてるかもしれませんが、期待していてください」

## 16話　『貴様の【異常】は……』

「まったく。日曜という王のせっかくの休日に貴様らは何をしていたのだ？　この俺にわざわざ探させるとは……」

「……それは失礼しました都城先輩。今日はどういったご用件で？」

なんでこの人がここに？　理事長はめだかちゃんのことは俺に委任したはず。それとも、理事長がなにか命令したのか？　あるいは、この人の独断行動？

この人が暇つぶしに来たとは思えないが……というか思いたくない。

「ふむ、そうだな。一つは様子見だ。お前の、そして黒神という女のな。なかなか面白い。

あれほど人間離れしていながら、人間味にあふれている。あの理事長が人目おくのも無理はない。

お前もお前できちんと役割を果たしているようだしな」

「……どうも」

見ていたのか。水中運動会を。たしかに今回もめだかちゃんが圧倒的な力を発揮していたが、全然気づかなかった。おそらく他の十三組生はいないだろうけど。

……しかし、『一つは』？　つまり、他にも理由があるということか。

「そしてもう一つは……お前自身だ、六道。
理事長はお前の『異常』については順を追って調べていくと言っていたが、俺自身貴様には興味がある」

……！？　な、何だ！？

「だから、少し試してみようと思ってな。まずは……」

！！　ヤバイ！！

「『跪け』」

「！？　なっ……！？」

身体が勝手に！？　動かない！　……動けない！！

「……まただ。お前は今、俺が『言葉の重み』を発する前にすでに動いていた。
かわすことはできなかったようだが……なぜわかった？」

「……」

「お前は以前、高千穂の背後からの不意打ちにも反応した。気配を感じたのかとも思ったが、ならば今回はなぜだ？
お前は俺の異常を知らない。だからこそ予知とも思えるのだが、それは違うと判断された
……答えろ六道。お前は今、どうやって俺の行動を知った？」

「……知ってなんか無いですよ。貴方が何をするかなんてわからなかった。ただの勘ですよ。
ただなんとなく危険だと思ったから逃げようとした。高千穂先輩

のときもそうです」

「……勘？　なんとなく？　貴様、ふざけているのか？」

「……本当ですよ」

「行橋、コイツの言っていることは本当か？」

「うん、嘘は言っていないみたいだよ」

「な！？」

行橋先輩まで！？　いつの間に！？　まさか、最初から！？

「なるほど。つまり貴様の『異常』は第六感、直感と呼ばれるものか。

俺や高千穂の攻撃も知ったのではなく、察したというわけか」

「……そうですよ。俺の異常は第六感。善吉風に言うなら『真頼勘（リライアンス）』。

俺は五感をさらに研ぎ澄ました六つ目の感覚を持っている」

「……ふ。研究しても解明できないわけだ。
本来、人間が失っているものがお前は異常なほど発達しているのだからな」

「……」

「だが結局のところ、お前は俺の攻撃をかわしきれなかった。お前の異常もまだ発展途上ということか……」

「？　どこ行くんだよ、王土」

「帰るぞ、行橋。コイツの異常はわかった。今のところコイツはこちら側だ。ならば、今は何もする必要は無い」

「……了解。ごめんね六道クン。王土のヤツが勝手なマネしちゃって。」

「……」

何も、できなかった。

戦うどころか、逃げるどころか、動くとさえできなかった。

俺はなんでこんなに弱いんだ……

今回は助かったんじゃない、助けられたんだ。

俺は何もできていない……

## 16話　『貴様の【異常】は……』（後書き）

作「ついに明かされた直人の異常！　その名も真頼勘！！」

六「描写自体は何回かあったがな」

作「直人の名前も異常にちなんでの名前でした。
第『六』感、『直』感。そして人外多い中、『人』の『道』を歩めるように……
これらを並べて『六道直人』に……」

六「異常のことはもうわかってた人もいるだろうが……」

作「それで異常のことは次回詳しく説明しようと思います。
質問や疑問があれば言ってください。
答えられる範囲のものは全て答えようと思います！」

六「感想はいつでもお待ちしてます！」

## 異常　『俺のアブノーマルだ』

それでは今回は前話で明らかになった六道の異常、真頼勘（リライアンス）について説明していこうかと思います。

六「といっても、皆だいたい想像できてると思うがな……」

ですが、補足したい点がいくつかあるので、順を追ってみていこうと思います。

では……始まります。

### 真頼勘（リライアンス）

六道直人の異常（アブノーマル）。人間の第六感、つまりは直感が異常なまでに発達している。

身に迫る危険を察知したり、物事の選択の際にどちらを選んだらよいか、さらには物事の結末をなんとなく察することができる。

予知と似ていると言えば似ているが、彼には大まかな内容しか分からない。
例えば、彼が高千穂仕種の攻撃を避けた際、六道が感じたのは「何かが来る」とか「ここにいるのは危ない」などで詳細なことはまったく分かっていなかった。
行橋が直人の異常が未来予知でないと判断したのはこの辺りに由来する。

また彼の異常は常に発動するわけではない。そして、彼の異常は予知と違い、早すぎる段階ではまったく分からない。最初に述べた場面のようなときに、自然とそう感じてしまうだけなのだから。
彼の異常は物事の危険性や重要度が高いほど、正確・確実になり、発動が早くなっていく。

六「ま、これが主な力だな」

危険の察知や、結末を察するなどは本編でも描写したような感じです。ギ〇スのネタも実はそうでした。
予知より不便のように思えますけど、逆に予知よりすぐに結果を防ぐために動くことができたり、利点・欠点があります。

それで、物事の選択というのは……たとえば選択肢が二つあったとして、どちらを選ぶかという時に、『これだ！』　と、なんとなくわかっちゃうんですね。

六「だから『くじ』とか『完全神経衰弱（パーフェクト・メランコリィ）』とかは有利だな」

実を言うと、六道が箱庭学園に進学したのも勘だったりします。
ほら、あらすじに『彼の【異常】が彼を波乱の学園生活へと導いていく』と書いてあったでしょう？

六「あれってそういう意味！？」

学校を選んだ時点ですでに導かれていたという……物語は本編前から始まっていました。

では次に行ってみましょう。

また、高千穂ほどではないが、彼も行動までの流れは速い。
普通の人間なら、　感覚器官→感覚神経→脊髄→脳→脊髄→運動神経→運動器官であり、

高千穂は、　感覚器官→感覚神経→脊髄→運動神経→運動器官に対し、

六道の場合、　脳→脊髄→運動神経→運動器官となっている。

これは常人や高千穂のように刺激を感じるのが五感ではないためだ。

彼が危険を感じるのは本能のようなもので、脳に直結している。ゆえに、脳からすぐに命令を出すことができる。

由来：　真頼勘→しんらいかん→信頼感→リライアンス

実を言うと、反応も速かったりします

六「と言っても、日常生活中は普通だ。これはあくまで『真頼勘』発動時のみ」

名前の方ですが、

「真頼勘」じゃなくて、「信頼勘」でいいのでは？　と思う方も

いるかもしれませんが、
これは『勘を信じて頼る』のではなく、『真に頼れるのは勘だけ（つまり自分だけ）』という彼のスタンスからできています。

六「……」

こんな感じでですかね。ひとまず今回はお終いです。
何か質問があれば受け付けます。

## 番外編　『俺が信じているのは』（前書き）

初の番外編。

もしも、直人がフラスコ計画に本気で加わったら……という話です

## 番外編　『俺が信じているのは』

「ふん。全ての敵を蹴散らしながら地下十三階(おれのところ)まで降りてくるものだと期待していたが……たかが地下四階(なぜごとき)に屈するとは正直がっかりだな。黒神めだか」

「そう言ってやるなよ王土。えへへへへ！
名瀬は結構卑怯な手を使ったみたいなんだからね！」

「そうですよ都城先輩。結局は生徒会なんてお人好しのよせ集めですからね。
大体、名瀬先輩を倒したとしても、地下十一(おれのところ)階で終わりましたよ」

めだかちゃんね……こんな形で再会するなんて誰が想像できたかな？
俺はまともな再会はできないとは思っていたけれど。
……相変わらず、お前らはつくづく甘い。そんなんだからこうして囚われの身になるんだよ。

「何にしても名瀬の仮説は面白いよ」

「ええ、へたすれば今までのフラスコ計画が無に帰すくらいですからね」

「『異常者（アブノーマル）を異常（アブノーマル）たらしめているのはその異常性（アブノーマル）ではなく――――その異常性を制御する人格である』だったか？

確かに笑える仮説ではある」

「人格じゃなくて『心』らしいですね。心がゼロの黒神めだかはあまりにも弱体していた。

だからこそ、別の心がインストールされたらどうなるかを知りたいそうですが……」

『心』か……名瀬先輩らしくもない。

心など、結局は移りゆくもの。そんなもので、俺たちの異常が異常になっていたというのか……

「まあよかろう。で、どんな『心』をインストールすればいいのかな？」

「名瀬は任せるって言ってたよ。色々試してみたいらしくてさ」

「ですから、都城先輩の好きなようにされればいい」

「ならば、王(おれ)好みの女にしよう。
王(おれ)以外の誰にも屈することのない王(おれ)の妻に相応(ふさわ)しき悪意に満ちた心を、
偉大なる俺は結婚指輪のごとくお前に贈ろう」

こんな形で黒神めだかという、最強とまで思っていた存在が変わってしまうとは……

他人を信じてばかりいるから、こんなにもあっけなく終わるというのに……バカが。

「……まーがんばりなよ。ちなみにどれくらい時間がかかりそうだい？」

「念入りに行うとして千八百秒かな。その間俺は無防備だ。
ゆえに『一三人（パーティ』総出で全力で俺を守れ」

「……わかりました都城先輩。なら、俺が働いてきますよ」

「ほう？　六道、お前が動くのか。あれほど目立つのが嫌いだった男が……珍しいこともあるものだ」

「大丈夫かい？　まだ向こうには君の幼馴染の善吉くんたちが残ってるよ？　戦えるのかい？」

「愚問ですね行橋先輩。今更あいつらと戦うことに躊躇なんて感じません。
大体、そんなことを感じるくらいならここにいませんよ」
「……えへへ！　それもそうだね。
相変わらず、君の『心』も静かでわかりやすい」
「ならば好きにしろ六道。期待はしている」
「ええ、お任せください都城先輩」

時間稼ぎなんてものじゃ生ぬるい。
全て潰してきますよ。
あいつらの思いを、希望を、全て……俺が潰す。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

めだか救出のため、地下十三階へと急ぐ善吉達。
だが彼らは知らないが、地下十一階にもまだ彼らが戦わなければ

ならない敵がいた……

「はっ、はっ……早く、早くめだかちゃんのところへ行かないと……！」

「おっ！　やっと来たみたいだね、生徒会の諸君。正直言って待ちくたびれたよ」

「！！　誰だ！？」

「おいおい、善吉。誰だとはひどいな。幼馴染のことをもう忘れちゃったのか？
　でも俺は忘れてないぜ。俺の『勘』が、きっとお前達とまた会うだろうって言ってたからね」

「！！　お前……まさか！！　直人か！？」

「ああ、大正解だよ。久しぶりだな善吉、真黒さん。
　初めての奴らもいるし、自己紹介しておくか。
　『一三組の一三人（サーティーン・パーティー）』補佐役。一年一三組、六道直人だ。仲良くしてね」

待っていたのは幼馴染にして、親友だった男。
自分達の最大の理解者であり、最高の賛同者だった男。

「どうして……どうしてお前がこんなところにいるんだよ！？」

「俺はわかっちゃったからだよ善吉。人間なんて、結局つながりの無い者のことなんて簡単に裏切るってことに。
信じられるのは自分だけだってことにな……」

「どういうことだよ……」

「善吉にはわからないだろうな。いつまでも夢物語を信じているお前達には……」

「……直人君と言ったかな？　他人を信じられないというのに、なぜ君は理事長を信じたんだい？　なぜあの人には従う？」

「別に信じてなんかないですよ、阿久根先輩。俺が信じているのは都城先輩だけですから」

「！　な、なんでだよ！？　なんであんな奴のことを信じられるんだよ！？」

「俺は自分だけを信じている。だけどあの人ほど自分だけを考えられる人を、信じられる人は他にいない。
自分だけを信じている都城先輩を、俺は信じようと思った。だから……俺はお前達の敵なんだよ！」

「……そうかよ、ならお前は俺が倒す！　幼馴染を止めるのは俺の役目だ！！」

「無理だよ。他人と向き合ってばかりで、自分のことさえ完全に理解していない、お前達にはな！！」

「！？　なっ……！！？」

六道の一撃をまともに食らい、その場で倒れてしまう善吉。

「……ひょっとしてお前は勘違いしてないか？　俺は何も『真頼勘』を信じてるんじゃない。勘だけを頼りに生きてきたんじゃない……勘も含めた、俺自身全てを信じている！
さぁかかってこいよ、四人がかりでいい。俺は自分を信じきれないお前達に負けはしない！！」

「な、直人……」

「くっ！！」

「……」

「……残念だよ直人君。君なら、めだかちゃんを守ってくれると思ってたんだけどね」

「さあ、黒神めだかを助けたいのなら……俺の屍を越えていけ！！」

最高の友であった男が今、最悪の敵として生徒会執行部の前に立ちはだかる……

## 番外編　『俺が信じているのは』（後書き）

作「やけに都城に対して忠誠心が高い直人」

六「本編ではどうなるかは知らんがな……」

作「直人の異常が明らかになったのでやってみたかったんです！

感想、意見等お待ちしています！」

## １７話　『それでも構わない』（前書き）

活動報告に書きましたが、現在アンケートを行っています。

ご協力よろしくお願いします！

## 17話　『それでも構わない』

喜界島もがなが『会計』として生徒会執行部に加入！
これにより、滞りがちだった予算関係の業務はスムーズに動き始めた。

だが、その現状に不満を漏らす人物が一人……

「いや、メンバーが揃っていくのはいいんだけどよ。しっかし、なんか後から入る奴の方がいい役職についてねえ？」

生徒会執行部『庶務』、人吉善吉である。
最古参の生徒会役員であり、現生徒会長の黒神めだかとの付き合いも一番長いに関わらず、役職は一番下の『庶務』である。
めだかは彼に手柄を立て、より上の役職につくことを願っているのだが……

「いや別に、書記とか会計とかできるわけでもやりてーわけでもねーんだけどよ……けどなーんか釈然としねー……」

不満を募らせながら生徒会室の扉をあけると……絶賛着替え中で下着姿の喜界島がいた。

「……あ」

「／／／／／／／」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「お金！　お金払って！」

「……こんだけ人をボコボコにしておいてその上金払えってか。いい性格してんなお前」

善吉はすでに喜界島の裸を覗いたということで彼女の攻撃をくらい、すでにボロボロになっていた。

善吉もそこは男。一切抵抗はしなかった。

「カッ！　やなこった！　見たくもねーもん見せられて迷惑してんのはこっちだぜ――――って……！」

「うわーんっ！　お金払って！　今のヒドイ発言の慰謝料も含めてお金払って！」

「わ、わかった！　ごめんごめん、払うから！」

目の保養料　４５０円　　慰謝料　３００円

¥７５０円

「わーいっ！　ありがとう！」

「……いや」

……本当に安い女である。

改めてご紹介。

生徒会執行部会計担当、喜界島もがな。一年十一組所属の特待生。

競泳部の活動を優先していいという条件で（あと日当３２０円で）喜界島はめだかのさそいに応じたそうだ。
本人も、少しでも競泳部以外でのつながりを作ってみたいという思いがあったらしい。

「さっ！　仕事始しよーかな……パソコンどこ？」
「そんな物体はここにはない！」

そう言って善吉が取り出したのは……ソロバンだった。
そう。生徒会にはパソコンというものは存在しない。ならば今までどうしていたのかというと……

「めだかちゃんがいればパソコンとかいらねーのよ。あいつ暗算で関数計算とかできるし」
「インテル入ってる！？」

これマジです。金銭感覚こそおかしいものの能力は人の領域を超えて高いので、業務に支障がでたことは少なかった。

……マジ化け物です。

「……まあいいか。ないもの買うのは勿体ないし、これはこれで便利だしね」

そう言って喜界島はソロバンで仕事をはじめ、善吉はマンガを読み始めた。
初めての業務ということもあり、お互い話すことも無く、生徒会室にソロバンを弾く音だけが流れていく……

（気まずい！　会話が無くなって空気重くなっちまった！
なんで俺、喜界島が仕事している向かいでマンガ読んでんだ！？
つーか俺こいつのこと全然知らねーし！　この女も仕事に没頭して、俺と仲良くやってこうって気がまるでねえぞ！
ったく……めだかちゃんも阿久根先輩も今日に限ってどこ行ってんだ！？　直人も今日は遅くなるって言ってたし……早く来いよ直人！！）

……だが、善吉が期待している直人は直人で、現在それ以上の空気の中にいた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーー理事長室ーーー

「珍しいですね。君のほうから私のところに来るとは……今日はいかがしました？　六道君」

「確認しに来たんですよ理事長。あなたが……あなた方が俺の敵なのか、それとも同志なのかを」

その答えによっては、俺がどう動くかが変わってくる。

俺が、なんのために戦うのかが……誰のために戦うのかが。

「敵なのか味方なのかと聞かないところが、ある意味君らしいですね。

……都城くんのことでしょう？　君が聞きたいのは」

「そのとおりです……あれは、あなたの指示ですか？」
「いいえ、あれは彼の独断です。私は『一三組の一三人』には君や黒神さんには手出し無用と伝えていますからね。私は何一つとして口出ししていませんよ」
「……本当ですか？」
「本当です。ただ、彼の行動のおかげで君の異常を知ることができたのは嬉しい誤算でしたが……」
……やはりすでに情報が伝わっていたのか。俺の異常性について。となると、『一三組の一三人』全員にも知れ渡っていると考えた方がよさそうだな。
「『第六感』。人間が失い、野生の動物が所持しているとされている感覚。
本当に驚かされますよ君には。こんなこと、誰も考えませんからね。
特に、無理に人間の機能のことで全てを解決しようと考える研究者達では……」
「……それで？　それを知った貴方達は俺をどうするつもりですか？」

「何もしません。これからも黒神さんのことを任せようと思っています」

簡単に言ってくれる。俺が裏切ろうとたいした戦力にはならないとでも思っているのだろうか……まあ実際戦ったら俺の方がヤバイことになりそうだけど。

都城先輩一人でも何もできなかったんだ。それなのに一三人全員を敵に回したら俺は……瞬殺されるだろうな。

だけど、それでも俺は……

「……一つ言っておきます。俺は貴方達を信用はしても信頼はしていない。

もし、あなた達がまた変な動きをすれば……俺は『一三組の一三人』を敵に回しますよ」

「ほう。そして、黒神たち生徒会につくということですか」

「……いいえ、俺は一人です。俺はあいつらを騙して普通に仲間の顔をしている。今更あいつらの仲間になんてなれやしない」

「それでは君は……この箱庭学園全てを敵に回すことになりますが？」

「それでも構わない！！」

それくらいのことは最初から覚悟をしていた。
もう俺は、誰に対しても正直に顔を合わせることさえできないんだから……それだけのことをしているのだから。

「……君の覚悟は良くわかりました。ですが、我々にとって君は必要な人材です。
これまで通り、我々に協力してほしいのですが……」

「ええ、一応協力はします。今回はあくまで確認に来ただけですので」

「そうですか」

「ええ、それでは失礼します」

それ以上話すことはなかった。だからすぐさま俺は理事長室を後にした。
これ以上、あの場にいるのがつらかったから。

だから俺は、偽りの関係にある仲間のもとへと向かった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「ん？　直人ではないか！」

「！　……めだかちゃんか。あれ？　今日は阿久根先輩と案件を担当したのか？」

なんともまあ。生徒会室にいると思ってたから油断していたのに……なんであの話をしてすぐに現れるんだ？

廊下ではちあわせるなんて、そんな偶然はいらないのに。

「うむ。善吉と喜界島会計に留守を任せてな。そのおかげで我々は我々で案件に集中できた。あいつらや貴様もねぎらってやらんとな」

「……いや、俺は勝手に手伝ってるだけだから」

実際、善意でやってるわけでもない。自分から積極的にやってるわけでもない。
ただ、お前達を利用してるだけだ。
責められる理由こそあれ、ねぎらってもらう理由なんて一つも存在しない。

「何を言う。貴様らのように頼れる者がいるからこそ、私はこうして働けるのだ」
「確かに！　虫にしたって虫なりに役にたつというか――」
「「「！！！」」」

……何？　この状況？
生徒会室に入ってみたら、善吉が喜界島に押し倒されていて……
前にも似たようなことがあったような……
「め……めだかちゃん！」

善吉も気づいたか。だが、この状況はさすがにまずいぞ。
どんな誤解をされても文句は言えないからな。

「……善吉。まあ若い内は色々あるだろうが……しかし場所くらいは選ぶがよい！　それが無理なら鍵くらいかけよ！」

「そうだぞ人吉クン。きみは一体生徒会室をなんだと思ってるんだい？」

「というか善吉、お前はやっぱり受けなのか？」

「お前らに言われたくねえし！　誤解じゃねえけど違うんだ！」

誤解って言われても……ねえ？　そんなに否定するのは逆に本当みたいに聞こえるし……
だいたい俺は受けではないぞ？

箱庭学園生徒会執行部、残るは一席。

## １７話　『それでも構わない』（後書き）

作「暗いな……」

六「さすがに今回の件はな、俺も嫌になった」

作「六道の忠誠が１５下がった。
これからは風紀委員との戦いになっていくが、一体どうなるのか！？　お楽しみに！」

## 18話　『ご愁傷様です』

【箱庭学園風紀委員会】

学園治安の維持を至上目的とする遊撃部隊。
理事会・職員室を始めとするあらゆる権力から解放された独立特務機関である。

人呼んで……学園警察！！

「校ー則！　違反です！！」

校門前にその風紀委員会の一人、鬼瀬針音が取締りをしていた。
彼女の目の前には制服改造、私服で登校している者の姿が見える。

「あなたがたの外装には正しい部分がひとつもありません！　服装の乱れは心の乱れ！　よってあなたがたの心は乱れに乱れきっております！！
風紀委員会第三部隊所属、この鬼瀬針音の目が黒いうちは！　あなたがたのような風体の生徒は一歩たりとも校門を通らせませんよ！！」

「だって……」
「んなこと言われても……」
「なあ？」

しかし、その鬼瀬の声を聞きつつも、生徒から了承の返事は返ってこない。

もちろん鬼瀬もここで引き下がるような生温い者ではない。

「なんですかその態度は！　口答えは許しませんよ！！」
「いや風紀委員さん。そりゃあんたの言う通りかもしんねーけどよ、だったらあいつらはどうなるんだ？」
「あいつらぁ？」

鬼瀬が振り返ると……思いっきり制服を改造している生徒会執行部一行が歩いていた。

これには思わず鬼瀬の口から魂が抜け出ている。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーー生徒会室ーーー

「一体！　何を考えているのですか生徒会（あなたがた）は！！
生徒の範たるべき生徒会役員が！　一体どんな魂胆があって率先して風紀を乱しやがるのです！？」

……やはり風紀委員が来たか。鬼瀬とか言ったっけ？
いつかはめだかちゃんや阿久根先輩の制服の件で対立するとは思っていたが。
これはまた攻撃的な役員だな。さすが雲仙先輩が選出しただけのことがある。
ま、俺自身は制服改造とかしていないから問題ないのだが……他のヤツらがな。

「人吉善吉くん！　どうして制服の下にジャージを着ているのですか！　まさかオシャレのつもりじゃないですよね！？」
「いや、そろそろ時代が俺に追いついてきたかと……」

「……諦めろ善吉」

オシャレのつもりなんだよね、本人は。
現実を見ようぜ善吉。たとえ校則違反じゃないにしても、幼馴染として今すぐ辞めることを進言する。

「阿久根高貴さん！　たとえあなたがエルヴィス・プレスリーの熱烈なファンだったとしてもその大胆さはありえません！！」

「正面から言われると、さすがに返す言葉がないな」

まったくです。マジ返す言葉が見つかりませんよ。男子が胸元露出とか……

「そしてそこのソロバン弾いてる人！　もとい喜界島もがなさん！　あなたは何を『あたしには関係ない』みたいに構えてやがるのですか！？』

「だってあたしには関係ないもん。制服改造なんてしてないしスカートだってフツーの長さだよ？」

……だよな。喜界島の制服は見た目が普通の学校指定のものだし、長さも問題ない。
一見何の違反も見られないのだが……

「は！　あ～～～ん？　そんなこと言っても私の目は誤魔化されませんよ！」

鬼瀬が両手に装備した手錠で喜界島の制服を軽くはじく。
……制服がはだけてなぜか水着が現れた。なぜ？

「ほぉーら！　あなたが中に水着を着込んでいることくらい私の風紀眼にはお見通しなんです！！」
「「「（何でわかるの！？　風紀眼？　そしてなんで着てるの！？」」」

こいつ、まさか俺の真頼勘（リライアンス）以上か！？　なんだ風紀眼とは！？

「フッ。よくぞ見抜いた……今のはお前を試したのだ！」

「「更になんで遥かなる高みから！？」」

だめだ、生徒会がそろいもそろってこの有様では……本当に反論ができない。

これはさすがに庇いきれないな……

──────────────────────────────
──────────────────────────────
──────────────────────────────
──────────────────────────────

「畜生……遅いなあ時代」

「ち……力が出ない」

数分後、善吉と阿久根先輩は生徒会の制服に着替え、喜界島は水着を脱いだ。

しかし喜界島は体に力が出ないらしくぷるぷる震えている。

「すみません鬼瀬さん、水着だけになるというのはダメですか？

水着も一応制服だし……」

「ダメに決まってるでしょう！？」

やっぱダメなのか。それをマネされても困るだろうからな。男子は歓喜の声をあげるかもしれんが……

まあ、業務に支障がでなければいいんだけど。

「粛清は終わったか？　まあその辺で許してやってくれ鬼瀬同級生、皆決して悪気があったわけではないのだ」

……めだかちゃん、あなた自分の格好を鏡で見たことあります？

「あ、いえ、生徒会長！　こちらこそ職務中にお邪魔いたしました！　それではこれで失礼させていただします！」

「うむ！　委員長によろしくな！」

鬼瀬はすたすたと出口に向かって行ったが、途中で方向転換し、再びめだかちゃんに迫っていった。

「ってそんなわけないでしょーっ！！」

ですよねー。
鬼瀬の渾身の一撃により、めだかちゃんの目の前の罪無き机は真っ二つに粉砕された。
これって誰が弁償するんだ？

「一番問題なのはあなたです生徒会長！　その恥ずかしい制服以上の悪気がこの世のどこにありますか！」

「恥ずかしい？　ふむ、また随分と的外れなことを言われてしまったものだ。
この黒神めだか、己が肉体に恥じる箇所などひとつもない！！」

「「「「（……面白いくらい会話が噛み合わない）」」」」

なぜこんなに胸を張って堂々といえるのだろうか？　しかも風紀委員に向かって。
一体その自信はどこから生まれてくるんだ？　これも異常性なんだろうか……

「肉体は恥じなくとも服装は恥じてください！　そんな胸元を露出させてはしたない！」

「これは胸元を露出しておるのではない。胸元以外を隠しているのだ」

「基本全裸なんですか！？」

全裸なんです。うちの会長様は。

どうも俺の知り合いの女子にはまともなやつがいないな……古賀先輩もそうだし。

「少しは自分の影響力というものを考えてください！　もしも真似をする生徒が現れたらどうするんです！？」

「真似？　させればよいではないか。むしろ私は任期中には女子の制服をこれで統一しようと考えておるぞ」

「とんでもねえこと企んでやがります！？」

本当にとんでもねえ！！　そんなこと考えてたのかよ！？

……これを選挙中に言ってたら、男子だけなら支持率１００％になったんじゃね！？　いや、なってた！！

「うーん、さすがのめだかちゃんもちょっと押されてますね」

「フッ、虫だなあ人吉クン。これはいつものパターンじゃないか。ここからめだかさんの名ゼリフが出てくるんだって！　鬼瀬さんはもとより俺達でさえ唸らされてしまう名言がな」

「……いえ、阿久根先輩。どちらかと言うと全てを台無しにするセリフが来る気がしますけど」

「とにかくあなたも着替えてください黒神さん！　それとも着替えたくない合理的な理由でもあるんですか！？」

「……とにかく嫌だ！」

ダメだコイツ。早くどうにかしないと……！
予想通りすぎて……何も言えない！！

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

その後、鬼瀬は「委員長に報告しますからね」と言って帰っていった。

今俺たちは、破壊され、物が散乱し、ぼろぼろになった部屋を片付けている。

「めだかさん、さすがに不味いんじゃないですか？

風紀委員会と対立してもいいことなんてありませんよ。中でもあの鬼瀬さんはヤバイと言いますから」

いや、一番ヤバイのは委員長なんだけどな。

……正直言って、対立どころかめだかちゃんと会わせるのさえ危ない。

まあ俺がいる以上、雲仙先輩は何もしてこないと信じたいのだが……都城先輩の件があるからな。なんとも言えない。

「手錠メリケンの鬼瀬！　委員長自らスカウトしたという本年度風紀委員会の肝入りですよ。

風紀のためには暴力も辞さない強引なスタイルで、彼女が取り締まりを行うようになって以来校則違反者は激減したと言いますからね」

……なんで手錠をメリケンとして使うんだ？　なにか合理的理由でもあるのか？

「……暴力というのは感心しないが彼女の意見はまあ正論だ。反論する気にならんよ。
……ただし私は自分が間違っているとも思わない。人がルールを守るべきなのではない、ルールが人を守るべきなのだ」

「……めだかちゃん、俺風紀委員に知り合いがいるからちょっと話し合ってくるよ」

「ん？　貴様に知り合いなどいたのか？」

「……なんか言い方酷くないか？」

「まあ良い。ならば頼む。一人で大丈夫か？」

「むしろ一人の方が好都合。こっちの片付けの方を頼む」

あまり会いたくはなかったけど、行くしかないか。年下の先輩のところに……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――風紀委員会室―――

「よお、久しぶりじゃねえか六道。何の用だ？　お前が俺のところに来るなんて珍しいじゃねえか」

「……学校にゲーム機器を持ってくるのは校則違反ではないんですか？　風紀委員長」

「ケッケッケ。細けーコト気にすんなよ。俺とお前の仲じゃねえか」

　さっき自分で珍しいって言ってましたよね！？　交流が無いって言ってましたよね！？

　本当に、この人は良くわからん。人が好きなのか、嫌いなのか……いや、十三組生でわかりやすい人物なんていないわけだが。むしろ俺がまともなほうだしな。

「……で？　まさかお子様にそんなこと聞きに来たわけじゃねーんだろ？」

「ええ。雲仙委員長、生徒会執行部から手を引いてもらえませんか？」

「生徒会執行部？　……あー、なるほど。鬼瀬ちゃんがお前らのところに行ったのか？」

「その通りです。話が早くて助かります」

「……ま、黒神のことはお前に一任されてるからな。わかった、鬼瀬ちゃんにも俺の方から言っておく」

「どうも」

やけにあっさり引き下がるな。多少の反発は想定していたんだが……いや、多分まだ諦めてはいないな、これは。

だけど、風紀委員会――雲仙先輩との全面戦争を避けられるならそれだけでもマシか。

「それじゃあよろしくお願いします。雲仙先輩」

「おう、お前もせいぜいがんばりな」

ひとまずはよしとするか。あとはめだかちゃんと連絡を取って帰るとしよう。

………でない。何で？　まさか鬼瀬がなんかしたか？

ま、善吉もいるしなんとかなるだろう。明日話をすればいい。今日のところはもう帰ろう。

──────────────────────────────
──────────────────────────────
──────────────────────────────
──────────────────────────────

───翌日───

……校門前には今日も鬼瀬が立っていた。

だが、今日は彼女に捕まった違反者でないものまで集まっていた。

なぜか、鬼瀬がめだかちゃんのであろう制服を着ているんだから……サイズが合っていない。特に胸の部分がだぼだぼにたるんでい

る。

サイズが違いすぎるんだよ。

めだかちゃんと鬼瀬ではあまりにも大きさが違う。ああなって当然だ。

「ねえー善吉、直人。人間どのレベルの悪事を働けばあそこまでの天罰を受けるハメになるわけ？」

「……俺も知らないんだが、善吉？」

「聞いて驚け。彼女はめだかちゃんをダマして服を着せようとしたんだよ。見てやるな」

「ご愁傷様です」

哀れだな。あの格好で少なくとも今日一日過ごすのか。休めばよかったのに。

……鬼瀬が制服を変えようとしたのは雲仙先輩の連絡が間に合わなかったからだろう。俺の電話もめだかちゃん出なかったし。

つまり、雲仙先輩が本当に諦めたのかどうかはまだわからないってことだ。

まだ油断はできないか……

## 18話　『ご愁傷様です』（後書き）

作「ついに風紀委員会登場しました」

六「雲仙先輩はまともなほうではあるけれど、何かを企んだりする傾向があるからな」

作「風紀委員会との対立。はたしてどのように進んでいくのか？次回、久しぶりに六道が活躍！（予定では）感想いつでもお待ちしています！」

## 19話　『ズルイぜ』

「ふう。こんなもんか」

今日は生徒会の仕事があまりに多く、多岐にわたっていたため役員は分散して仕事に取り組んでいた。

善吉は校舎の補修、喜界島はポスターの張替え、俺と阿久根先輩が二手に分かれて校内の美化活動。

そしてめだかちゃんは音楽室の苦情処理。なんでも音楽室の防音設備にガタがきているらしい。

それで生徒の方から苦情があったのだ。

本来ならめだかちゃんの方につくべきなのだろうが、人手不足のために美化のほうに回った。

まあ、どうせ今回は特に新しいものは何も起こりそうになさそうだしね。

こちらは終わったし後は阿久根先輩と合流して、終わってないなら向こうを……

……なんでまた面倒な展開になんのかな？

「そこにいるのは誰だ？」

「！　……どうしてわかったの！？」

後ろを振り向かずに呼びかけると……女子の声がした。
見ると……風紀委員会の制服。雲仙先輩の部下か。

「ただの勘だよ。たいしたことじゃない」

「勘って……本当に良くわからない人ね。あなたは」

「……よく言われるよ。それで俺に何か用でも……【ピピピッ】……って、着信？」

！　おまけにめだかちゃんから！？　向こうでも何かあったのか！？

「もしもし、俺だけど。どうした？　何かあったか？」

『直人か。すまんが詳しく説明している時間が無い。風紀委員会の刺客が貴様を狙っている。注意してくれ！』

「……了解。他のみんなは任せてもいいか？」

『ああ、私が引き受ける。ただ、貴様は皆と正反対のところにいるからな。間に合いそうにない。大丈夫か？』

「大丈夫。こっちでなんとかするから。じゃあな」

……風紀委員会の刺客。つまり、やっぱり諦めていなかったのか。雲仙先輩。

ま、そうだろうとは覚悟していたけど。

となると、目の前のこの女子が風紀委員会の刺客ってわけね。

「で？　君が風紀委員会の刺客ってわけ？」

「ええ。私は風紀委員特選部隊の一人、児湯彩音（こゆあやね）。雲仙委員長の命により、あなたを止めにきた」

「？　止めにきた？」

俺を倒しに来たのではなく……止めにきた？　目的は時間稼ぎか？

しかし、一体何のために……

「雲仙委員長はあなたと生徒会長の接触を阻止しようとしている。
理由は知らないけれど、委員長のためにも足止めさせてもらうわ」

俺とめだかちゃんの接触を阻止……まさか、今度は雲仙先輩が独断でめだかちゃんを！？
だからこそ、監視役の俺との接触を阻もうとしているのか？

しかし、めだかちゃんのさっきの様子から察して少なくとも今は雲仙先輩と一緒にはいないはず。
ならば逆に、俺がこのコを止めれば……

「安心して。あなたのことは『できるだけ傷つけるな』と言われているから」

「……それで木刀ってわけね。その心配りには感謝するけど、それなら最初から何もしないでくれると嬉しいんだけど」

「ごめん」

宗像先輩とかは普通に日本刀とか所持しているからな。
まあ実際、木刀みたいな直線的な動きの方がやりやすいんだけどね。

……左、右、右、下、左、下……

彩音だっけ？　彼女は木刀で次々と攻撃を繰り出してきた。
振り上げ、振り下ろし、右に薙ぎ払い、左に薙ぎ払い、突き。
動きがいいな。さすが雲仙先輩の部下だ。
だけど、無駄だ。『普通（かのじょ）』では『異常（おれ）』には勝てない。

「な！？　なんで！？　動きが読まれて……ッ！？」

「ごめんね」

彩音の動きが鈍った隙に、彼女の手首に手刀を打ち込む。
……少し強かったか？　痛みで木刀を落としてしまう。
俺がそれを拾い上げて、勝負終了。

「さて、これで終わりだ。聞かせてもらおうか。君たち風紀委員会は何をした？　何が目的だ？」

「……それを私が教えると思うの？」

「決着は着いた。勝者は俺だ。痛い目に会いたくないのなら答えてくれ」

「ッ！　……雲仙委員長は生徒会つぶしとしての刺客を四人送り込んだの。私も含めてね」

四人。おそらくめだかちゃんを除く役員なんだろうが……ならめだかちゃんのところには誰が？

……まさか！！

「……委員長本人はどこにいる？」

「委員長は音楽室に。なんでも、音楽室の防音設備がどうとか言ってたけど……」

「！」

……なるほど、そこで鉢合わせになったのか。雲仙先輩と会ったのは偶然のようだが、皆は無事だろうか？

めだかちゃんは『なんとかする』と言っていたが……

「それで目的は何だったんだ？　本当に生徒会と風紀委員の戦争が望みだったのか？」

「いいえ。本当は会長のことを知りたかっただけ。刺客を送り込んだのは、彼女が反撃するかどうかを試すためよ」

それで俺を引き離したわけか。確かにめだかちゃんのことを知るには一番かもしれないが、あまり大事にはしたくないし。
めだかちゃんの性格・実力を知るために、こんな手の込んだマネをしたのか。雲仙先輩らしいな。

「わかった。もう十分だ」

「！！　……くっ！！」

……ん？　あれ？
なんでそんな、今にもとどめをさされそうな人みたいに目を閉じて震えてるの？　なぜ顔を腕で隠す？

さっきの言葉を気にしてか？

「……ありがとう。木刀はここにおいておく。委員長には失敗したと伝えな。
あの人も、俺のことは時間稼ぎさえできればいいと思っているだろうし」

「……え？」

「何？」

「えっ、いや……何もしないの？」

俺はどこの悪党だ？　倒した相手にとどめをさすとか……おまけに女子に。
まさか雲仙先輩。あなたが変なこと吹き込んだわけじゃないですよね！？

確かに俺は人間のクズかもしれないが、最低な人間に落ちぶれた覚えはない。

「もう決着は着いている。襲ったことなんて気にしていなさ。俺は

怪我していないし。
それに君は委員長の命令で動いたんだろう？　なら、君を責める理由がない」

「！」

「それじゃ俺は行くから。情報提供、感謝する」

「あ、あの……」

「？」

「ごめんなさい。それと、ありがとう」

「……正直だね。俺は君みたいな子、好きだな」

「！　な、ななな何を言って……！？」

あれ？　なんか一瞬で顔が赤くなった。
……まさか、え？　マジで？

「じゃ、じゃあ。また会えたら今度は平和的に！」

「あ……」

逃げたわけじゃないよ！？　善吉とかめだかちゃんのことが心配だったから……本当だよ！？

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――生徒会室―――

「みんな無事か！？」

「おお、直人。遅かったではないか。貴様が最後だぞ」

お、みんないる。どうやら怪我はないようだな。無事でなによりってところか。

本当にめだかちゃん一人でなんとかするとは驚きだが……

「丁度いい。直人も来たところだ。貴様ら、これを見よ」

「……？　なんだこのボール？」

めだかちゃんが出したのは指二本で持てるような小さなボール。柔軟性もあるようだが……

「否！　ただのボールではない。スーパーなボール……つまりスーパーボールだ！」

「「「（はあ……）」」」

……スーパーボールって本当にそういう意味なのか？　それで、そのスーパーボールの意味は？

「風紀委員長、雲仙二年生の使う奇妙な術のことは貴様たちも聞いていよう」

「ああ……えーっと、なんか変な起道の正体不明な飛び道具とかだっけ？」

「うむ。このスーパーボールが、その正体だ！」

「はあっ！？　風紀委員長の武器がスーパーボールだってのか！？」

マジですか！？　こんな小さいのが武器だと！？
これで今まで生き残ってきたのか！？

「うむ十中八九間違いなかろう。こいつの反射力・反発力は大したものだぞ。
ほら、このように指で弾くと壁という壁に跳弾して……な？」

「「『な』じゃねーよ！」」

急にスーパーボールを使うなよ！！　危ないだろ！！

……しかし、そんな短時間で見抜いたのか。俺も知らなかったのに。

理事長は個人に配布する報酬の中身のことまでは教えなかった。
雲仙先輩が報酬を武器にして使っているとは聞いていたが……まさかこんなものだったとは。

パチパチパチ

……？　拍手？　後ろから……って、なっ！！

「いやーお見事お見事！　一年以上そのテクでやってきたけど、タネを見抜いたのはテメーで二人めだぜ黒神！」

「！　雲仙先輩！！」

「よお六道。元気そうだな、安心したぜ」

「……刺客を送っておいて、よくそういうことを言えますね」

「そう言うなよ。お前の実力を信じてたんだぜ」

どうだか。ひょっとしたら、ここで俺も片付けられたら好都合とも考えていたのかも知れないし。
油断もスキもあったもんじゃない。

「もちろんただのスーパーボールじゃ話になんねーから、素材に気を使ったりなんだり武器になるようそれなりの改良は施してあるがね。ま、でも正体が割れたらそれで終わりな子供だましだよ。言うなら手品みてーなもんだ」

雲仙先輩はスーパーボールを制服からばら撒いた……これだけの量のスーパボールが一体どこに入っていたんだ？

「……何このヒネてそーな子供。全然可愛くないんだけど」

「「「（喜界島さん空気読んで！！）」」」

「何の用だ雲仙二年生」

「用がなくちゃ来ちゃいけねーってのか？　冷てーことおっしゃるなよ悲しいなあ！

仲良くしようぜ黒神一年生。オレ達は怪物同士で、化物同士で、似た物同士なんだからよお」

……このオレ達には多分俺とかも含まれているんだろう。

一三組生が、そして『一三組の一三人』が。

「いや実際テメーが入学してきた時から思っちゃいたんだよ。テメーとオレは鏡写しさながらによく似てるってなあ！」

「……でも、左右逆なんだろ？」

「おうよ。そっくりだから相容れねえ……人間が好きなんだって？　多くの人間を救い、改心させてきましたってか？　ケケケスゲーよ！

……だけど黒神、それはズルイぜ。テメーは人間のキレーな面しか見ちゃいねー。

人間が好きとのたまう以上は、嘘も裏切りも、罪も醜さも、妬みも未熟さも、憎しみも争いも全部ひっくるめて好きじゃねーとズルイだろうが！」

……『一三組の一三人』中、最も人間嫌いと呼ばれる雲仙先輩だ。やはり、めだかちゃんと雲仙先輩では根本的思想からすでにかけ離れている。

「ちなみに言うまでもなくオレは人間が大嫌いだ。
優しさも友情も！　愛も奉仕も！　義理も平和も大嫌いだ！！
それでこそ誰彼区別なく正義の鉄槌を下せるってもんだろ？」

……だがおかしい。いきなり乗り込んできてこんな話。
めだかちゃんがこんなことで信念が揺らぐわけ無いってわかってるはずなのに。まるでそれこそ時間稼ぎをしているような……

「上から目線性善説とかよー、実際その聖者っぷりはヒデエや。聖者（テメー）の理想に従えない奴はイコール愚者（ダメ）ってコトになっちまう」

……窓の鍵を閉めた？そういえばさっきもドアを閉めていた。スーパーボールの威力をあげるためか？

確かに、密室のほうがスーパーボールは効力があがるだろうが……

どちらにせよ、閉めることが目的なら、開けておいた方がいいな。せめてドアのほうだけでも……

「おい六道！　なに勝手にドアを開けてんだよ！

せっかくオレがお前達と内密な話をしようって思ったのによ！」

「……大丈夫ですよ。どうやら、この近くに人はいないみたいですから」

「みたいって、それも勘か？」

「ええ」

「……あー、わかった。別に構わねー」

やはり、密閉状態にすることが目的か。
さっきからヤバイ気がするんだけど……まずいな。何がヤバイのかがわからない。
やっぱり、なんだかんだ言ってもこれが俺の異常性の弱点なんだよな。

「どうやら二つの誤解があるようだな、雲仙二年生。
第一に上から目線性善説などは善吉が勝手に言っておるだけで私は聖者などではないし第二に――！！
貴様達離れろ！　さっきこやつがバラ撒いたのはスーパーボールではない！　火薬玉だ！」

……え！？

「おっとバレたかい？　ダメだなーオレって。本当にダメだ！　手品下手過ぎ！　だがまあ遅い、仕込みはギリギリ終わってる。
炸裂弾『灰かぶり（シンデレラ）』！　一個ありゃ老朽化した壁くらいならヨユーでブチ抜けるシロモノだ」

そして、雲仙先輩が懐からマッチを取り出す。

「……ほとんど密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃすまないよ」

「そうだ！　子供っぽい脅しはやめろ！　悪ふざけにしては度を越している！」

「テメーらニュースとか見てねーのか？　ダッセエな。最近のガキは何考えってかわかんねーんだぜ？」

「！　……雲仙冥利！　お前は、自分の独断行動が許されるとでも思っているのか！？」

「ケケケ、安心しろよ六道。これは『パーティ』としてではなく、風紀委員長個人の戦争だ」

……！！　ダメだ！　もう、止められない！！　もう止まらない！！

「どーするよ黒神。こっから見事改心させてみせるんだろ？　それともやめてくださいってお願いしてみるか？」

「……やめてくだ――――」

「おせェよ、ボケ」

その瞬間、生徒会室中に巨大な爆発音が響き渡った。天そのものが崩れ落ちてきたかと思うような、轟音が。

轟音と爆風が俺たちを飲み込んでいった。

## １９話　『ズルイぜ』（後書き）

作「勝手に名前をつけてしまった……児湯についてわからない方は単行本３巻１４６ページを見てください」

六「……これで本誌で名前明かされたらどうするんだ？」

作「その時はその時で……ていうかまだ名前明かされてないですよね？
彼女セリフとか与えられてないので口調とか想像して書いたんですが……どうだったでしょうか？　不自然だったら言ってください」

六「それで……雲仙先輩との戦争か」

作「今回明かしたとおり、『真頼勘』のちょっとした弱点が。
危険だということはわかるけれど、何が危険なのかがわからないという……本当に詳細はわからないんです」

六「……」

作「感想いつでもお待ちしています。これからもよろしくお願いします！」

## 20話　『許さない』

箱庭学園生徒会室。

雲仙冥利の爆撃により、生徒会室は以前の面影を残すことなく崩壊していた。

教室は無惨に破壊され、爆発によって形成された瓦礫の山が形成されている。

その中から人――――雲仙冥利が出てきた。

「ケッ！　風紀委員会特服『白虎（スノーホワイト）』――ダンプにはねられてもへっちゃらだっつー

触れ込みの対圧繊維で縫製された最新科学の産物だが、重くて動きずらいのが難点だな。

……しっかし、思ったより被害が小せーな。ドアが開いていたにしても、ここら一帯は消し飛ばせると思ったんだがな……ん？」

雲仙は床に落ちていた火薬玉を見つけた。

爆発することなく、残っていたものを……

「（不発弾……？　いや、オレが管理してんだぜ？　それはありえねぇ……じゃぁ？
ああなるほどね。あの女手近にあった花瓶の水をブチ撒けて、着火直前に火薬玉をいくつか濡らしやがったのか。）
火ィつける前に水びたしにされちゃー不発にもなるわな」

そして雲仙はもう一つ、奇妙な点に気がつく。
焼け残った窓ガラスだ。

「窓ガラスが不自然な割れ方をしているぞ……どうやら溶ける前にすでに割れてたみてーだな。
爆破の瞬間、蹴り出された火薬玉も相当数あるってわけだ。
けどまあ、そんなの所詮は焼け石に水――――！？　なっ……何ィ！？」

煙が晴れていく中、雲仙は確かに見つけた。多少の傷こそあれ、生徒会役員がみな無事である様子を。
だがしかし、彼の知人である直人だけが、なぜかボロボロの状態で倒れているのを……

――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「……なぜ、このようなことをした？　直人」

「なぜ？　……そんなの、めだかちゃんがみんなを守ろうとしたのと同じだよ」

「！！」

……しっかし、やばいな。体中痛い。なんて威力だよ。軽く部屋がなくなっているし……

これが、雲仙先輩の本気ってわけだ。

「なっ……何ィ……！？　黒神！　テメー、一体何をした！？」

雲仙先輩も無事か……まあ、驚くよな普通。部屋が無くなったのに関わらず、みんな無事でいるんだから。本来なら、ここで全滅していてもおかしくないほどの威力なのだから。

「……簡単なことだ。爆発の恐ろしいのは爆熱よりもむしろ爆風にある。
だから私はこの三人を咄嗟に壁際のロッカーに詰め込んだ。
扉を外から閉めなければならなかったので、私は外に残ったがな」

「……！？」

「本当は直人も詰め込むはずだった……なのに」

「そこで、外に出ためだかちゃんに俺の制服をかぶせて、俺がめだかちゃんを覆ってたんですよ。
めだかちゃんに少しでも爆風がいかないように、ね」

「！　ば、バカじゃねーのか！？　六道！　お前は黒神と違って肉体自体は普通なんだろ！？
なのに、なぜソイツをかばった！？　お前の役目は守ることじゃねーだろーが！！　死にてーのか！？」

……まあ、実際そうなんだろうな。
多分、俺がいなくてもめだかちゃんは無事だっただろうし、かばう必要なんて無かった。
俺の異常は勘だけだし。むしろ結果的にmだかちゃんの足を引っ張ってしまったのかもしれない。

だけど……それでも、

「雲仙先輩……俺を傷つけようと、殺そうと構わない。
どうせ…俺は誰も守れないし、誰に対してもまともに顔を合わせられないような、クズだ。
……だけどな！！　それでも！　それでも、俺の仲間を、友達を傷つけるのだけは！　許さ……ねぇ……」

ドサッ

「！　ろ、六道……」

……ダメだ。立つことさえできないって……どんだけだよ？
せっかくかっこいいこと言って、反撃に移る場面だろうに……ちくしょう。

ダメだ。力が、入らない……立つこともままならない。

「ケ、ケケケケケ！　いや本当スゲーわ、お前らのその聖者っぷり、

気持ち悪いーっ！
テメーらのガンコな信念にオレはちょっぴり感動すらしてきたぜ！」

「……」

「それでアレだろ？　この期に及んでもどうせテメーは争う理由なんかねーって言うんだろ？
仲間もオレも最小限の傷で済んで一件落着！
めでたしめでたしハッピーエンドってことになるんだよな――――」

「うるさい」

「！！」

……え？　めだかちゃん、なのか？
これは、怒っているのか？　あのお人よしが！

だが、なんだ？　この威圧感は……

「……哀れなことだ。貴様もかつては人の善性を信仰する心優しき美少年だったに決まっている。情状酌量に値するだけのきっかけがあってそのような残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考え

られん
――しかし！　だからと言って、私は貴様を許さない！！」
「！！」

雲仙先輩が、ひるんだ！？
睨まれただけで！　凄まされただけで！
なんなんだ！？　この異常なまでの殺気は！？

「雲仙二年生、貴様の言うとおりだ。私と貴様はそっくりだよ。
私も貴様と同じで自分を正しいと思ったことなど一度もない。
もっといい方法はなかったか、ちゃんと他人の役に立てているか、起こりうるすべての可能性を考えたか。誰かの悲しみをみおとしていないか、気付かぬうちに易きに流れていないか、人を助けることに慣れてしまってはいないか。
いつだって迷っているし、いつだって怖い」

「……」

「私は正しくなんかない。ただ、正しくあろうとしているだけだ！！」

「？　わかんねーよ、何言ってんだか。おんなじじゃねーかそんな

の。」

「わからんか？　私には貴様の言うような大層な信念などないと言っておるのだ。
少なくとも、友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念など私にはない！！」

誰だ、こいつは？　何だ、これは？
これが、めだかちゃんなのか？　これが、めだかちゃんの異常性なのか！？

髪の色が薄くなって、目つきが鋭くなった。
見た目だけでも変化は激しいのだが……違う！　それ以上に、性格自体が！

「私の聖者っぷりが気に入らないんだって？雲仙二年生。
いいだろう。ならば、がっかりさせてやろう。
私が怒りに任せて暴れてしまうような、ただのくだらない人間だということを教えてやろう！！」

めだかちゃんが怒りに任せてどんどん雲仙先輩に迫っていく……！

「人吉クン、めだかさんがあの状態になるのはいつ以来だ？」

「……中一の夏休み以来ですよ。だから三年振りですか」
「そうかい……そうだな。俺もあの頃はめだかさんのことを血も涙もない理想主義者だと思っていたよ」
「！？　どういうことだ善吉、阿久根先輩。あの状態のめだかちゃんを知っているのか！？」
「そっか。直人は知らなかったな……黒神めだかの真骨頂その？『乱神モード』！
こうなったらもう俺でも止められねーよ。雲仙、お前おわったぜ。」
乱心モード！？　あの善吉でも止められないって……一体！？
「……ケケケ！人のコト勝手に終わらせてんじゃねーぞ、ボケ！！
乱神だろーが魔神だろーが、火山の前じゃ消し炭だぜ！！」
雲仙先輩がスーパーボールを手にめだかに向かって突っ込んだ。
……だけど、
「ガッ、ガハァッ！！」

めだかちゃんの一撃が腹に直撃。吐血……！！　一発で！？　そんなに威力があるのか！？

理事長から支給されているあの頑丈な『白虎』を、素手で……！！

「ダンプに跳ねられてもへっちゃらな制服だって？　それを聞いて安心した。

つまり、三発までなら大丈夫ということだよな。私が本気で殴っても！！」

## 20話　『許さない』（後書き）

作「アブノーマルは孤立しがちなだけに絆を裏切りはしない。直人も決して例外ではなかった……」

六「……正確に言うと少し違うな。俺の場合は昔、孤立にさせてしまったからこそもう誰も仲間を見捨てたりはしない、といった感じだな」

作「めだかと雲仙の対決。やはりこうなりました。次回さらに戦いが激化する！
お楽しみに！　感想いつでも誰でもお待ちしています！」

## 21話　『やり過ぎだ』

めだかちゃんのパンチで雲仙先輩が壁に叩きつけられた。
……どうしてあそこまで吹っ飛ぶ！？　衝撃吸収の役割を担う『白虎』を着ているのに！

「たいしてダメージがあるとは思えんがそのまま立ちあがれないふりをしておけ。今ならまだ許してやれるかもしれん。」

「……ケケケ、冗ー談！　痛くもかゆくもねーっつーの！　ノーダメージだよボケ！」

いや、実際のところ強がっているだけだな。雲仙先輩は体を支えるのもつらそうだ。
そのまま立ち上がれない振りをすれば終わっただろうに。
もっとも、それでめだかちゃんの怒りが収まるかどうかは保障できないがな……

「そうか、あくまでも戦争を選ぶか。ならば私の理性が少しでも残っている内に忠告しておこう。
私はあらゆる格闘技の指南を受けておるが、その技術を貴様相手に使うことはない！
私はただの衝動的な怒りに任せて暴力に訴え、人間ではなく獣の

ように貴様を撃つ！」

「いいだろう！　テメーが獣のように戦うのなら！　オレは人間のように戦ってやる！
テメーの大好きな！　オレの大嫌いな人間のようにな！！
そして、黒神めだか！　正しい正しくないにかかわらず正義は必ず勝つんだよ！！」

雲仙先輩が駆け出すと同時に、めだかちゃんは拳を繰り出した。

「ぐ、ぐふぅ！」

避けられなかった……いや、わざと避けなかったのか？

「……どうやら何か企んでいるらしいな。しかしまあ、とどめを刺さずにいられる気分でもないか」

「めっ……めだかちゃんっ！」

「……私の主義に巻き込んで悪かったな貴様達。
あとで腕章を返してくれ。これからは私一人でやっていくことにするよ。」

「！！」

まずい……あのめだかちゃんが、善吉までも放って孤独を選んだ。
このままだと、本当に一人でどこか遠くに行っちまう！！

めだかちゃんは静かに、雲仙先輩が突っ込んだ校舎の中に入っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――数分後―――

突然校舎が擦れだした。めだかちゃんの怒りを示しているかのごとく、轟音をたてながら……

「……なにあれ？一体何が起こっているの？」

「決まってんだろ、めだかちゃんが怒ってるんだよ。
……直人、喜界島、阿久根先輩。もしも引き際があるとすれば多分ここだぜ。
めだかちゃんの側にいればこれからもずっとこんなことが続く。これ以上巻き込まれたくないんだったら、あいつの言う通り今が生徒会の辞め時だ。」

「「「!!」」」

……確かにそうだな。この先もこれ以上のことが起こってくのは間違いないだろう。
だけど、聞かなくてもみんな答えは出てるだろ。

仕方がない。少しばかり、無茶するか。

——————————————————————————————

——————————————————————————————

——————————————————————————————

——————————————————————————————

「情けねえ限りだが、オレにはもう何も残っちゃいねえ。

しかしな、黒神それでもオレはテメーに負けちゃねーんだ。なぜだかわかるかい？
なぜならテメーはオレを改心させることができなかった！　それはテメーにとっちゃあ敗北だろ？　テメーは確かにオレより強かった。だがそれだけだ。
他のすべてを手折られようと、オレは信念を曲げやしねえ。オレは明日からも何も変わらずこう言い続けるぜ。オレは人間が大嫌いだ！！」

「そうか。私は人間が大好きだ。貴様は改心しなくていいよ。貴様に明日は来ないからな！」

その言葉を最後に、めだかちゃんが雲仙先輩にトドメを刺そうとした。

……だが、

「やめろめだかちゃん。やり過ぎだ」

拳が振り下ろされる直前、俺たちがめだかちゃんを止めた。

「……離せ貴様たち。巻き込まれたいのか。」
「うんそうだよ。あたし達は黒神さんに、巻き込まれたいんだ！」
「めだかさんになんと言われようと、俺達は生徒会をやめません。」
「俺達は、自分の意思でお前について、きたんだ。
第一、俺は役員じゃないからな。そんな命令を受ける理由が無い
……最後まで、ついてってやるよ！」
「……めだかちゃん。俺達はもう二度と、お前を一人にはしないよ。
」
「！！」

俺たちの言葉を受けてか、めだかちゃんの姿が、雰囲気がいつもの
ものに戻っていく。

「雲仙二年生。貴様、生徒会に入らないか？」
「……あ？」
「もとより副会長には敵対者な者に就いてほしかったのだ。不知火
には断られてしまったが。

ここまで私と張り合った貴様は中々に適任ではないか！」

いつものめだかちゃんに戻った！

……しかし、殺し合い寸前までいった相手をこの場で勧誘するか？

「……っざっけんな！　オレは風紀委員長だぞ！？

誰とでも仲良くできると思ってんじゃねーよボケ！！」

「……そうか残念だ。だが私はこれからも、誰とでも仲良くできると思い続けるよ。

今回はたしかにやり過ぎた、すまなかったな雲仙二年生。私が悪かったよ。

貴様には己の未熟さを学ばせてもらった。これからもご指導ご鞭撻のほどをお願いするぞ！」

それだけ言い残してめだかちゃんは去っていく。

「ちょっ……めだかさん、どちらへ！？」

「病院に決まっておろう。実はあちこち骨が折れておる。内臓もズタズタだ」

「「「えええええええっ！！」」

その状態で暴れていたのか。

……と言うか、

「俺も……多分もう、ヤバ……」

ドサッ

「六道クン！？」

「……すみません阿久根先輩。もう…立つのも、限界に……」

「俺が病院まで背負っていこう……君には感謝している。
だが、その前にいくつか聞きたいことがあるんだが、構わないかい？」

……さっきの雲仙先輩との会話で気付かれたか。
まあ、この人は鋭いからそうなるとは思っていたけどな……

「わかりました。ただ、ケガが治ってからでもよろしいでしょうか？」
「ああ。今は休んでいてくれ。ありがとう、守ってくれて」
「……いや、俺は何もできてない……です、よ」

阿久根先輩に身を任せて、俺は意識を失った。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――理事長室―――

「六道くんが負傷、雲仙くんもしばらく戦線離脱ですか。困りましたねえ。
『十三組の十三人』は一人でも欠けちゃあダメなのに。

このままでは私の計画が破綻してしまいますよ。どうすればいいと思います？　袖ちゃん」

「どーもこーも！　別に悩む必要なんかないって、おじいちゃん。いやさ、箱庭学園理事長不知火袴総帥！
困った時は迷わず選ばず、目安箱に投書すればいいんだよ」

六道、そして雲仙の二人の『フラスコ計画』関係者の突然の離脱。これはめだかや六道が知らないうちに、新たな争いの火種となっていた。

## 21話　『やり過ぎだ』（後書き）

作「風紀委員編、終了！」

六「……俺この先どうなんの？」

作「ついに阿久根先輩に感づかれたからね……多分めだかや善吉も何かしら気付いているだろうし」

六「何気ピンチじゃん。負傷してるし……」

作「次回は六道の今後に関わってくる話になりますかね。みなさん次回もよろしくお願いします！」

## ＰＶ：１００，０００アクセス突破記念番外編　『誰？』（前書き）

活動報告に書きましたが、ＰＶが１００，０００アクセスを突破しました！
皆さんありがとうございます！

これを記念して番外編を書きました！
直人が自分の異常に気付いた時の話です。

……ですが、少しネタバレが含まれているので苦手な方はご遠慮ください。

これからもよろしくお願いします！

## ＰＶ：１００，０００アクセス突破記念番外編　『誰？』

六道直人は幼少時、自分の中には意思とは何か別のものが存在する……それこそ自分の中にはもう一人の自分がいるのではないかと思っていた。

自分が危機（ピンチ）に陥ったとき、判断に困った時に、知らぬうちに自分の意識や考えとは別に声のようなものを感じるのだ。

当時の彼は第六感とか直感、あるいは勘というものを知らず、親に話しても『そんなわけない』『ありえない』『お前はおかしい』などと、まともに取り合ってはもらえなかった。

だが、親がある病院に彼を連れて行ったとき、ついに彼は自分自身が普通ではなく異常だということに、そして自分の異常性に気付くことになる。

あれは通院が始まって一週間ほどたった日のことだった……

「六道クン、入ってください」

その日も検査のために病院に通っていた。
しばらく通院が続いていたために担当医の者ともすっかり仲良くなっていた。検査のことだけでなく、日常のことまでも色々と話し合うほどに。

……だが、彼は無意識で、彼の中の声と同じ事を担当医に向かって言ってしまった。

「……誰？」

「ん？　どうしたのかな、六道クン」

「お姉さん……誰？　先生じゃ、ない！」

担当医に向かって……担当医にしか見えない人に向かって彼は言ってしまった。

この一言が彼の運命を決めてしまったと言ってもいい。

確かに記録上、その病院では彼の異常性は明かされなかった。

だが、一人の女性は知った。彼の異常を。

直人も知った。自らが異常者だということを。

この時こそ、六道直人が本当に自身の異常性に気付いた時である。
その女性はめだかや善吉といった彼の幼馴染達よりも、早くから彼の異常性に気がついた。

しかし、今の六道はその女性のことを覚えていない……いや、知らない。

この一言がなければ、六道がその女性と本当の意味で出会うことはなかった。
その女性が彼に興味を持つことはなかった。
六道が自分の異常に気付くのも遅かったかもしれない。

良くも悪くもこの日こそ、一人の異常者が真に目覚めた日であった。

## 22話　『六道直人だ』

「……目が覚めるとそこは見知らぬ天井だった」

一度言ってみたかったな、このセリフ。

……でもマジでここどこだ？

確か雲仙先輩との戦いが終結して、なんとか帰ろうとしたんだけど体が限界でそれから……それから？　どうしたっけ？

阿久根先輩に負ぶってもらったところまでは覚えてるんだけど……その後のことが何も覚えていない。気絶していたのか、俺は。

「目が覚めた？」

「？」

突如横から声が聞こえた。見ると箱庭学園の制服を着た女子がイ

スに座って俺の様子を伺っていた。
確かこの前、風紀委員との抗争で戦った……

「キミは確か……児湯、だっけ？」

「そう。児湯彩音」

「……ここは？」

「ここは箱庭病院。あなた、ここに運びこまれたのよ」

つまりここ病室か。通りできれいに整っている部屋なわけだ。
そういえば俺けっこうな傷負ってたっけ。あの後ずっと意識がもどらなかったのか、俺は。

「でもよかった、本当に無事で。三日間ずっと目を覚まさなかったんだもん」

「……三日！？」

「ええ。雲仙委員長と生徒会の衝突から今日で三日。会長や雲仙委員長はもう学校に復帰してるよ。
もっとも、雲仙委員長は怪我が酷くて委員会の仕事は私達に任せられてるけどね」

……元気だなあの二人。
あんな大怪我しておいて、もう学校に通って大丈夫なのかよ！？

……だが、それよりも問題なのは俺が三日も学園から離れてしまったということだ。
話を聞く限り、雲仙先輩の怪我はまだ治りきってない。
俺も入院しているし、フラスコ計画の関係者が立て続けにいなくなったことで、理事長達が変な動きをしていなければいいんだが……

「でも、なんで児湯がここに？　雲仙先輩が学校に来ているのなら、尚更学校にいたほうがよかったんじゃないのか？　……それとも、雲仙先輩の命令か？」

「ううん。委員長は何も関係ない……ただ、本当にあなたのことが心配だったから。傍にいたかったから……」

……真頼勘がなくてもわかる。これは嘘をついているコの目じゃない。本当に俺を心配してくれたのか。

ヤバイ。涙が出てきた。まだめだかちゃん達以外に、こんな俺に優しくしてくれる人がいるのか……

「……直人でいい」

「え？」

「あの時はまともに自己紹介できなかったからね。雲仙先輩から聞いているだろうけど、改めて。
一年一三組所属、六道直人だ。仲のいいヤツは俺を直人って呼ぶ。だから……彩音も直人って呼んでくれ」

「！　……うん！　よろしく、直人」

……純粋な笑み。本当に何も知らないコの笑顔だ。
俺なんかと違って、『普通』で純粋な綺麗なコ。

羨ましいな……俺もできることなら、異常性なんてなしに、普通に生まれたかった。

「……ところで、俺の見舞いって彩音だけ？　善吉とか、生徒会役員は来なかった？」

「ううん。一回も来てないけど」

……え？

最近会ったばかりの彩音が見舞いに来てくれて、幼馴染や仕事仲間が見舞いに来ないってどういうこと！？

いかん。自分の人望の無さに泣けてくる……

「なんでも、爆発でなくなっちゃった生徒会室のことで、いろいろ仕事があったみたい。

教室を借りたり、部屋にあった物を移動したり……」

ああ、そういえば部屋がまるごとなくなったんだっけか。

なるほど、じゃあ仕方がないということにしておくか。あいつらが友達……幼馴染よりも仕事を選んだ仕事中毒（ワークホリック）者ということにしておくか。

俺泣きそう。あいつらの薄情さに、そして対照的な彩音の純粋なやさしさに。

「否、直人よ。私達ならここにいるぞ」
「久しぶりだな。元気だったか直人」
「「！？」」

めだかちゃん！　善吉！！

いつの間にか二人が病室内に入ってきていた。
……お前ら入る時ノックしたか？　だめだよ、病室に入る時はちゃんとノックくらいしないと。

「児湯同級生。すまんが私達は直人に聞きたいことがある。少しの間、席をはずしてくれんか？」
「あ、うん……じゃあ直人。また後でね」
「ああ、ありがとう」

彩音は病室から立ち去っていった。

さて、この二人が来たのは見舞いなのか、それとも……

「へー、お前あの子と仲良くなったのかよ。確か、風紀委員だろ？」

「ああ、お前らが一回も来てくれなかったのに、彩音は優しくてな。見舞いに来てくれたんだよ」

「悪かったって。こっちもいろいろありすぎたんだよ」

「いろいろね。そういえばお前らなんかしたか？　なんか……強くなったみたいな感じがするんだけど……」

「やはりわかるか。なに、優秀で変態なコーチの下で徹夜しただけだ」

「変態？　……ああ、真黒さんか！　あの人（へんたい）もこの学園にいたのか！」

なるほど。納得がいった。

めだかちゃんの兄であり、マネージメントの天才で魔法使いで変態と呼ばれたトレーナー、真黒さんなら、それくらい三日もあれば可能か。むしろ十分すぎる。

「それで、今日はどうした二人とも。俺の見舞いにでも来てくれたのか？」

「いや、今日は貴様に聞きたいことがあってきた」

……そこは嘘でも『そうだ』って言うところなんだと思うんだけど！？

酷い！！　こいつら本当に酷い！！　これが俺への罰なのか！？

彩音、今からでも戻ってきてくれ！

「直人。フラスコ計画について、貴様が知っていることを教えてもらおう」

「……フラスコ計画？　なんだそれ？　理科の実験でもするのか？」

「とぼけるな直人。現時点で推測されるフラスコ計画の性格。そして、以前の雲仙二年生と貴様の会話から考えて、貴様が計画にかかわっていないはずがない！」

……やはり雲仙先輩のことで疑問をもたれたか。

この様子だとフラスコ計画のことを理事長や真黒（へんたい）さんから聞いたのか？　あるいは他のメンバーや一三組生と接触したのか。

なんにせよ、ここが潮時か……これはもう、言い逃れできる状況ではない。

阿久根先輩ならまだしも、めだかちゃんや善吉が相手なら尚更だ。もう、逃げるわけにはいかない。

「……ご名答。さすがは生徒会長、黒神めだか。理事長が興味を抱くだけのことはある」

「？　直人？」

「お前の言うとおりだ。俺は『一三組の一三人』補佐役。一年一三組、六道直人だ」

だから、せめて最後くらいは正直にいよう。せめて幼馴染（こいつら）にだけは最後くらいは……

## 22話　『六道直人だ』（後書き）

作「なんだか彩音の出番が増えてきた……」

六「もはや完璧にオリキャラ化してるんじゃないか？」

作「この方が話を作りたかったんで……遂に直人の自白。『一三組の一三人』に所属していることは感ずかれてるし……どうなるんだか」

六「雲仙先輩も本当に余計なことをしてくれたな。今回の事件がなかったならば、まだこんなにも早く問い詰められることもなかっただろうに……」

作「そういえばタイトルのセリフが二度ありましたね。どうでもいいことだけど」

六「うん、本当にどうでもいい」

作「はいすみません……次回は直人と、めだか・善吉が思いをぶつけ合いますね。直人の運命は……！？」

## 23話　『約束する』

「……やはり、貴様もかかわっていたのか。雲仙二年生と知り合いというのもこれで理解できた」

「その通りだよ」

「ならば貴様は計画の詳細も知っているのだな！？」

「まあ、少しは知っている。といっても本当に少しだ。他の先輩ほどではない、加わったばかりだし……だがそれでも、それをお前達に教えるつもりはない」

「……どうしてもか？　悪いがその時は身体（からだ）に聞くことになるが……できれば手荒なマネはしたくない。貴様から自主的に話して欲しいのだが」

「それは無理だ。そんな簡単に俺が弱音をあげると思っているのか？

……俺も先輩達が怖いからな。裏切るわけにもいかないし……だから、一つだけ教えてやる。俺がお前達に再会したのは、お前達に協力していたのは……全て理事長の命だ」

「！？　な……！？」

「ど、どういう意味だよテメー！？」

「そのまんまの意味だ」

やはり驚くか。この様子だと、本当に計画の概要くらいしか知らないと見える。多分メンバーのことも知らないだろうな。

こいつらに着くって手もないわけじゃないんだが……今更無理だよな。

そんなことするくらいなら、最初からそうするべきだったんだから。

さんざんこいつらのことを騙しておいて、今から協力するなんてむしがよすぎる。

……だったらせめてこいつらに打ち明けて、こいつらの審判を待つだけだ。

「理事長はお前達が考えている以上に『黒神めだか』という異常に注目していた。それこそ、生徒会長就任前からな」

「……」

「そして、その異常性を観察するために適任が選ばれた。会長やその傍にいる男と親しく、疑われにくいヤツがな」

「……それが、貴様というわけか」

「その通り。断る理由もなかったからな。引き受けたよ。お前のことを理事長に報告していたのも俺だ」

「じゃあお前は！　最初から俺達のことを監視していたってことか！？」

「監視というより観察だな。黒神めだかの異常を調べるために」

「……貴様が役員に加わらなかったのも、理事長の命か？」

「ああ。おそらくあの人も、俺がお前らに加担することを恐れてたんだろう」

……おそらくというが、絶対そうだな。

一年で忠誠心が無い上、めだかちゃん達の幼馴染であるがゆえに寝返りやすい。

だからこそ、あの人は俺に対する計画の情報を規制したのかもしれない。

時計台に呼び出すことが少なかったのも、今考えれば俺に情報を与えないためでもあったんだろう。

後に敵対する時、フラスコ計画の、『十三組の一三人』の情報を少しでもこいつらに知らせないために……

「俺がお前達に協力していたのは間近でお前達を観察するためだ。実際その方が動きやすかったしな」

「……そうか」

めだかちゃんは突然イスから立ち上がった……判決をくだすってわけか。

よかった。せめてこいつらの判決なら、何も文句はない。

「貴様は最初から私達の仲間ではなかった。最初から私達を利用していた……そういうわけだな」

「その通りだ。俺はお前達を騙しながらもお前達とともにいた。理事長の任務を実行するためにな」

「めだかちゃん……」

「ならば、直人……

貴様、今から私達の仲間になれ！」

「……は？」

今、コノ人なんて言った？

「今まで私達は仲間ではなかったというのだろう？　ならば今が丁度良い機会だ。今からでも私達の仲間になれ。
私は、貴様のことを最初から仲間だと思っていたが、貴様がそう思っていなかったなら仕方が無い」

「！　ふ、ふざけてんのか！？　お前は今の話を聞いてたのかよ！？　俺はお前達をずっと騙してっ！！」

「騙す？　いつ騙した？　たしかに貴様は計画のことを私達に黙ってはいたが、騙してはいないであろう？」

「……！」

「それに、貴様は我々のことを雲仙二年生から体を張って守ってくれた。
あの時に言ったではないか『仲間を、友達を傷つけるのは許さない』と。あれは、私達のことを言っていたのだろう？」

「……」

「私の知る六道直人という男は、いつでも私や善吉とともにいてくれた。私達を支えてくれた。
だからこそ、私は貴様と仲間であり続けたいのだ」

「直人。俺たちはお前を敵としてなんか見てねぇ。話を聞いた今でも、友達だと思ってる」

「……なんでそんなに俺のことを信じる！　信じられる！？　もうやめろ！
一度裏切った人間は平気で何度も裏切り続ける！　信じてるお前達をまた利用するかもしれない！！」

「……直人。貴様の言うこともわからんでもないが、たとえ百億人から一兆万回騙されたところで、私は好きな人を疑ったりしないよ」

「……！　バカ……」

なんで、そんなにも俺なんかのことを……！

こんなの聞いて、裏切るなんてできねーだろうが！

「直人。お前は、俺やめだかちゃん、阿久根先輩、喜界島と一緒にいたいとは思わないのか？」

「……そんなわけない。ただ、俺にはその資格がない」

「ある。お前が、俺たちに黙ってたのを気にしてるってんなら俺たちが許す！」

「……だが、」

計画を抜けると言うことは、つまりフラスコ計画関係者を全て敵に回すということになる。

俺は知っている。フラスコ計画を抜けた人間がどれだけの代償を払うかを……

最初に高千穂先輩が言っていた報復のことだって決して嘘ではない……おそらく、俺は本当に消されるだろう。なんの容赦もなしに、ただ一方的に。なんの証拠も残すことなく。

最初から六道直人という存在はいなかったということにされるだろう。

「直人。先ほど言ったな。『先輩達が怖い』と。つまり貴様も計画を抜ける代償を恐れているのか？」

「！！」

「……わかった。そのことが、貴様が我々と一緒にいられない理由でもあるのだな」

「だったら尚更早くしようじゃねえか、めだかちゃん」

「？　早くって……お前達、何をするつもりだ？」

「「今日中にフラスコ計画を叩き潰す！！」」

「……は！？」

フラスコ計画を……つぶす！？　しかも、今日中に！？

「待て！！　自分達が何を言ってるのかわかってんのか！？
雲仙先輩がいなくても、まだ『一三組の一三人』は十二人いる！！　全員が異常なほどに異常な奴らだ！！
いくらめだかちゃんでも、敵う相手じゃない！！」

「知っているさ。だが、その計画のために生徒が傷つく運命にある！　友達が苦しんでいる原因になっている！！　ならば、今ここで叩き潰さずにどうする！？」

「安心しな直人。今度こそ、お前が本当の仲間でいられるようにしてやるから」

「！！」

「邪魔をしたな、直人。お前はゆっくり休んでいてくれ。今度は私達が体を張る番だ！！」

「めだかちゃん、善吉……」

そう言って、あいつらは病室から出て行った。あいつらの去っていく様子にはまったく迷いが見られなかった。

「……ごめん！　ごめん！！　めだかちゃん、善吉……！」

ごめん……そしてありがとう。

俺なんかを信じてくれて。
俺なんかを友達だと言ってくれて。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――数時間後―――

「あいつら、大丈夫かな……」
「直人。一体彼女達はどこに？」
「……学園の闇と、戦いに行った」
「学園の……闇？」

彩音も雲仙先輩から、フラスコ計画のことは詳しくは聞いてないみたいだな。

まあ、あの人も『一三組の一三人』の一人。
そんな簡単に計画のことを話すわけが無いか。

……だけど本当に心配だ。
阿久根先輩や喜界島がいたとしても、せいぜい相手にできて一人。善吉と合わせても計三人だ。

残りの九人をめだかちゃん一人に任せるのは厳しすぎる。
退き際をわきまえてくれればいいのだが……まあ、めだかちゃんだけならともかく、善吉や阿久根先輩もいるだろうし、その点は大丈夫だろう。

めだかちゃんだけなら闇雲に突っ込んでいきそうだが、あいつらなら無茶はしないだろうし、いざというときはめだかちゃんだけでも逃がしてくれれば……

「無理してでも、一緒に行くべきだったかな……【ピピピッ】……ん？」

着信……不知火？
あいつから俺にかけてくるなんて珍しいな。何かあったか？

「もしもし、不知火か？　どうした？」

『あ、直人！　女子と密室で二人っきりのお楽しみの最中にごめんね』

「……切るぞ」

『あー切らないで！　冗談だから！！　教えたいことがあるんだよ☆』

「教えたいこと？」

なんだ？　今こいつが教えたいことって……
情報通だし、めだかちゃんのことか？

『時計台に乗り込んだ生徒会執行部の皆さんですが！　善吉、阿久根先輩、真黒先輩はすでにボッロボロ！　生徒会長様も捕まって絶体絶命の危機に陥っています！！』

「なっ！？　めだかちゃんが！？　そんなわけあるか！」

ありえない……！

それはめだかちゃんが敗北したってことだ！

だけど、めだかちゃんが負けるなんて信じられない……いや、負けることはあるかもしれないが捕まるなんて……

真黒さんや善吉、阿久根先輩だっていたのに、守れなかったのか！？

『やっぱりそう思うよね～。だけど本当なんだよ。

生徒会長様、姉の卑怯な策略にかかってしまいました☆』

「！？　姉？　どういうことだ？」

『あれ、知らなかった？　名瀬先輩の正体、それはなんと黒神くじら！　会長様の実姉だったのです！

びっくりだよね！　あっひゃっひゃ！』

「名瀬先輩が！？」

あの覆面の正体が、めだかちゃんの姉！？

確かに昔少しだけ姉のことは聞いたが、会ったこともないし、家出をしてしまったと聞いていたからすっかり忘れていた。

その彼女が、フラスコ計画の統括者だったのか！？

「……不知火。善吉たちはまだ捕まってないんだな」

『うん。会長様が捕まったばっかです！』

「わかった。今度何かおごる。ありがとな」

めだかちゃんが捕まった。名瀬先輩に捕まったてことはおそらく地下４階！

善吉たちもそこにいるはず……

「！　直人、どこに……」

「ちょっと、仲間を助けに行く」

「な！？　無理よ！　その傷で……」

「たしかに厳しい。だけど、俺はもう誰も見捨てたくない。

このままおとなしく仲間が傷つけられるのを待ってるくらいなら、

ここで死んだほうがましだ」

「だったら私も……「だめだ！」　！？　……どうして？」

「これから行く場所は、『異常』しか入れない場所だ。
『普通』は拒絶される。入る資格さえない場所。
その気持ちはありがたい。だけど『異常』と『普通』じゃ住む世界が違うんだ」

「……でも」

「ありがとう、心配してくれて。本当に嬉しかったよ」

出合ったばかりなのに、俺を心配してくれて。俺に一時の安心感を与えてくれて……

「それなら、またここに帰ってくるって約束して！　また会えるって！！」

「ああ、約束する」

俺なんかを仲間だと言ってくれたあいつらのためにも、

俺のような男を心配してくれた彩音のためにも、

絶対、またみんなで会えるようにするから……

## 23話　『約束する』（後書き）

作「……最後に格好いいこと言ってるけど……台無しだよ、本当」

六「え？　なんで！？」

作「……次回でわかるよ。本当に、台無しだから……」

六「？」

## プロフィール　児湯彩音

はい、それでは今回は私が勝手に名前までつけてしまった児湯彩音(こゆあやね)について軽く紹介していこうと思います。

もし皆様から何か質問があればなんでも言ってください。

スリーサイズに関する質問以外なら答えられると思いますので。

児湯彩音(こゆあやね)

容姿　茶髪　黒目

１６４ｃｍ

血液型　ＡＢ型

一人称　私

一年三組所属。風紀委員特選部隊の一人。（あるいは雲仙冥利を愛でる会の一人）

中学時代は剣道部に所属。
しかしながら入学当時、箱庭学園の剣道部は休部中、剣道場は不良にたまり場となっていたために高校では何の部活・委員会に入ればいいのかわからなかった。

その時に、様々な部活・委員会を見回っている最中に風紀委員会委員長・雲仙冥利と出会い、彼に惹かれるまま風紀委員会に参加。
その後、風紀委員特選部隊に選出される。

彼女も風紀委員会に所属しているため、周囲の人間の中には彼女を警戒している者もいる。

一度信じたことはとことん信じる一途な性格。
風紀委員会の『やりすぎなければ正義ではない』という言葉に賛同していて、そのために自分も何をされても文句はないと思っていた。
ゆえに、彼女の方から攻撃したのにも関わらず彼女を許した直人には本当に驚いた。

その件以来、直人に好意を寄せている。

イメージソング『ほうき星』（ユンナ――BLEACH　ED）

## ２４話　『負け犬軍団参上！！！』

「……なんで『拒絶の扉』が壊されてるの？」

覚悟を決めて時計台に乗り込もうとしたら……あら不思議。
拒絶の扉が見事に破壊されていました。今なら誰でも通れます。
これ誰が弁償するんでしょうかね？　まあ、フラスコ計画が終了すればその必要もなくなるんだろうけど。

今考えれば、生徒会執行部でここ通れるのってめだかちゃんだけだったな。
善吉たちが通れないということを失念していたけど……壊すか普通？

さっき俺がけっこうかっこいいこと言ったのにこれって酷くないですか！？　全部台無しだよ！！

これなら入口まででも彩音に来てもらえばよかった。正直まだ少し体が痛いんだよ。

「……もういいや。行くしかないしさっさと行こう」

深く考えるのをやめ、俺は久しぶりに地下へと入っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――地下一階―――

エレベーターは使わないほうがいいな。

善吉たちと合流するのに、途中ですれ違いになっても困るし……っつーか、このエレベーターって地下十三階まで直通らしいし。最初に使おうとしたときは知らなかったけど……

迷宮自体は『勘』でどうにでもなる。だから何も問題はない。

「だけど、いつ来ても広いな。めだかちゃんがいなかったら無理だ

ったんじゃ……って！　何だこれ！？」

迷路の壁や床が破壊されてる！　……これは、めだかちゃんがやったのか！？

確かにここは『一三組の一三人』最強の高千穂先輩がいるフロア。簡単に通れる場所ではない。

だけど、この様子だと地下一階の時点ですでにボロボロだったんじゃないのか！？

「まあ、倒せただけでもすごいと思うべきか。さっさと行くか」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――地下二階―――

糸島先輩が受け持つフロア。庭園を再現したような場所である。

「……なのになんで、宗像先輩の暗器がここにある！？」

庭園にささっていたのは間違いなく宗像先輩のもの！

なんで地下九階の住人のあの人が……水遣りの時間に当たったのか！？

宗像先輩を倒せたというのは運が良いようで運が悪い。

せめて『裏の六人』のリーダー格、糸島先輩を倒せていたなら……

宗像先輩を倒せただけでも手柄と考えるべきなんだろうけども……

次のフロアに行こう。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――地下三階―――

住人は古賀先輩（ろしゅつきょう）。構造は動物園になっている。

……だけど、動物の檻のシャッターが下りている。誰かを閉じ込めたんだろう。

古賀先輩がこんなこと考えられるわけないし、名瀬先輩が一緒にいたのか？

どちらにせよ、この付近に善吉達がいるはず。さっさと合流しないと。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――地下四階―――

名瀬先輩のフロア。

地下三階には善吉たちはいなかったから、おそらくこの階にいるはず。

まだ、あいつらが無事だということが前提だけど……！　いた！

「善吉！！　みんな！！」

「！　直人！？　お前、どうしてここに……もう大丈夫なのか？」

「六道クン！？」

「不知火から電話が来てね。めだかちゃんが捕まったと聞いたから、駆けつけた。

……お前達も、けっこうな傷を負ったようだな」

「……ああ、悪い」

見ただけでも善吉、阿久根先輩、真黒さんまでもがもうボロボロだ。喜界島は無事のようだが、戦況は明らかにこちらが不利。

なぜか、門番の二人の先輩までいるんだが……

「……直人。お前がせっかく来てもらったところ悪いけど、今のうちに地上に戻るぞ」

「！？」

「なにいいっ！　逃げるだって！？　正気で言ってるのか人吉くん

！！」

「……俺もさすがに賛同しかねるな。どういう意味だ善吉」

「逃げるとは言ってねーですよ。一度退いて地上に戻るってことです」

「同じことじゃないか！　見損なったぞ人吉くん！　めだかさんが囚われているというのに！　しかも事態は一刻を争う――」

「わかってますよそんなこと！　でも現実はどうです！？
この戦況で俺たちがめだかちゃんを助けるためには一旦退いて策を練るしかないでしょう！！」

……そう。確かに善吉が言ってることは間違ってはいない。
ここはまだ地下四階だというのにめだかちゃんは囚われ、俺たちもすでにボロボロの状態。

しかし、それに対し『一三組の一三人』は古賀先輩・名瀬先輩を抜いたとしても八人いる。しかも『裏の六人』は全員健在。

戦力的に見て、倒せても一人か二人。とてもじゃないが、勝ち目が無い……

「俺はボロボロ！　あんたもボロボロ！　真黒さんや直人だってすでにボロボロだ！
めだかちゃん一人だけを助けられりゃそれでいいわけじゃないでしょう！
俺達は生徒会執行部なんだ！　箱庭学園に通う全校生徒を助けるために活動していることを忘れないでください！」

「ぐっ……」

「……」

「阿久根先輩。善吉が言ってることは正しい。今の状況で俺達が行っても、全滅するだけです」

「六道くんまで……だが、」

「……ケッ！　相変わらずだなテメーらは。
この戦況でも助けることばっかりで！　ちっとは助けてもらおうとか思わねーのかよ？」

……え！？　なんで……

「なんであんた達がここに……！？」

「なんでって……随分不愉快な物言いですね人吉くん！」

鬼瀬！

「いやなに。大事な後輩が困っとるゆーて不知火ちゃんに教えてもーて、おっとり刀で駆けつけたちゅーわけやん」

鍋島先輩！

「９０７８６、８６７６４７８０８８６６５」

……雲仙冥加先輩。はじめまして。

「俺とか的にはあれか？
『そんな弱い奴らに負けた覚えはない。お前達を倒すのはこの俺だ』――か？

高千穂先輩……どこのバトルマンガですか？

「それを言ったら僕たちは全員生徒会に負けてるだろ。普通に友達を助けたいでいいんだよ。」

宗像先輩！

「ケケケ！　まあ理由とか御託とかいーだろうが！　まずはカッチョヨク登場シーンを決めさせろや。」

雲仙先輩まで……！！

「「「「「負け犬軍団参上！！！」」」」」

……危ねえ！！　もう少し遅かったら俺まで負け犬軍団になってた！！

## ２４話　『負け犬軍団参上！！！』（後書き）

作「『【異常（おれ）】と【普通（あやね）】じゃ住む世界が違う』……だっけ？　けっこうかっこいいこと言っといて、住む世界が変わらないって……」

六「仕方ないだろ！　拒絶の扉が壊れてるなんて考えるわけないだろ！」

作「本当に台無しでしたね。今までの中でも、名セリフな感じだったのに……残念な主人公だな」

六「俺って残念な主人公！？」

作「なんなら負け犬軍団にいれても良かったんですけど……主人公が自ら負け犬入りするのも……ねえ？」

六「うん、それは本当に助かった」

作「そして次回はその負け犬たちと合流した直人達が地下十三階を目指します。次回もよろしくお願いします！」

## 25話　『裏の六人』（前書き）

長らく投稿できずにすみませんでした。

今日はこれを含めて三話ほど、推敲が終わり次第投稿していこうと思います。

## 25話　『裏の六人』

俺たちの危機に駆けつけたのはかつての敵だった鬼瀬、鍋島先輩、高千穂先輩、宗像先輩、雲仙冥加先輩、雲仙先輩というそうそうたる負け犬（メンバー）だった。

「ばっ……馬鹿なっ……！　どうしてあんた達がここに……っ！？あんた達は確か生徒会（おれたち）との戦いに敗れて死んだはず！！」

「死んでねえよ（怒）」

「善吉、助けに来た先輩達に対し失礼だろ……ってか、まさか俺のことまで死んだって設定にしてたわけじゃないよな！？」

コイツなら本当にありえそうだ。せっかく助けに来たのに『お前生きてたのか！？』みたいな感じで。

酷い、俺泣いちゃう。今からでも彩音のところに戻ろうかな？

「なぁに人吉クン。不知火ちゃんから君らがピンチやと聞いたから助けにきたんや」

「不知火…！　あいつが俺達のために学園中を駆け回ってみんなに助けを求めてくれたってことですか！？」

「「いや、ツイッターで」」

「ツイッター！？」

見ると、『生徒会ピンチ。メンバー損なう。』って書かれていた……損なう？　掛詞かな？

なんでも箱庭生のほとんどがフォローしている人気のツイッターらしい……俺は全然知らなかった。だから不知火は俺に直接電話をしてきたんだろうか？

それなら本当に感謝しなければならない。おかげで負け犬にならずにすんだんだから。

「……っていうかおかしいでしょ！？　そんなに人気なのになんで助けが六人しか来ないんですか！？」

「えーマジで？　生徒会支持率９８％ってあの設定なくなったの？」

「ケケケ！　まー、テメーらがピンチだとかいうデマっぽい情報を鵜呑みにする生徒（やつ）がまずいねーだろ」

それもそうだな。俺も正直言って、フラスコ計画のことを知らなければめだかちゃんが負けるなんて信じられないし。他の生徒達は普段めだかちゃんの強さを嫌というほど見てるしな。

事態を知っているもの、あるいはめだかちゃんとよほど親しいものしか来ないのがむしろ普通か。

……しかし、しかしだ。

「えー、高千穂先輩、宗像先輩お久しぶりです」

「おう、六道か。久しぶりだな」

「傷はもう大丈夫なのかい？」

「ええ、しかし……お二人はなぜめだかちゃんを助けに？」

一番疑問なのはこの二人がここにいることだ。いや他の面々も十分怪しいんだが……

少なくともつい先ほどまでフラスコ計画に参加していて善吉達（あいつら）とも戦ったはずなのに、めだかちゃんを救出しようとする俺達に加勢するなんて……何があったんだ？

「なに、黒神にはさんざん遊んでもらったからな。おまけに明日遊ぶ約束までした。
あいつが拉致られたってんなら、こっちから助けにいかないわけにゃいかねーだろ」

……なるほど。高千穂先輩と戦ったのはやはりめだかちゃんだったのか。
異常なほどの反射神経を持つ高千穂先輩と『遊ぶ』なんて……めだかちゃんは一体何をしたんだ？　まさか本当に殴りあったのか？
たしかめだかちゃんは反射神経なんてもっていなかったはずなんだが……

「善吉君が困っているようだからね。友達を助けるのは当然だろう？　僕も及ばずながら力になろう」

善吉……宗像先輩と戦ったのは善吉か。つまり善吉のあの傷は刀傷。
孤立しがちな異常とこんな短期間で友達になるなんて……善吉らしいな。だからこそ、あいつは俺やめだかちゃんと一緒にいられるんだったな。

まあしかし……あんたら仲間になるの早過ぎ！　いや、俺も人のこと言えないですけどね。

「……しかし、状況はあまり変わりませんよ。善吉たちを含めて、ここにいるのはほとんどがすでにボロボロの状態。それに対して『一三人（パーティ）』はまだ十人もいます」

「ああ。怪我人の寄せ集めじゃ地下十三階までなんてとても辿り着けない……！」

「……六道、わかってんだろお前は。今行かねーと黒神は手遅れになる上に、フラスコ計画は完成しちまうんだ。そうなったら生徒会どころか――――箱庭学園そのものが壊滅するぜ」

「！　……そこまで、計画が進んでるってことですか……」

めだかちゃんをやけに勧誘しようとしていた理事長だ。
もし、彼女が捕まって都城先輩によって洗脳されていたら……！
フラスコ計画は、一気に完成まで進んでしまう可能性が……！

「ですが、実際どうするんですか雲仙先輩？　正直、『裏の六人』が全員無傷というだけでもお手上げなんですが……」

「そこが確かに問題なんだよな……なんとかあいつらだけでも素通りできればいいんだが、そんな上手い話あるわけねーし……」

「……ちゅーか、盛り上がってるとこ水さして悪いんやけど……地下十三階まで直通のエレベーターが入口んとこにあったやん。あれ使うたらあかんの？」

……

「「「「「（ナイスアイディアだけど……え～～～～？　それ言っちゃダメなんじゃないの？」」」」」

「？」

鍋島先輩そんな卑怯なやり方でいいんですか？　……いいのか貴方は。

　週刊少年ジャンプにあるまじき戦い方ですよ。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

　―――地下一階―――

「ほーい、パスワード入力完了☆　これでエレベーターちゃんすぐ来るぜー☆」

　さすがは雲仙先輩。文字制限無しのパスワードをいとも簡単に……まあ、俺も勘でやったことはあったけど。

　＊＊＊わからない方は　３話『一三組の一三人！！』を見てください＊＊＊

「やはり、『裏の六人』を全員素通りできるのは効果的ですね」
「ああ、あいつらと戦うなんて俺でも嫌だな」

バトルマニアの高千穂先輩が戦いたくないってどんだけ！？
まあ、俺も全面的に同意ですけど。というか、まず会いたくもない。

「……直人。さっきから気になってたんだが……その『裏の六人』って何だ？」

ん？　……ああ、そっか。善吉たちはまだ知らないんだっけ。そういえばまだ誰とも会ってないんだったな。真黒さんも含めて誰も知らないようだし……

「簡単に言うなら、異常度が異常な奴らだな。実際このエレベーターも簡単に動かせるらしいし」

「ああ。このエレベーターはパーティの僕らでも使えない。これを動かせるのは雲仙君、六道君、そして彼らだけなんだ」

「……あれ？　都城先輩って……エレベーター使えないんですか？　地下十三階に住んでるのに」

「……みたいだよ」

……じゃああの人は、毎日階段で地下十三階まで行ってるのか！？　……ご苦労様です。

迷路だけでもなかなか大変だろうに……

「まあ、とにかく異常度だけに関して言えば都城先輩たちまで凌駕するほどだ。俺だってあんまり関わりたくない」

「黒神さんが化物なら、あの六人は魔物のようなものだよ」

「ケケケ！　まあそう怯えんなよテメーら。裏の六人だろうが、甲賀七忍だろーが……」

ヴーッ、チンッ

お、丁度良くエレベーターが到着したか。

「どーせ、そいつら全員ショートカットできるんだからよー」

！！！　まさか……！！！

エレベーターの中から……『裏の六人』が！

「って！　なっ……！」

「『裏の……六人』！」

まさか……読まれていた！？　俺たちがエレベーターを使うことを！

鍋島先輩の、地下十三階まで敵を素通りして一気に行くという卑怯な作戦を！

「にひひひ、ビンゴォ！　エレベーターでワープなんてこすい卑怯者の考えそうなこったぜ！
だが生憎、私達にかかっちゃあその程度の作戦はお見通しなんだよ！」

「ぬうっ……返す言葉もあらへんっ！」

「「「（そりゃそうだ！）」」」

「つーかおい、六道、雲仙、高千穂、宗像ァ！　なんでそっち側に立ってんだよ……ひょっとして裏切ったのかお前ら！？」

「……裏切ったんじゃない、表立ったのさ」

「それに、『六人（おまえら）』と仲間だったつもりはねーよ」

「同じく。だいたい俺は元からフラスコ計画にはほとんど参加していなかったのでね。
悪いですが、あなた方に裏切ったとか言われる筋合いはないです」

たしかにフラスコ計画の協力はしていた。しかし仲間になった覚えはない……むしろ俺のほうが先に都城先輩や雲仙先輩に攻撃され

たくらいだ。
めだかちゃんや善吉に裏切られたと攻められるのは仕方がないと思っていたし、覚悟もできていたけれど、残念ながらあんた達にそんなこと言われる筋合いはない！！

「かー！悲しいこと言うねぇ！　んじゃ、しょーがねー。敵として！　改めて挨拶しとこうかな。
糸島軍規だ。仲良くしてね」

「湯前音眼だよ。仲良くしてね」

「百町破魔矢なる者です。仲良くしてね」

「筑前優鳥……らしいんだ。仲良くしてね」
「鶴御崎山海という。仲良くしてね」

「上峰書子と申します。仲良くしてね」

まずい！　一人を相手にするだけでも危険なのに、よりによって『裏の六人』が全員集結するなんて……これでは、全滅する！
……というか、なんか前にも同じ状況に会った気が……デジャヴ？

＊＊＊わからない方は　３話『一三組の一三人！！』を見てください＊＊＊

「……六道、予定変更だ。人吉達を連れて地下十三階に向かえ！ここはチーム負け犬が引き受ける！」

「！　雲仙先輩！？」

「馬鹿言うな！　あんた達を置いて行くなんてできるわけ――」

「るっせえボケ！　既に問題はフラスコ計画がどーとかじゃなくて！　俺達がどうやって生き延びるかってことに変わってるんだ！！」

！　……『裏の六人』。確かに、俺たちはこいつらを避けるためにエレベーターを使おうとしたんだ。
今、こうしてこいつら全員と鉢合わせてしまったなら……もうめだかちゃんの力がなければ……

「……行くぞ善吉。もうこうなったら、めだかちゃんを連れて戻っ

てくるしかない！」

「……」

「迷うな善吉！　俺たちには時間がないんだ、行くぞ！」

「……わかった！　ありがとうございます雲仙先輩！　すぐに戻りからなんとか持ちこたえてください！！」

「善吉、俺が先頭で行く！　俺の勘なら迷路も迷うことはない！」

頼みます雲仙先輩達。必ずめだかちゃんを連れて戻ってきます！
だから、どうか無事で……！

## 25話　『裏の六人』（後書き）

作「なんか本当にバトルマンガみたいなノリになってるよね」

六「いや、もはや十分バトルマンガだから」

作「直人の異常も戦闘向きといえばそうなりますけど、そうでないともいえるんですよね。果たして今後どうなるんだか……」

## 26話　『誰だお前』

階段を下りながらも、俺は善吉たちから現在の状況を聞いていた。善吉たちが戦った相手・めだかちゃんの様子など……良い報告は何一つとしてないがな。

「……なるほど。じゃあやっぱり、都城先輩達とはまだ遭遇していないんだな？　となると、残るパーティは四人か」

「ああ。古賀先輩は阿久根先輩との戦闘で疲労してるかもしれないが、他の面々は全然だ」

「いや、古賀先輩も全力で来ると考えておけ。あの人は十分もあれば回復する」

「……そうだな。俺も戦ったが、彼女の回復速度はめだかさん以上だ」

「でしょう、阿久根先輩。ですが、残りのメンバーで戦闘向きなのは古賀先輩だけです」

改造人間である古賀先輩。彼女は『一三人』の中でも屈指の戦闘

タイプだからな。高千穂先輩がいてくれればよかったんだが……まあ、その時は阿久根先輩にでもお願いするとしよう。

「まあいい。それよりも今は……！　ついた！　ここが地下十二階！　……行橋先輩のフロアだ」

「ゲームセンターか？」

地下十二階。住人は行橋先輩。
このフロアはゲームセンターの造りになっていて、あたり一面にはゲーム機が並んでいる。いつもならここで行橋先輩がゲームをしているのだが、今日は起動さえしていない。

……一体どこにいったんだ？

「行橋先輩は……いないのか？　まさか地下十三階、都城先輩のところか？」

「いないのなら好都合だ。直人、早く階段で……「人吉！　あそこ！！」　ん？　！！　めっ……めだかちゃん……！？」

喜界島が指差した方向を見ると……めだかちゃんが布一枚だけをかけて倒れていた。
羞恥心を持とうよ皆。なんで箱庭学園の女子は皆恥じらいがないんだ？　めだかちゃんといい、古賀先輩といい……

……ん？　こいつ……

「……真黒さん」

「……ああ、そうだね直人君。あれは……違う」

「やっぱりですか……」

俺と同じことを『解析』したのか、真黒さんは妹がいるのにも関わらず、飛び出していかなかった。
そう、あれは……違う！　めだかちゃんじゃない！

「めだかちゃん、大丈夫か！？」

「ん……、ああ……善吉か……」

「！　気がついたのかめだかちゃん！　何があったん「どけ、善吉

！」　……え？　うお！」

善吉に避けるよう指示し、俺はめだかちゃんに見える相手にとび蹴りを仕掛けた。

だが、相手はサッとかわし、俺たちから距離をとった。

「直人！　お前いきなり何だよ……しかもなんでめだかちゃんを……！？」

「……誰だお前？　めだかちゃんではないんだろ？」

「「「……え！？」」」

善吉を含め、他の奴らは当然ながら疑問の声をあげる。

俺とて異常（リライアンス）がなければ気付けなかっただろうから当然のことではあるのだが……それほど完全にその姿・様子はめだかちゃんそのものだった。

「……どうしてわかったんだい？」

「俺の異常（アブノーマル）は、理屈じゃないんだよ。ただ、違うって感じた、それだけだ」

「……あー、やっぱり君にはばれちゃうか。ま、そっちのお兄ちゃんにも最初からバレてたみたいだけど☆」

相手はかぶっていた布をマフラーのように首に巻き……常に行橋先輩がつけていた仮面を身につけた。

「！！　ひょっとしてその仮面！　あんたあの時の……」

「やはり、貴方か……行橋先輩！」

行橋先輩の体の骨が、骨格が変わっていく。先ほどまではめだかちゃんの姿をしていたというのに、普段の自分の姿へと変わって言った。

「ボクは行橋未造！　三年十三組の『狭き門（ラビットラビリンス）』だよ、えへへへへ！」

「ふん――――変身能力とは驚いたな。一三組のアブノーマルもいよ

いよ超能力じみてきたね」

「早とちりするなよ阿久根くん。変身（あんなの）は普通の特技だぜ。ボクが誇るボクの異常性（アブノーマル）は、他にある☆」

「……十分異常ですよ、行橋先輩」

確かにこの変身能力も超人的だ。だけど、この人は実際のところ戦闘向きではないはず。

普段も都城先輩に付き従ってはいたけれど、自分からは積極的に動こうとはしていなかったし。ならば、俺たちにもまだ可能性はある。

「どいてもらえませんか行橋先輩。貴方だって、戦いには向いていないんでしょう？」

「まあね。んー、黒神さんの洗脳ってあと１５～２０分くらいで終わるから、その後だったら通してもいいんだけど？」

「つまり、どく気はさらさらないんですね？」

「うん♪　王土が他人に興味を持つなんて珍しいからね。黒神さんなら、王土の比べ物くらいにはなるだろう？

王土がどれほど凄すぎるのか、それをボクは知りたい。だからボクは絶対、君達に王土の邪魔はさせないんだからね！」

「……交渉決裂、ですね」

最初からわかってはいたことだけど。この人はずっと都城先輩に執着していた。

傍にいる人間は、相手のことをより知りたくなる。特に孤独な者は……その気持ちはわかる。

だが、そのためにめだかちゃんを洗脳するというのは許せない！

「悪いけど、貴方を倒してでも通らせてもらいますよ。五対一なんて卑怯だと思うかもしれませんが、許してください」

「ん？　別にそれくらい構わないよ？　だってボクは、それ以上に卑怯なことをしてるし……」

「？　何を言って……！？　なっ……！？」

眠、い？　意識が……まさか、催眠、ガス……か？

「くそっ！」

「ごめんね六道くん。悪いけど、ここで眠っていてもらうよ。大体、君達はここまでくる道程（みちのり）でもうボロボロだろう？　遠慮せずに、ぐっすり休んでちょうだいよ」

俺も、善吉も……阿久根先輩、真黒さん、喜界島、全員が意識を手放した。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「さて、直人君や人吉君には悪いけどこれで時間稼ぎも完了だね。

王士もしっかり洗脳していてくれればいんだけど……」

行橋がそう言い残して立ち去ろうとした時、後方より人が立ち上がる音が聞こえた。

「……ああ、そうか。そういえば君だけはまだ無傷だったね。しかしこの催眠ガスが充満する中で立ち上がれるというのはどういうことだい？」

「『呼吸なんて一ヶ月くらい止めれるよ。だって泳ぐの得意だもん』」

「（……いや、それはそれで異常なんだけど……）」

かすかに意識が残っていた直人が心のなかで突っ込んでいた。

## 26話　『誰だお前』（後書き）

作「結局寝ちゃいましたね」

六「あれは無理。というか、絶対喜界島の肺、異常に分類されるだろ」

作「ムラがある直人の『真頼感』。実をいうとこれちゃんとした理由があります。ただ、その説明できるのがマイナス編末期くらい……それまで連載続いてるかな？」

六「続けろ！」

## 27話　『決めたのは』

『……！』

？　なんだ？　俺の真頼勘（リライアンス）がまた、何か危険を感じ取ったのか？

『……ろ！』

わからない。なんだか、いつもより感覚が鈍い……体が、重い。
うまく動かせない。

『避けろ！』

！！　真頼勘の命じるまま、俺は体を動かし、前方へと転がった。

ドガガガガッ、グシャッ……

すると先ほどまで俺がいた場所に、おそらくこの部屋のゲーム機が大量に落ちてきた。

危なかった……！　あと少し反応が遅れていたら、間違いなく死んでいた……！

だがこの能力、少なくとも行橋先輩のものではない！　だとすると、これをやったのは……！

「随分ぐっすり眠っていたようだが、俺の偉大さに当てられて目が覚めたか？　ヒトキチ、六道」

やはり、この人か。都城先輩！！

隣では善吉が喜界島を抱えていた。多分、「言葉の重み」を受けた喜界島を善吉が助けたと言うところだろう。

状況はどうなっている？　洗脳は都城先輩にしかできない。なのに、その都城先輩がここにいるってことは、まさかめだかちゃんの洗脳が……！

「……できれば、貴方とは会いたくなかったんですけどね」
「おかげさんでな。ちなみに、目が覚めたのは俺達だけじゃねーぜ」
「ほう？」

見ると、阿久根先輩がすでに都城先輩の後ろに回りこんでいた。
速い……！
阿久根先輩はそのまま都城先輩を背後から締め始めた。阿久根先輩は都城先輩の異常性が重力を操る力だと予想し、それならば抱きつけば通用しないとふんだようだ。

むにゅ。

……ん？　今なんか、俺の手に何かやわらかいものが当たったような……

「いい推理だよ阿久根高貴……だが外れだ。」

「！？」

「なっ！？」

阿久根先輩が吹き飛ばされた！？　何もしていないのに！　しかも、あの音！　阿久根先輩の手の骨がやられた……！

「以前も言ったが『言葉の重み』など行橋が勝手に名付けただけだ。王（おれ）の異常性の本質を言い表していない」

……確かに。重力を操る能力では、洗脳なんてできるわけない。それに、俺が前回『言葉の重み』を食らった時も、体が動けなかったけれど、重力に押しつぶされたというよりも押さえつけられたという感じだったし……

「だが俺達は既にあんたの異常性を克服している！　喜界島や阿久根先輩みたいにはいかねーぞ！」

「……待て善吉！　俺はまだ克服していない！」

「え？　マジで！？」

善吉が格好良く叫んでくれるのはいいけれど、俺はまだ克服なんてできていない！
実際あれを食らったのも一回だけだし。修行をしたわけでなければ、都城先輩の異常も判明していないし。

「克服？　奇異なことを言うものだな。ならばどうしてお前達の両手はそんな酷いことをしているのだ？」

「……は？」

……両手？　別に俺は何も……ーーーーーっ！！！！！！！！
（ °∀ °）

「なっ……ええええええええええっ！？」
「おっ……おおおおふぉぉぉぉぉっ！？」

「……んっ……はぁっ……」

いつの間にか、いつの間にか！　善吉は喜界島の首を絞め、俺は喜界島の胸を揉んでいた……本当になんて酷いことをしているんだ俺たちは！？　一体、いつから！？

……なかなか喜界島もでかいな。ハリがあってバランスもいい……Cカップはあるか？

じゃない！　身体（からだ）が勝手に……いや、マジで！　変態とかそういうことでなくて！

どういう状況だ、これは！？　水着の喜界島を善吉が首を絞めて、俺が胸を揉んで……どういうプレイだ！？　俺にそんな趣味はねえ！

「都城先輩！　一体何をした！？」

「人聞き悪いことを言うな六道。自分の性癖の酷さを俺のせいにする気か？」

「嘘つけっ！」

「なんだ、教えてやらなかったのか？　お前は俺の異常性の本質を知っているはずだろう？　黒神真黒」

「……僕は、友達の秘密を言いふらすような人間ではないよ」

柱の影から真黒さんの声が聞こえる……いつの間に移動していたんだ？　本当に抜け目のない人だな。俺たちを助けるより、都城先輩の隙を突くことを優先するとは……

「いいから教えてやれよ真黒くん。王（おれ）に隠さねばならん自己などない」

「……喜界島さん。行橋くんは『人の心を読む』異常性の持ち主だったんだろう？
一言で言えば王土くんはその逆なんだよ……都城王土は、人の心を操ることができるんだ」

「……！！」

「正確には電磁波を発し、対象の駆動系に干渉するのだがな。人であろうと機会であろうと王（おれ）は全てを支配する」

つまり、『言葉の重み』と言うのも俺たちの脳に直接干渉しているってことか。
洗脳というのも、電気信号を脳に直接送りこむという、そのまんまのやり方か。

「だけど、今はそんなのどーでもいいんだよ！」

「だからって、めだかちゃんを洗脳していいことにはなんねーんだよ！」

都城先輩の気が真黒先輩に向き、俺らへの注意が薄くなった隙をつき、なんとか俺と善吉はうまくもがいて立ち上がった。
危なかった……あのままでは、俺の理性が……！

「ふん……元仲間である六道や、行橋のお気に入りであるヒトキチにはあまり酷いことはしたくないんだがな。
お前達、ひょっとして偉大なる俺が黒神を洗脳したことを怒っているのか？」

「それ以外にも怒る理由が今できましたけどね！」

「ったりめーだろ！　人間が人間を洗脳なんかしていいわけねーだろうが！！
大体、あんたそんなことして楽しいか！？　めだかちゃんがめだかちゃんじゃなくなったら……そんなのもう、めだかちゃんじゃねーだろ！！」

「ふむ。ためになる意見だ。だがヒトキチ、お前だって……いや、お前達だって内心では、黒神めだかには変わって欲しかったんじゃないのか？」

「！！」

……嘘ではない。少なくとも、都城先輩が言うとおり、俺は確かにそう思っていた。

どうして俺なんかを信じてくれるのか？　どうしてそこまで他人のことを考えられるのか？
もっと自分のことを考えてほしい。もっと自分を大切にしてほしい。俺なんかに構わずに、自分がしたいことをしてほしい。自分のことを考えてほしい。

めだかちゃんも、普通の女の子のようになってほしいと思ったことが何度もあった。

……だけど、それでも、めだかちゃんがやってきたことは決して洗脳ではないんだ。

「周囲への影響力の強さというなら黒神も王土も大して変わらないよ。
王土が心を操るように！　黒神は数々の人間を改心させて――心を改めてきたんだからね。それは許されることなのかな？」

「……全然違いますよ、行橋先輩」

「？　六道くん？」

「確かにめだかちゃんによって多くの人が変わったかもしれない……でも、最終的に変わろうと決めたのは自分自身だ！　都城先輩のように、自分の好きなように他人を変えてきたんじゃない！」

「……ふん。それが、黒神によって改心したお前の意見か」

「そうですよ。だからこそ、めだかちゃんを洗脳なんてしたあんたが許せない！
めだかちゃんを変えたいとは思う！　だけど、それが彼女を強制的に変える理由にはならないんだよ！」

「……いいえ、六道くん。それは違いますよ」

「！？」

「これまでの私が愚かだったのです。正しすぎる私は、何かの間違いだったのです」

「おやおや、なんだ来たのか。黒神めだか」

「黒神めだかではありません。黒神めだか（改）です」

その声と同時に名瀬先輩や古賀先輩と階下から上がってきたのは……性格がすっかり変わり果ててしまっためだかちゃんだった。

## 27話　『決めたのは』（後書き）

作「めだかボックスに第二の変態が現れた。よくラッキースケベな主人公とかいますけど……直人は……」

六「違うから！　あれ俺のせいじゃないから！　せっかく忘れようとしてんのになんで掘り返すの！？」

作「よく言うよ……なんだかんだ言って堪能していたくせに」

六「……いや、だからあれは……その、なんだ？」

作「さて次回、変態（なおと）はどうするのか？　次回も彼の変態行動（かつやく）に注目！」

六「文字が違った気がするんだけど！？」

## 28話　『理屈じゃない』

「黒神めだかではありません。黒神めだか（改）です」

見た目は全然変わらない……正確に言えば、目つきが少し鋭くなったように見える。あとは拘束着を着ているという点。それ以外はまさしくめだかちゃんそのものだった。

だけどそれでも、以前のめだかちゃんとは話し方も、彼女が纏っている空気も、性格も、あらゆるものが変わり果てていた。

「……めだかちゃん……」

「……人吉くん。めだかちゃんではありません。めだかちゃん（改）です。

私はすでにあなた方の知る黒神ではありません。いまや私は私ではなく私であり、かつていた愚かしい黒神めだかは永遠に失われました」

善吉の呼びかけにもちゃんと答えているし、俺たちのことも覚え

ている！
　そして、行橋先輩の変装でもない！　つまり、これは本当に俺たちの知るめだかちゃんなんだ……

「……本当に、洗脳されちまったのかよ……」

「いいえ、六道くん。私は洗脳などされていません。ただ目が醒めただけです。
　見知らぬ他人の役に立つため生まれてきたという悪夢のような妄想から、私は十三年ぶりに醒めました」

　十三年ぶり……？　……たしかそれって、めだかちゃんが俺や善吉と出合った年じゃ……

「人吉善吉庶務、阿久根高貴書記、喜界島もがな会計。
　これより生徒会執行部はフラスコ計画に全面協力します。私は『十三組の十三人（サーティーン・パーティー）』に加入し、計画の完遂を目指します」

「……！」

「六道くん、かつて『十三組の十三人』に協力していた貴方も私に力を貸してください」

「……いやだね。よりによって、お前がそれを言うのかよ。ふざけるなよめだかちゃん（改）」

「？　どういう意味ですか？」

「俺を変えておいて、そのお前が今更『十三組の十三人』につくだと？　寝言は寝て言えよ。

誰よりも他人のことを考えていたお前が、自分のためだけに動くなんて……それこそ、悪夢だろ」

「……貴方達も、同意見なんですか？」

俺の意見を聞いて少しは思うところがあったのだろうか、善吉たちにも意見を尋ねる。

「当たり前だろ！　馬鹿も休み休み言え！」

「フラスコ計画のような、全校生徒を犠牲にする計画には賛同できない。それが俺たちの……生徒会執行部の総意です！」

「今も戦っている鍋島先輩達のためにも、そんなことには同意できないよ！」

当然ながら善吉たちもめだかちゃん（改）には賛同しなかった……いや、できなかった。
フラスコ計画をつぶすというめだかちゃんの意思についてきたのだから、今のめだかちゃん――めだかちゃん（改）に賛同できるわけがないのだが。

「……そうですか。私の思想に賛同できないというのなら、それもよいでしょう」

「？　めだかちゃん？」

「現時刻をもって、あなたがたを生徒会執行部から解任します」

「！！」

「私の役に立たない人間は、必要ありませんから」

そう言って、めだかちゃんは都城先輩達の方へと歩いていった。
あれほど仲間を大切に思い、信じていた彼女が、仲間を捨てた。
雲仙先輩の時は俺たちのことを思ってのことだった。だけど今回は違う。自分の邪魔になるからと、排除したんだ。
……大方、はっきり三行半突きつけられ、俺たちの戦意が消えうせたとか思っているのかな？　絶望したとでも思ったかな？　だと

したら、やっぱりお前はめだかちゃんではない。

「悪いな。俺達は何があっても生徒会はやめないって、昔お前と約束したんだよ」

「確かに変わってほしいと思ったことはなくはないですが、俺達はあなたに変わり果ててほしかったわけじゃありません」

「自分のことしか考えられない黒神さんなんて、悲しくって見てられないよ」

「何度も言わせるなよめだかちゃん。俺は役員じゃないから、そんな命令を受ける理由が無い！
お前がなんて言おうと、俺自身が決めない限りお前からは離れない！」

「なるほど、お前はめだかちゃんじゃねえ。めだかちゃんの敵だ。ゆえに俺達が！　黒神めだかに代わって、生徒会を執行する！」

まだ、俺達の戦意は消えていない。善吉の声と同時に、俺達はめだかちゃん（改）へと飛び掛った。
そしてその時、めだかちゃん（改）は口を開いた。

『跪きなさい』

「！！」

「ぐッ……あっ……」

体が勝手に……これはまさか、都城先輩の『言葉の重み』か！？
なんで、めだかちゃんが……まさか、都城先輩の異常までも身に着けたのか！？

「ふむ。やはりしっくりきますね。重い荷物を降ろしたような、全裸になったような清々しい気分ですよ」

自分で手を下さずに、俺たちが跪く様子を見て、『清々しい』なんて……とてもではないが、めだかちゃんが言えるセリフではないな。

「それは違うよめだかちゃん。お前は、荷物を降ろせてなんていな

いよ」

真黒さん……そう言えば、あなたは隠れていて、一人だけ『言葉の重み』をうけていないのか。
だけど、一体何を言うつもりだ？

「めだかちゃんではありません。めだかちゃん（改）です。何を言ってるのですかお兄様？　私はすでに心なき人です」

「そうかい。だったらどうしてお前は……泣いているのかな？」

「え……」

いつの間にか、めだかちゃん（改）の目から、涙があふれ出ていた。本人も自覚がなかったのか、驚いている。

「心ある人はその涙のことを、優しく心と呼ぶんだよ。記憶を消しても、心を消しても、どこかに欠片は残るんだ。
安心しなさい、めだかちゃん。十三年前の思い出は、お前の中から決してなくなったりはしない」

「私の、思い出……」

ドガッ

「――――ッ！！」

善吉がめだかちゃんに回し蹴りを仕掛けた……善吉！？　あいつ、いつの間に！？
めだかちゃんの『言葉の重み』を受けて、それでもまた……まだ動けるのか！？

「カッ！　こちとら十三年間お前に命令され続けてんだ！　今更お前の言葉に重みなんて感じねーよ！」

……忘れてた。人吉善吉は俺なんかと違って、十三年間の間一度も離れることなく、黒神めだかの傍にい続けたんだった。

「そして、お前の中にまだめだかちゃんがいるってんなら話は早いぜ。俺はお前を倒して、無印の黒神めだかを取り戻す！！」

「……くだらない。涙など、視界にゴミが入っただけです」

善吉とめだかちゃん（改）が戦闘を始めた。お互いが全力で、ノーガードでひたすら蹴りあっている。
蹴り技は善吉の得意分野なのだが、それでもやはり高千穂先輩の反射神経まで手に入れためだかちゃん相手ではまだ厳しいか。

「ふん。すさまじい蹴り合いだな――偉大なる俺をして圧巻と言わしめるよ。
どうだ古賀？　『一三人』内で最強を自負するお前だ。ひとつ、あそこに交じってくれれば……」

「そんなことさせるとでも？　都城先輩」

「……六道か。そういうお前こそ、ヒトキチに加勢しなくていいのか？」

「俺では実力不足ですよ……それに、善吉のあの言葉を聞いた後では、そんな無粋な行為はできませんよ」

「……ふん、まあいい。一応お前の面目を立て、ここは見届けるとしよう」

「ありがとうございます」

ただでさえ俺達に不利な状況だ。ここでこの人たちが入ってくるのはまずい。

だから、頼むぞ善吉。こっちは気にしなくていいから、めだかちゃんを頼む……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――めだか（改）ｓｉｄｅ―――

先ほどから攻撃を続けているが、この男――人吉善吉が倒れる様子はない。

既に本気は出している……つもりだ。幼馴染であるこの男を攻撃することに抵抗があるわけではない。

ただ、私はこの男を蹴り続ける無意味さを知っている。

……多分、まだ薬が効いていて記憶が戻りきっていないのだろう。その足元と焦点の定まらない感じが、私の動きから精彩さを奪っているに違いない。

慌てることはない。お兄様が言う十三年前の思い出とやらを、思い出してみよう――――

十三年前、初めてのお出かけで私は病院に連れて行かれた。私達の『異常性（アブノーマル）』が何のためにあるのかを検査する場所だった。その場所こそ、私がこの男達と出合った場所だった。

私は特に知り合いもいないし、話相手もいなかったが、私自身の

ことが少しでもわかるのかと思うと、待合室でちょっぴりわくわくしていた。そしてその時に出会ったのが……

「ねーねー、僕は六道直人っていうんだけど、君はなんて名前？」

初めて出合ったのが、私と同じ異常性（アブノーマル）の持ち主、六道直人だった。

「……黒神めだかだ」

「めだかちゃんって言うんだ。はじめまして！」

この時の彼は、自分の異常性について……いや、それどころか自分が何のために病院に来ていたのかさえわかっていないようだった。知っていたのかもしれないが、気にしている様子がまったく見られなかった。

その姿が愚かに見えなかったと言えば嘘になる。しかしだからこそ、なぜ私に声をかけてきたのかがわからなかった。

当時の私は他の二歳児に比べ成長が著しく、当時の彼よりも背丈とて大きかった。彼らからしてみれば、私は彼以上に異常な存在であるはずなのに……

「直人。なぜ私に声をかけたんだ？　他にも同じ歳くらいの者がいただろう？」

「え？　うーんとね……なんとなく、かな？」

「なんとなく？」

「うん♪　君となら、なんだか仲良くなれそうな気がしたからさ。理由なんてないよ」

……ある意味その姿が羨ましかった。私は考えることで悩んでいたが、彼はそういう行為に囚われることなく、笑っていたのだから。

そこで私はそんな彼に、私が常に持ち続けていた疑問を投げかけた。

彼なら一体どんな答えをだすのか、純粋に興味を持ったからだ。

「……直人。お前は、自分が何のために生まれてきたかわかるか？」

「？　何のために？」

「そうだ。私は、私がなんのために生まれてきたのか……それが知りたい」

「……うーん」

「『なんのためだって？』『なんだ、随分的外れなことを話しているね君たち』」

「「！！」」

そして、その時もう一人の男に出合った。同じく異常の検査のためにきていたもう一人の男の子に。

「『人間なんて無意味に生まれて』『無関係に生きて』『無価値に死ぬに決まっているのさ』」

「……君は誰？」

「『僕かい？』『僕の名前は球磨川禊だよ』『仲良くしてねめだかちゃん、直人ちゃん』」

「なんでそんなことを言うの？」

「『何で？』『それはね、僕もめだかちゃんもいっぱい人を終わらせてきたからさ』『だから、そういうことがわかっちゃうんだよ』『世界には目標なんてなくて』『人生には目的なんてないってさ』」

その言葉以上に正しいことなんてないとそのときの私は思った。しかしながら六道君はそうは思わなかったらしく、その場で反論していた。

「そんなの違うよ！　人生なんて、そんな風に決め付けられたことじゃないんだ！

その人が、精一杯生きて、精一杯頑張って作っていくものなんだ！」

「『……』『わかった風な言い方だね』『一体、どうしてそんなことが言えるんだい？』」

「理由なんてないよ。僕がそう思っているだけだよ。理屈じゃないんだ！」

この言葉がある意味彼らしいと思った。『理屈じゃない』

私や球磨川が理由について語っている中、この男の子はそのようなものは決まったものではないと、断言したのだから。

幼いからそういったことを知らないという捉え方もできた。だが、彼の言葉には不思議と納得させられた。

最も、それで私が完全に納得したわけではない。私はどうしても何かしら答えを知りたかった。

だが、球磨川という子は異常(もんだい)なしということで通院をやめたので、そのようなことを議論する相手はいなかったが……

だらだらと続く検査に嫌気がさして、ある日私は待合室から逃げ出した。

だが、思ったよりも大ごとになってしまい外に逃げることは無理そうだった。

ひとまず私が逃げ込んだのは託児室だった。幸いタイミングよく、部屋の中には六道君とその友達に思える男の子が一人いるだけだった。

「おい、そんな単純なパズルに何をてこずっておる？」

「？」

「あ、めだかちゃん」

「直人君、知り合い？」

「うん。黒神めだかちゃんって言うんだ」

「貸せ。私がやってやる」

当時の私にとって挨拶とは自らの異常性を見せること以外ではなかった。そうすることでしか私は受け入れられなかった。たとえそれが原因ですぐに突き放されることになろうとも……

「ほら、解けたぞ」

「！　すごいめだかちゃん！　一発で！」

「どうやっても解けなかったのに！　ありがとう！　すっごくうれしいよ！」

「……礼には及ばない。私にとっては取るに足りないことだ」

「じゃあ、じゃあさ！　これも解いてよ！」

「……」

することもなかったので、差し出されるままにパズルを解いてやった。

もちろん、どの玩具も私には全部等しく同じにしか見えなかったが。

「本当に全部解いちゃった！」

「すごいすごいすごい！　めだかちゃんはすっごくすごいや！」

「……すごくなんかない。それにすごくたって何にもならない。私が生きていることに、私が生まれてきたことに、何の意味もないのだから」

「めだかちゃん、まだそのことを考えてるの？」

「そうかなー？　僕はこの世に意味のないことなんてないと思うけど？」

「……だったら私に教えるがよい。私は一体何のために生まれてきた？」

この子が私に明確な答えを教えてくれるとは思ってもいなかった。だけどそれでも、やはり意見を聞いてみたかった。

当時の私はただひたすら答えのない答えを追い求めていのだ。

「あはっ！　そんなことは簡単だよ。会ったばかりの僕をこんな嬉しい気持ちにしてくれたきみなんだ。

きっときみは、みんなを幸せにするために生まれてきたんだよ！」

「！！」

「うん。僕もめだかちゃんと初めて会ったときは友達になれて本当に嬉しかった。善吉君がそう言うのだから、きっとそうなんだよ！」

今までそのようなことを聞いたことはなかった。私と出合った者は皆人生を狂わされたり、そんな私を見て軽蔑する者ばかりだったから。

だから自然とこの言葉が私の心に深く刻み込まれていた……

「めだかちゃん、もし本当に自分が何のために生まれてきたのか……目的がわからないなら、自分自身で作っちゃえばいいんだよ！」

「……私、自身で？」

「うん！　めだかちゃんが自分で目標を立てて、その目標を達成するために頑張って……そうすれば、君が生まれてきた理由にもなるでしょ？」

「……」

「目標が達成できたなら、また新しい目標を立てて、努力して……それを繰り返していけば、きっと君は皆と一緒に笑っているはずだよ！」

「……いい加減にしろよてめえ！　さっきからなんで俺の蹴りを避けねえ！？」

……どうやら記憶を辿ることに気が行き過ぎたようだ。善吉から意識がそれていたようだな。

「……あなたから攻撃を受ける理由がありません。ゆえに避ける理由がありません」

「！！」

「まさか……めだかちゃん？」

そうだ。貴様らはもう憶えていないだろうけど、私という私は……あの言葉から始まったんだ。

善吉が生きる意味を教えてくれたから……直人が生きる道筋を照らしてくれたから、私は私になったんだよ。

―――めだか（改）ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―――

## 28話　『理屈じゃない』（後書き）

作「過去話。球磨川より早くめだかに会い、めだかより早く善吉に会っていた直人……口調とか結構大変でしたよ」

六「フラスコ計画もいよいよ架橋ってところかな」

作「多分あと5話以内で終わります。感想、いつでもお待ちしています。皆さんどうぞよろしくお願いします」

## 29話　『お前は何のために生まれてきた？』

「……真黒さん、あれってまさか……」

先ほどまで善吉と蹴り合っていためだかちゃん（改）がその動きを止めた。彼女の目からは涙があふれ出ている。
この現状と、今彼女が言ったことから察すると……

「ああ、その通りだよ直人君。めだかちゃんの記憶が戻っているんだ。封じ込められていた記憶を思い出したんだ」

「やっぱりですか……」

『攻撃を受ける理由がない。ゆえに、避ける理由がない』
これはまさしく、黒神めだかという人物のあり方だ。つまり、本当に記憶を取り戻したのか。

……しかしめだかちゃんは突然表情を変え、拘束着を腕力で無理矢理引きちぎった。

「私は私を完成させるために生まれてきました。十三年前にあなたたちが私に与えてくれた生きる意味など、もう必要ありません」

「……は？　めだかちゃん……！？」

……何で？

めだかちゃんは言うや否や、善吉を殴り飛ばした。完全な不意打ちだったため、善吉は避けることはおろか、防ぐことさえできなかった。しかも今の音から察するに、骨も折れているだろう。

つまり、記憶を取り戻してもまだめだかちゃんの洗脳は解けていないってことか……！

「ふはっ、まあ当然の帰結だな。何を思い出したか知らんが、所詮記憶など脳の一機能に過ぎん。サンタを信じていた子供時代を思い出したところで今更サンタは信じられまいよ。

……どうやらアテが外れたようだな。真黒クン、六道。

どうだ？　この際お前達もフラスコ計画に戻ってこないか？　偉大なる俺が偉大に歓迎するぞ」

「……それもいいかもねえ。妹を二人も失って、今の僕は世界を滅ぼしたいくらいの気分だからねえ」

「そうか……六道、お前もこちらに来い。もはやお前だけではどうしようもないだろう？」

真黒さんももはや戦意喪失。善吉も倒れ、めだかちゃんは善吉にとどめをさそうとしている。
都城先輩は俺も現実に絶望したとおもったのだろう、俺に勧誘してきた。

だけど、俺は了承なんてしない。都城先輩はともかく、真黒先輩にはわかってほしかったんだけどな。

「……都城先輩。確かに記憶なんて曖昧で、思いなんて簡単に変わりゆくものかもしれません。
でも、過去は変わらないんですよ。良いことも、悪いことも、個人の過去なんだ。あの二人の十三年間を、そんな簡単に判断しないでくださいよ」

「？　それはどういう……！　何ッ！？」

めだかちゃんは自分の頭を掴み、電火を発している。
やっぱりだ。今のめだかちゃんは過去を思い出したことで不安定な状態にいる。だからこそ、善吉のように親しい者の純粋な想いに、揺れ動いているんだ。

……だが、あの電火はなんだ？

疑問に思っていたが、行橋先輩はわかったのか、言葉を発する。

「あれは電磁波だ！　つまりまさかあいつ！　信じられない！！
あのバケモン女、自分で自分を洗脳し直すつもりだ！　王士にされたように！　電磁波を脳に直接放射して！」

「自分で自分を洗脳！？　そんなことできるんですか！？」

「……確かに王士君の『言葉の重み』を使えたなら理論上は可能かもしれないけれど……そう簡単な話ではないんだよ」

「洗脳には過度な繊細さが必要なんだ。それをあんな乱暴に力ずくでなんて……あのままじゃ頭空っぽになっちまうぜ！」

マジかよ！？
確かにめだかちゃんは悲鳴をあげながらも、痛みに耐え電磁波を止めない。
脳にあれほど直接電磁波を流し込んだら……ヤバイ！！

「「やめろ」」

善吉がめだかちゃんの手を掴み、脳への干渉を止める。俺は後ろ

から軽く頭を小突く。
本当に、何でめだかちゃんはこうも自分が傷つこうとするんだろう？　その部分だけは、変わらないな。

「どうしてめだかちゃんは、洗脳されてもそういうところは変わらないんだよ」

「みんなを幸せにするために、お前が傷ついたり、痛い思いをしたり、泣いたりすることはねーんだよ……みんなの中には、お前もちゃんと入っているんだから」

そう言って善吉はめだかちゃんを離さないように抱きしめた。

「みんなを幸せにするためには、まずはお前が幸せにならなきゃな」

「皆と一緒に笑うのに、めだかちゃんが欠けるわけにはいかないだろ。
誰一人欠けることない状態で、俺達は一緒にいたいんだから……」

「……」

しばらくの間、めだかちゃんは何もしゃべらずに、動かずに、何かを考えるように静止した。
そして、突然勢いよく立ち上がった。

「……え？　えーっとあれ？」

「……めだかちゃん……（改）？」

どっちだ！？　このめだかちゃんは……どっちだ！？

「……めだかちゃん（改）ではない。めだかちゃんと、呼ぶがよい！！」

「……戻った！？　戻ったのか！！」

「ああ、手数をかけたな。善吉、直人も」

「いつものことだ。気にすることでもない」

「めだかちゃん……お前は何のために生まれてきた？」

「むろん。見知らぬ人の役に立つため。みんなと一緒に私も幸せになって、みんなで笑いあう！！」

よかった……めだかちゃんの中でも、俺達の出会いは忘れられない、大切なものだったんだ。

「……ふむ。まあ、そこそこためになる座興だった。お前達の絆には感服したよ。では黒神めだか。俺達もそろそろ下校したいし、最後の実験を始めよう」

「よかろう。フラスコ計画を叩きつぶし、そして貴様らも幸せにしてやろう！」

こうして今度こそ、フラスコ計画最後の戦いが始まろうとしていた……

## ３０話　『だったら私は』

めだかちゃんの洗脳も解け、ついに生徒会のメンバーが全員揃った。

都城先輩の案内で、俺達は全員で地下十三階へと降りていく。

俺でさえ今だに来たことのなかったフラスコ計画の最深部にして最新部。そこには……

……大量のコンピュータがありました。

というか寒い！！　めだかちゃんとか古賀先輩、薄着なのによく平気だよな！？　あれか、露出狂だからか！？　そうなのか！？

真黒さんいわく、１３万１３１３台ものスーパーコンピュータが１年中作動しているらしい。そのため、これくらい冷やさないとこの部屋がコンピュータが発する熱でおかしくなってしまうそうだ。

１台くらい持っていっても……「直人、窃盗は犯罪だぞ？」……

めだかちゃん、人の心を読まないでください。冗談だって。俺だってそこまでする男じゃない。

「どうだ、黒神。一面に広がるこの圧巻な光景。これがフラスコ計画だ。
お前はみんなを幸せにしたいと言ったが、お前がフラスコ計画を潰せば！　フラスコ計画に従事し、人生をかけている人間は不幸になる。
――――逆に聞くが黒神。お前はフラスコ計画のメリットについて考えたことがあるのか？」

都城先輩はめだかちゃんを諭すように話し出す。これを聞く限りは悪意はまったく感じられない。ひょっとしたら、本心で話しているのかもしれない。

めだかちゃんも都城先輩の言葉に口を出すことなく聞いている。

「『悩むこともなく、困ることもなく、誰に相談することもなく、誰に助けられることもない』『完全に完成された完全な人間に誰でもなれる』
フラスコ計画が完成したならばどれだけの幸福が生まれるのか。お前はちゃんと考えたことがあるのか？」

「そのために箱庭学園の全校生徒を犠牲(じっけんだい)にしようというのだろう？
その時点で論外だ。考えたくもない」

「……都城先輩。貴方は1を捨てて99を救うのでしょうけれど、生徒会(おれたち)は違う。
如何な内容でも如何な条件でも、生徒会を執行するんですから」

「つまり犠牲者が出なければお前達は問題ないのだな？
ならば黒神……生徒会執行部。これが最後の勧誘・最終通牒だ。フラスコ計画に協力しろ。犠牲者が出ぬよう知恵を振り絞り、取り計ればよいだろう。お前達にはそれだけの力がある。十分可能なはずだ。
そうすれば俺達も幸せになり、貴様達も幸せになり、皆が幸せになる。落しどころの妥協点としては悪くないはずだぞ」

確かに、フラスコ計画にしても生徒会(おれたち)にとっても悪い話ではない。誰も犠牲になることなく、皆が幸せになる。これはまさに、めだかちゃんの叶えたい理想なんだから。

「どうする、めだかちゃん？　生徒会長はお前だ。お前の言葉が生徒会の総意であり、お前の考えで箱庭学園は変わるぞ？」

ここでは俺が余計な事を言うわけにはいかない。俺は正直言って中間にいるからな。

「……厚意から出た提案だと信じるが、やっぱりそれは無理なんだよ。

だって　完全な人間なんて作れっこないんだから。

まったく……私なんかより貴様達の方がよっぽど理想主義者だよ。とても理解に苦しむし、ある意味本気で羨ましい。どうしてそこまで夢見がちでいられるのだ。

例え完全な人間が作れたとしても、もしも完全な人間になれたとしても、不完全さが欠けてしまう以上、それはもう完全とは言えんだろう？

生徒会長として生徒の夢はできれば応援したいけれど、『十三組（サーティン）の十三人（パーティ）』、貴様達が見ているのは悪夢だよ」

……『完全な人間なんて作れない』か。確かにな。めだかちゃんのように完璧超人と呼ばれる人でさえ、完全ではないんだから。

それなのに、人間が作れるわけがないか……

「話にならんな。所詮、貴様も正論を並べているだけだろう……六道、お前はどうだ？」

「！　……俺ですか？」

「そうだ。お前も計画にこそほとんど参加しなかったが、元『一三人（ティ）』。
貴様も異常性（アブノーマル）を持ち、その中で完全になりたいと思ったことがあるはずだ。この計画の素晴らしさを理解できるはずだ！」

「……確かに完全が素晴らしいものだと思いますよ。本当にあこがれる。今までだって、自分の無力さが悲しくて、何度も力を望んだことがある」

「お、おい直人！！」

「そうだろう。完全になることで、そうしたこともなくなる」

都城先輩は俺の言葉を聞き、満足げに頷く。

「だけど……それでも俺は完全にはなりたくない」

「！？　なぜだ六道！」

「完全に憧れ、それを求める。それは本当に立派なことだと思う。
でも、完全になったら何の意味がある？　完全の上には何も無い。それ以上の目指すものが何もない。人は完全じゃないから一人一人が違っていて、個性がある。だからこそ、もっと上を求める。
……めだかちゃんではないけれど、完全なんてものはないんですよ」

「……ッ！　黙って聞いてりゃ一年生がごちゃごちゃうるさいなあ！！　正論吐かないと人を否定することもできないのかよ！　ようするに私達は間違っているって言いたいんでしょ！？」

「……古賀先輩、俺達は……」

「うるさい！！　フラスコ計画の否定は改造人間である私の否定だ！　絶対に許すわけにはいかない！！」

古賀先輩は怒り心頭の様子で前に出てきた……この中では一番感情的な人だからな。仕方がないことではあるが……

「……しかし古賀よ。お前では黒神を倒すのは不可能だよ」

「何言ってるんですか王土さん！　私は一度こいつに勝ってますし

！！　大体、王士さんだって戦うタイプじゃないでしょう！？」

「いや、偉大なる俺には……異常（アブノーマル）がもう一つある」

「「「！？」」」

次の瞬間、都城先輩が背後から古賀先輩を貫いた。

「対象者の心臓（ハート）に直接！　電磁波を送り相互干渉することで、対象者の電気信号（アブノーマル）の周波数を強制的に取り立てる！
これが俺のもう一つの裏技（アブノーマル）――『理不尽な重税』だ」

相手から異常性（アブノーマル）を奪い取る！？　待て、なんだよその異常性は！
……じゃあ、今の都城先輩には、古賀先輩の異常性まで加わっているのか！？　ということは……

「黒神、お前がやることは所詮物まねのまがいもの。相手の異常性の２０％も発揮できないだろうが、俺は違う」

「！　めだかちゃん、危ねえ！！」

「偉大なる俺の税率は、１００％だ！」

「！！　がっ……はああっっ！！！！」

「「直人！！」」

都城先輩の蹴りが俺に直撃。古賀先輩の異常性まで備えたその威力は相当なもので、俺はスーパーコンピュータの棚を貫通してさらに奥の棚にまで蹴り飛ばされた。

……ッ！　やばい……息がしづらい……おまけに、蹴りを受けたところだけじゃなく、背中も痛ぇ……

「……ふむ。この威力、やはり偉大なる俺にこそ相応しい。どうだ名瀬よ。お前の異常性を支配するのは人格だというお前の説が証明されたぞ……ん？」

「……古賀ちゃん……古賀ちゃん。嘘……やだ、目を覚まして」

……古賀先輩の横では名瀬先輩が泣き崩れていた。
しかも、あの名瀬先輩が真黒先輩に古賀先輩の救助を頼みこんでいる。

「……黒神をかばう六道といい、真黒君に懇願するお前といい、情けない姿を見せるなよ。所詮お前も黒神の姉か？
やはり偉大なる俺にはお前しかいないな行橋――おや？」

都城先輩が行橋先輩に呼びかけるが、その行橋先輩も都城先輩の後ろで倒れている。

「ああ……遠くに離れていろと言うのを忘れていたな。古賀の心臓を貫かれた痛みを受信してしまったか……まあ、いいか」

「……都城王土。あまりこういうことは聞きたくないのだが、貴様はそれでも人間か？」

「もちろん、俺が人間だ」

めだかちゃんの問いに、都城先輩は堂々と答えた。

「そうか……だったら私は、化け物でいいよ！！」

都城先輩の言葉に触れて、めだかちゃんが乱心モードになり、都城先輩の腹に向け突進した。

## 31話　『悪いことしたら』

「都城王士、貴様が人間なら……私は化物でいいよ」

……なんだあれは？　乱神モードのように見えるが少し違う。
乱神モードはめだかちゃんの髪の色が少し薄くなっていたが、今回は青紫色の髪が黒くなっている。

「ぐっ……はっ……！」

「動かんほうがいいぞ。嫌な手ごたえがあった。おそらく内臓が破裂している」

「……ふ、ふはっ。王に命令するなよ！　黒神ィィィ！！」

都城先輩が腕を振り下ろす。めだかちゃんがかわした様に見えたが、頬からの出血が見える。
反射神経でもよけきれないほどの攻撃力。そして回復力。なんだよ、この別次元の戦いは……

「……まあ、めだかちゃんが……負ける…とは、思えないが、な……」

「おい直人！　お前も大丈夫かよ！？」

「……見てのとおり、立つのも、つらい……」

コンクリートさえも貫く蹴りを食らって、おまけに壁にたたきつけられて、結構体にダメージがきてる。骨も折れてるかもしれないな。

だけど、そうなるとその異常性を持つ者を相手にしているめだかちゃんは大丈夫か……！？

……なんで！？　めだかちゃんが、折られたはずの腕で反撃している！！　あれは、おそらく古賀先輩の回復力！　なんで、めだかちゃんまであれを使えてんだよ！？

「黒神！　どうしてお前が古賀の異常性を使える！？」

都城先輩も俺と同じことを思ったのか、めだかちゃんに疑問をぶつけている。めだかちゃんにはあれほどの回復力は今まではなかっ

たはずだ。

「確かにお前はこれまで『一三人(パーティ)』のスキルを使ってきたが、見様見真似に過ぎなかったはずだ！
だが、古賀の異常(それ)は物真似のレベルを超え、自分のものとしている！　……さてはお前、俺と同じ異常性を……？」

「それは違うよ、王土くん」

激昂している都城先輩を諭すように真黒さんがつぶやいた。そういう今も、名瀬先輩とともに古賀先輩の治療をしている。

「めだかちゃんは他人から異常性なんて奪っていないよ。現にきみや行橋君は異常性を保ったままじゃないか」

「……じゃあ、一体何なんですか？　俺はめだかちゃんの異常性は『他人ができることはなんでもできる』という学習能力(モデリングのうりょく)の高さとばかり思っていましたけど……」

「……同じく」

俺だって箱庭学園に入学してからめだかちゃんのことを見てきたが、そうとしか思えない。
事実、彼女は他人がやっていることを見ただけでやってみせたり

したからな……たとえ、それが異常性だとしても。

「二人がそう思うのは仕方がない。だけどそうじゃないんだ。現にめだかちゃんは他人にさえできないことまで成し遂げている……くじらちゃん、お前にはわかっているんじゃないのか？」

「……まあ、概ねは」

「だったらお前が発表しなさい。それがフラスコ計画統括としての責任だ」

「……」

マジかよ……あの理事長があれほど知りたがっていためだかちゃんの異常性。

それが今、ついに明かされる……！

「……黒神が冥利くんの乱反射弾幕を使った時はなんとも思わなかった。あれくらいは誰にでもできることだからな。

問題はその後だ。高千穂先輩・行橋先輩の異常性をスイッチ性を付与した上で黒神は体言したんだ」

確かに！　高千穂先輩の戦いのことは俺はよく知らないけれど、

二人とも制御が利かない異常性の持ち主だった。だけどめだかちゃんはそれをオンオフに切り替えて使っている。

「決定的なのは都城先輩の異常性を使いこなしたこと。特に、あの自分で自分を洗脳しようとしたあの自己洗脳の結果、今の黒神がある。暴走状態だった乱心モードを完全に支配しているんだ。強いて言うなら『改神モード』！！」

あの乱心モードさえも支配……？　あのまったく制御ができなかった真骨頂を改良して……否、完成させた！？

「つまり、黒神は相手の異常性を使いこなし、完成させることができるんだ――『完成（ジ・エンド）』……それが黒神の異常性だよ」

「……ちょっと待ってくださいよ名瀬先輩。それじゃあ、めだかちゃんは……」

「そう。直人君の言うとおり、めだかちゃんは必ず相手の上を行く。異常性としてはこれより上はないさ……『完全なる人間』、めだかちゃんほどの適任はいないだろうね……」

異常性をも完成させる異常性。相手を完全に打ち負かす能力……

これこそまさに、フラスコ計画が求めていたものじゃないか！！

「……やめてください、お兄様。私は完全なんかじゃない。こんなのはただ、化け物が人間ごっこして遊んでいるだけです」

「！！　ふざけるなよ黒神！　俺達の！　異常者の！　一三組生の命がけを潰す事が！　完成らせることがお前にとってはただの遊びだというのか！？」

「……」

「俺は王だぞ！　選ばれし異常性を持った選ばれし王だ！　俺の異常性は……！」

ん？　なんか都城先輩が何かひらめいたような顔を……電磁波？　なぜ今更……！

まさか、『理不尽な重税』か！？　めだかちゃんの異常性までをも手に入れる気か！？

「……なにやら物欲しそうな顔をしているな都城三年生。別にこんな異常でいいなら貴様にくれてやるよ」

「！？　おい、めだかちゃん、何を言ってんだ！！」

「お前はこんなときに、何でまたそんなことを……！」

「安心しなよ、二人とも。今回、あのお人好しは完膚無きまでにフラスコ計画を潰すと決めたらしいから」

そうして、都城先輩の右腕が、めだかちゃんを貫いた。

「ふはは！　これが……これがお前なのか黒神！　これが……ッ！？　う……あッ……ひぃいいいいいいいっっ！？」

だけど悲鳴を上げたのは胸を突き刺されためだかちゃんではなく、『理不尽な重税』でめだかちゃんの異常性を奪おうとした都城先輩のほうだった。

……おそらく、都城先輩には耐えられなかったんだろう。めだかちゃんの異常性は……俺達では触れることさえ辛いのだろう。奪おうとして気づいたんだ。めだかちゃんの抱えているものの重さに。

「冗談じゃないぞ、お前……あんな闇（もの）を、あんな取り返しのつかないものを俺に押しつけようとしたのかお前は！？　お前は人間（おれ）をなんだと思ってるんだ！？　このっ……化物がっ！」

「……で？　言いたいことはそれだけか？」

都城先輩が激怒する。
……最も、都城先輩が勝手にめだかちゃんの異常性を奪おうとしただけで、めだかちゃんは押し付けたりはしていないんだけどね。
なんにせよ、これで決着は完全についた。めだかちゃんの、勝ちだ。

「……俺の負けだ。偉大なる俺はもう二度と王を名乗らん。フラスコ計画も今日をもって凍結する。『一三人』も解散させる。だから、許してくれ」

「……言いたいことはそれだけか？」

「……行橋と古賀の命は保障する。これまでフラスコ計画が犠牲にしてきた者達にもできる限り保障しよう。脱退者にも何も手出しはしない。だから……許してくれ」

「言いたいことはそれだけか？」

「……！　『言葉の重み』も『理不尽な重税』も永久的に封印する！
今後、絶対に悪事は働かないと誓う！　だから！　許してくれ！！」

「それ、だけか？」

都城先輩もまだめだかちゃんという人間をわかってないな……めだかちゃんが聞きたいのはそんなまどろっこしいものじゃないんだよ。あのお人好しが聞きたいのは、もっと簡単な……純粋なことなんだよ。

「……それ以上、俺にどうしろというのだ……！！」

「……いや、別に何もしなくていいんだよ。あれこれ言わずに、ただ反省してくれればそれでいいんだ。

悪いことしたら、『ごめんなさい』だろ」

……やっぱりね。それでこそめだかちゃんだ。

だけど都城先輩は思いがけないことだったのか、その場で呆然としている。

「ごめんなさい」

そして、都城先輩が……あの王が、土下座した！

「んっ、許す！　……これにて一件落着ゥ！」

こうして『一三人（おれたち）』の、『生徒会（おれたち）』の戦いは終わった。

## 32話　『僕は悪くない』

現在、フラスコ計画の凍結作業中。ひたすらめだかちゃん達がデータを消去したりしているんだが……

「……なんかめんどうだな。阿久根書記、スパコン全部壊しちゃえ。」

「え！？」

忘れてはいけない。何しろここには数え切れないほどのコンピュータがそろっているのだ……まあ、俺が激突したことで壊れたものも十数台はあるのだが……

「がんばってください！　拒絶の扉を壊した先輩ならこれくらい朝飯前でしょう！？」

「……まあ、確かにできないことはないが……」

できるんだ！？　半分冗談だったんだけど……さすがは旧破壊臣

！

まあ、それより早い方法があるんだけど……

「……都城先輩、あなたが『言葉の重み』を使えば早いんじゃないですか？　地下１２階のゲームセンターの時みたいに……」

「……ふむ。確かにな。すまんが黒神。今一度、異常性を使わせてもらうぞ？」

「ああ。頼む」

「では……『ひれ伏せ』！！」

ぐぐぐ、ぐしゃっ……ごごごごご……

……うわー、やっぱりすげー。あっという間にスクラップの山ができたよ。

！　しまった！！　……一台くらい持っていけばよかった……！

！　俺のスパコンが……！

まあ、それはいいとしよう。これで凍結作業も終了。本当に都城先輩の異常性はすごい。後は帰るだけだ。

「よし、帰るぞ貴様ら。直通のエレベータを使えばすぐにつく」

「……いきなり『裏の六人』が出てきたりしないよな？」

「安心しろ。その場合は普通なる俺が説得する。やつらもフラスコ計画が凍結されたとなれば下手な真似はしないはずだ」

「よろしくお願いします」

……だめだ。もうエレベータがトラウマになってしまっている。なにしろ二回もひどい目にあったからな。二度あることは三度あるというが……ここは三度目の正直を信じたい。

エレベータのパスワードはめだかちゃんが入力……みごとに開いた。さすがだななんの迷いもなく入力したよ。

誰も乗っていなかったし、俺達は早速エレベータに乗り込む。

「……そういえば都城先輩。あなたがこのエレベータを使えないって聞いたんですけど本当なんですか

？」

「……」

あ、この人目をそらしやがった……マジかよ！？　いつも地下十三階まで階段で降りてんのか！？　……本当、お疲れ様です。

「ところで！　すまんが都城三年生。あと一回だけ『言葉の重み』を使ってもらうぞ」

「ん？」

「……一階での戦闘を制圧するためだろう？　雲仙先輩や高千穂先輩みたいに、簡単に戦いをやめてくれない人がいるからな」

「……ああ、そうだな。『裏の六人』も止めてやらねばならんし……よかろう。普通なる俺が承ったよ」

そこは俺だけでいいでしょうに……都城先輩は王を引退してもやはり変わってんな……

お！　そろそろ着くな。さて、どっちが勝っているんだか……！？

「……は！？」

地下一階に到着して、エレベータの扉が開いた。だけど、俺達の眼前に広がったのは

……チーム負け犬も『裏の六人』も、門番の二人も……全員が体中を螺子で貫かれ、壁に磔にされたり、床に倒れている光景だった。

「何、これ？」

「……なんで、全滅してんだよ？」

「まさか、相打ちにでもなったのか？」

「『いいや』『相討ちじゃこうならないね』」

俺達が目の前の光景に驚愕しているなか、奥のほうから何者かの声が聞こえてきた。

「『十五人全員が同じように串刺しにされている。』『異常者とい

えど、自分で自分の体を串刺しにするなんて不可能だよ』『まったく、誰がこんなひどいことをしたのかはわからないけれど――』」

「……お前か？　これをやったのは？」

「『おっと！』　『勘違いなんてしないでくれ』僕が来たときにはもうこうなってきたんだ』『だから』

僕は悪くない』」

そう言って、学ランを着た男子生徒が俺達にその姿を見せた。

「『めだかちゃん久しぶりっ』『僕だよ』」

「球磨川……禊！？」

……球磨川禊？　こいつが、そうなのか！？　あの、球磨川……？

いや！　今はそんなことどうでもいい！！　こいつが誰かなんて、どうでもいい！

それよりも！　そんなことよりも！　あいつが、右腕で引きずっている女子生徒！！

彼女も体を螺子で貫かれている！　それに、あれは……あの姿は、まさか！！

「……彩、音……？」

その姿は、確かに俺が病院で最後に会った……彩音だった……

## 32話　『僕は悪くない』（後書き）

六「……嘘、だろ……？」

作「マジです。本当に一体なにがあったんだという感じですが、次回で彩音と球磨川のやり取りの描写を書いていこうと思います」

## ３３話　『頼みたいことがあるんだけど』（前書き）

皆さんお久しぶりです！　２ヶ月ぶりです！

これからまた、よろしくお願いします！！

# 33話　『頼みたいことがあるんだけど』

私は優秀な人間ではないし、人間離れした能力(スキル)だって持ち合わせていない。
だから『貴方と共に戦いたい』と言うことはできなかった。『貴方の背中を守りたい』と言うことはできなかった。
そんなことを言っても、足手まといになるだけだとわかりきっていたから。

私には貴方の傍にいることしかできない……だけど、傍にいることだけはできる。
一人で戦う貴方を見守ることだけはできる。貴方を一人には、孤独にさせないことだけはできる。
そう思ったから……私は行動にでた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――彩音ｓｉｄｅ―――

「……結局来ちゃった。時計台」

直人が時計台に出発してから３０分ほど。
病室で直人を待っていようと思ったけど、結局彼から一度も連絡はなく、それどころかツイッターで「生徒会ピンチ。メンバー損なう」という呟きを見て……本当に一大事なんだと理解して、いても立ってもいられなかった。

そこで私はここに……時計台に来ていた。今も直人達が戦っているであろう場所に。

「……でも本当にすごい戦いみたい。入口がこんなに破壊されているなんて……」

時計台地下の入り口には巨大な鉄の扉のようなものがあるけれど、今はそれが跡形も残さず木っ端微塵に壊されていた。
これだけを見ても、ただ事ではないということがわかる。けど、こんなことで怯むわけにはいかない。風紀委員会という仕事上、こ

れくらいのことがなかったわけでもないし。

少しでも早く、直人達を見つけて合流しないと……！？

「！！　う、雲仙委員長！？　鬼瀬！？」

なんで……どうして！？

入ったばかりの地下一階の廊下。ここに、雲仙委員長や鬼瀬、鍋島先輩など多くの人が巨大な螺子で体を貫かれ、壁に磔にされていた。

これじゃあ、まるで……！

「誰が……誰がこんなことを……！」

「『本当だよね』『こんな酷いことをするなんて』

『とてもじゃないけれど、同じ人間として信じられないよ』」

「！？　誰！？」

いつの間にか、私の後ろに何かがいた。
……男子生徒？　でも、箱庭学園の制服じゃない……転校生？
なんにしても、この男がやったのは間違いない！　みんなに突き刺さっているのと同じ巨大な螺子を両手に持って、おまけに返り血をあびている状態を見れば……

「『おっと！』『勘違いしないでくれよ』
『僕だって驚いているんだ』『一体誰がこんなことをしたんだろうね？』」
「……質問に答えていないわ！　貴方は誰なの！？　何者なの！？」
「『僕かい？』『僕はね、球磨川禊っていうんだ』『よろしくね』」
「……！」

何なのこの人！？
近づきたくない！　関わりたくもない！　戦いたくなんてない！
今すぐここから逃げ出したい！

なんだか、こうやって向き合うだけでも心が折れてしまいそうな、嫌な感じが……

「『ああ、君は別に名乗らなくてもいいよ』『僕は君には用はない』『だけど一つ聞きたいことがあるんだ』『この学園の生徒会長……黒神めだかがどこにいるか知っているかい？』」

「！？」

「『彼女と以前会ったことがあってね』『少し話がしたいんだ』」

この人……黒神さんの知り合い！？　……いや、知り合いだとしても駄目。

少なくとも良いことが起こるわけがないって、わかる。わかってしまう。会わせるのは危険すぎる！

「……知ってたとしても教えない！　貴方は危険すぎる！　今すぐここから……箱庭学園から出て行って！」

「『！』『なんだ、僕と戦うって言うのかい？』『怖いな』『勘弁してくれよ』」

「ふざけないで！　貴方を……黒神さんや直人に合わせるわけにはいかない！」

「『？』『直人？』『……ああひょっとして君、直人ちゃんの知り合いかい？』『六道直人の』」

「！？」

なんで！？　なんでこの男が直人のことまで知っているの！？
一体、この男はどういった人間なの！？

「『なぜ僕が直人ちゃんのことを知っているか不思議かい？』『僕と彼はね１０年以上前からの知り合いなんだよ』
『おまけに僕は彼のことが嫌いでね』『嫌いな奴のことはしっかり憶えるようにしているのさ』」

「……」

「『そうか』『君は直人ちゃんと仲がいいのか』
『今の彼に近づく人間なんてそういないだろうからね』『それくらいのことはわかるよ』」

話の内容だけを聞けばこの男が直人の知り合いだというのは間違いない。彼の性格もよく知っている。

だけど……やはりなにか変。
直人を嫌いと言っていることもそうだけど、なんだか直人に会わ

せたら……彼の全てが壊されてしまうような、そんな感じが……

「『直人ちゃんの知り合いだというなら話は別だ』『君に一つだけ』『頼みたいことがあるんだけど』」

「……何よ？」

「『なに、難しいことじゃないんだ』『君は何もしなくていい』『ただ……』

『死んでくれ』」

「！！　……ッ！？」

言葉を認識したその瞬間には男が私の目の前にいて、そして螺子を私へと向けていた。

私は反応することさえできず、私の体に螺子が吸い込まれていった。

―――彩音ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―――

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「……うそ、……でしょ？」

痛みを感じて初めて、彩音は自分の状況を理解した。巨大な螺子が完全に彼女の体を貫いた。

彩音の体からは血がどんどんあふれ出していく……おそらく、今すぐ治療しなければ助からないだろう。

「『あ～あ』『やっぱり人を殺すのは怖いな』『でも怒るなら直人ちゃんを怒ってね』『僕は何も悪くない』『悪いのは』『君と知り合った直人ちゃんなんだ』」

「……なん、で……直人は……」

「『……』『どうして君みたいな普通（ノーマル）が、直人ちゃんに近づくのかな？』

『ひょっとして、【彼の傍にいることだけでもできれば】みたいなこと考えていない？』『そうだとしたら、君は本物の偽善者だよ』
」

「……」

声を発するのもやっとの状態で彩音は言葉を紡ぐ。
だが、球磨川はそんな状態であろうと容赦はしない。彼女が持っている意思を、想いを、希望を打ち砕いていく。

「『弱い人間が傍にいても邪魔なだけだ』『むやみに善意を振りかざしても、かえっていい迷惑だ』
『所詮それは、君が彼の傍にいたいという』『ただの独り善がりだよ』」

「……わ、たし……は……」

「『憶えておくといいよ』『押し付けの善意は、悪意となんら変わりない』
『結局君は、彼の邪魔になることしかできないんだ！』」

「……」

彩音は何も言葉を返すことなく、意識を失った。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「『あ』『しまった』
『めだかちゃん達が来るまで話し相手になってもらおうと思っていたのに』『殺しちゃったら無理じゃないか』
『……まあいいや』『この方が直人ちゃんもびっくりするだろうし』『早く来ないかな♪』」

球磨川は何の感情もこもっていない声でそうつぶやいた。

誰も彼の言葉には答えない。答えられるものはいない。

静寂がその場を満たし、沈黙がその場を支配した。

## 33話　『それが直人なんですから』

「……彩音？　なんで……？　なんで……」

見間違えるわけがない。ただでさえ俺は直感が優れている上に、先ほど会ったばかりの彼女を見間違えるわけがない。

あれは確かに、彩音だ。間違いない！

なんで……なんであいつがここにいる！？　なんで血を流して倒れている！？

「『へー』『彼女は彩音って名前なのか』『可愛らしい名前だね』『……ね？』『直人ちゃん』」

「！！」

球磨川……！　こいつ、自分がこんなことをしておきながら、よくもぬけぬけと……！

「……球磨川ァァッ！　お前、どうして彩音を……！　彩音は何も関係ないだろうが！？」

「『関係ない？』『おいおい、ひどいこと言うなよ直人ちゃん』『彼女は君の数少ない友達だろう？』」

「……！！」

「『大体、勘違いしないでくれよ？』『僕のは正当防衛だぜ？』『僕はただ君達に会いたいだけだったのに、彼女から仕掛けてきたんだから』」

「！　おまえぇぇぇぇ！！」

「！？　やめろ直人！」

球磨川に突撃しようとするが、善吉と阿久根先輩が左右から挟みこみ俺を止める。負傷している上に、二人がかりで抑えられているため、少しも動けない。

……なんでだよ！？　なんでとめるんだよお前らは！？

「……離せ善吉、阿久根先輩！　邪魔をすんな！」
「落ち着け、直人！　駄目なんだ、ただ強いだけじゃ、あいつは駄目なんだ！」
「そうだ。今のままでは、君まで失ってしまう！」
「んなこと知るか！　俺はあいつを……！？　ガッ……！？」

突如、後ろから突きを入れられた。しかも、ただの突きではない。
……電磁波のようなものが体を伝う……都城先輩！？

「……安心しろ。少し電磁波を流し込んだだけだ。しばらく動けなくなるだけ……六道の異常性もそのままだ」
「……ッ！」
「冷静になれ六道。仮にも雲仙や高千穂、宗像……そして『裏の六人』まで全滅させた相手だぞ。
負傷している上に、冷静さを失った貴様が勝てるわけがない」
「都城、先輩……！」

それでも、それでも止めてほしくはなかった……！

「『いやいや』『本当に勘弁してくれよ』『僕は戦う気はないって言ってるのにさ』
『あまりにも怖くて……この子を盾にしそうだったよ』」

「お前……！」

「『……』『相変わらずだね直人ちゃん』『三年ぶりだっていうのに、君は何も変わっていないね』」

「……？　三年ぶり？　何を言っているんだ？　俺はめだかちゃん達とは違う中学だったんだぞ」

なんだ……？　俺を惑わすための言葉か？
少なくとも、球磨川はめだかちゃんや善吉と同じ中学校に通っていたはずだし、転校した俺とはあの病院で会った以降は会っていないはずだ。

……なのに、なんでこんなことを？

「『……』『ああ、そうか』『そういえば君はあの現場にはいなかったね』
『ごめん、僕の勘違いだったようだ』『気にしないでくれ』」
「……？」

なんだ……？
何か、俺が見落としていることでもあるのか？　俺の知らないところで、こいつは何かしたのか？

「『まあ元気そうで何よりだよ』『君が何にも変わっていなくてさ』
『……友達一人さえ守れない役立たず』『それが六道直人という人物なんだからさ！』」

「……！」
「……そこまでにしようじゃないか球磨川くん。あまり後輩をいじめるものじゃないよ」

俺に焦点を絞ってきた球磨川から俺を隠すように、前に出た。

「大丈夫だ直人くん。球磨川くんなら、他人をこんなにも簡単に終わらせたりはしない。
彼女も死んではいない……無事なはずだ」

「……え？」

真黒さんが球磨川には聞こえないように俺を気遣うように声をかけるが……信じられない。

今ここで倒れているものは皆体中を螺子で完全に貫かれ、血まみれで動くこともない。とてもではないが、これで生きているなんて信じられない。

「『格好いいね真黒ちゃん』『後輩を体を張って守る』『昔の僕は君のその姿に憧れていたんだよ』

「……それは光栄だね。僕のような男に憧れるなんてね。
だけど、今はそんな昔話をするつもりはないよ。君はそうしてこの箱庭学園に？」

「『そんなことどうでもいいじゃないか』『それより君も怪我をしているみたいだね』」

球磨川が俺達に近づき、真黒先輩の懐に入り込んできた。
真黒先輩の服を捲り上げると、確かに多くの傷跡が見られる……
おそらく、フラスコ計画を抜けたときの代償だろう。

「『しかも随分と古い傷だね』『一年位前のものかな？』
『なんならこれも僕が戻(なお)してあげようか？』」

「……遠慮しておくよ球磨川くん。
これは僕が己の過ちに対して支払った代償であり、僕が己の罪に対して受けた罰なんだから」

……やはりな。真黒先輩は自分がフラスコ計画に参加していたということを忘れないよう、傷跡を残しているんだ。記憶が薄れても、体の傷を見て思い出すために。

「『へーそうなんだ』『それはとても大切なものなんだね』
『けどごめーん』『もう戻しちゃったよ！』」

「な！！」

球磨川が真黒先輩から離れながらつぶやいた。
驚愕しながら傷跡を確認するが……球磨川の言うとおり、傷は跡

形もなく消えていた。

……もはや治したとか、そういうレベルじゃない！　まるで何事もなかったのように、本当に元の綺麗な姿に戻っている！！

なんなんだ？　この――――いいも悪いもいっしょくたにかき混ぜて、すべてを一瞬で台無しにする感じ。

十三年前とは比べ物にならない！！

「……おい、それで私には何も無いのか？　球磨川。

折角の再会で折角の機会だ。私にも言っておきたいことがあるなら言っておけよ」

めだかちゃんはそんな球磨川にも動じなかったのか、あいつの目的を問いただした。

……だが、やはりめだかちゃんもいつもと様子が違う。

あのめだかちゃんが本当に敵と対峙しているように、敵意をむき出しにしている。

「『んー？』『僕が』『めだかちゃんに』『言いたいこと』『ねぇ――』『別に無いけど』」

球磨川が出口に身体を向けたまま、顔だけを俺達に向けて言った。

「『あー！』『ひょっとして勘違いしてる？』『僕がきみ達に会いに来たとか！』『ここで待ち伏せしてたとか！』『さ！』『安心してくれよ』『君たちに用なんてまったくないんだから』」

「……それならなんでお前がここにいるんだ？　何しにここに来たんだ？」

「『そうなんだよ直人ちゃん！』『実は僕今日付けでここに転校してきたんだけどさ』
『理事長に挨拶しなきゃいけないのに理事長室の場所がわからないんだ』『よかったら僕に教えてくれないかい？』」

球磨川が箱庭（ここ）学園に転校！？　……まさか、理事長の指図か！？
あの人、フラスコ計画がつぶれたから今度は球磨川を利用しようとしているのか！？

「……それを教えれば、今すぐ消えてくれるのかな？」

「『もちろんだよ』『信用してくれよ』『僕を』」

「……おい待て貴様ら。勝手に話をまとめるな」

すると今までは口を出さずに傍観していた都城先輩が話に割って入ってきた。

「球磨川と言ったか？　貴様の事情は知らんし、知りたくもないが……そこに張り付いている連中の大半は普通なる俺達のよく知る仲間なのだ。

六道ではないがこんなものを見せられて、俺達が黙って貴様を見逃すと思うのか？」

……俺のことは止めたくせに。

もっとも、都城先輩はまだ冷静さを失っていないから俺なんかとは全然違うわけではあるが。

「『だーかーら！』『僕じゃないって！』

『まあその気持ちはわかるわけだし』『これでおあいこってことで！』」

「！！　な……！？」

そして、球磨川は自分の螺子で自分の頭を貫いた。
……それにも関わらず、あいつは何事もなかったように平然としている。

「『やっぱ理事長室は自分で探すよ』『それくらいはちゃんとしないとね』」

螺子をさしたまま球磨川は立ち去ろうとしたが、何かを思い出したかのようにこちらを振り向き、めだかちゃんにむけて言った。

「『そういえばめだかちゃん』『今生徒会長やってるんだって？』『昔の僕みたいに』」

「ああ、昔の貴様を反面教師にな」

「『ふーん』『ま』『応援してるよ』『がんばってね』『んじゃ』『また明日とか！』」

そう言って、今度こそ球磨川は去っていった。

「……ふー。やっと行ったかあの学ランくん」

「っ！！」

「鍋島先輩！？　動いて平気なんですか！？」

突然背後から声がしたと思ったら、倒れていたはずの鍋島先輩が起き上がった。

見る限り、思ったより元気そうにしている。少なくとも、死に掛けの人間の声ではない。

「アホ！　平気なわけないやろ。あんな凶人の相手してられへんから早々に死んだふり決めただけに決まっとるやん！

他のみんなかてそうやって、なあ！」

……

「……どうやらそんな卑怯者は、あなただけだったみたいですけれど……」

……当然ながら、鍋島先輩の声に反応する者はいなかった。
死んだふりをするような卑怯者は彼女以外この学園にはいないのだろう。

「教えてください猫美さん。一体何があったんです？
俺達が地下に行っている間に、ここで何があったんですか？」

「あーん。何がって言われたらそら……何もかもやろ。
……見てみいや。あんなぶっといネジで貫かれてできた傷穴が、もう塞がってもとるがな」

「え！？」

鍋島先輩がネジが刺さっていた場所を俺達に見せてきた……確かに傷がない！　跡形もなく消えている！！

……待てよ。それじゃあ……それじゃあ彩音も！？

俺はすぐさま彩音の元に行った。傷が痛むがそんなこと関係ない。

「……！　本当に……本当に傷が、消えている！！」

鍋島先輩の言うとおり、ネジを抜いてみると傷穴が嘘のように消えている。

出血も止まっていて、脈もあるし息もしっかりしていた。

「……よかった……！　よかった……！！」

駄目かと思った。でも、こうして生きていた。

本当に、よかった……！

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「……なあ、黒神ちゃん？　六道君とあの子ってそんなに仲がよかったん？　あの子も六道君の名前を言うてたけど……」

「いえ、おそらくあなたが思っているほどではありませんよ。現に、直人と会ったのはわずか数日前。しかも当時は敵同士でしたからね」

めだかの言うとおり、直人と彩音が会ったのはわずか数日前。しかも直人が気絶していた分を考えれば、一緒にいたのはわずか二日のみである。

だが直人は涙を流して彩音に抱きついていた。

「……それにしては、やけに六道君は必死やね」
「仕方がありませんよ。それが直人なんですから」
「……それは、あいつが一三組生だからか？」
名瀬がめだかに尋ねる。同じ異常者、通じるものがあったのだろう。
『異常者は孤独になりがちであるがゆえに、絆を絶対に裏切らない』こういう言葉さえあるほどだ。
それだけ異常者にとって絆というものは大切なものなのである。

「いいえ、それだけではありません。
直人は自分自身の異常性（アブノーマル）のせいなのか、あるいは元からだったのか……人の悪意というものに恐ろしいほど敏感なのですよ。特に初対面の人間に対し、自分自身に近づく者に対して」
「……昔は同年代のやつに対しては、それほどでもなかったんですけどね。
少なくとも『人見知りが激しい』くらいでしたし、言うほどでもなかったんです」

「そして逆に、人の善意に……純粋な想いに恐ろしいほど鈍感になってしまったんです。
常に疑心をもっているがゆえに一途な想いにはめっぽう弱い。おそらく、児湯一年生の想いが直人の疑心に溶け込んだのでしょう」

ゆえに、直人は初対面の人間は基本信じない。安易に自分に近づいてくる人間を信用しない。
だが、一度信じると決めたものは信じとおす。

それが六道直人という人間であり、彼の生き方。

## ３３．１話　『大丈夫だよ♪』（前書き）

直人の過去話。
本編より一足先に、あの人が少しだけ出てきます。

## 33．1話　『大丈夫だよ♪』

六道直人は幼少時、『大人』というものは信用できないと既に認識していた。

彼の両親は彼のことをまるで『何かに憑かれた子供』のように思っていた。

当時の直人があまり言葉・知識を知らなかったがゆえに親への『異常性』の説明が抽象的だったこともそうだが、病院で『異常者』と認識されたことがさらに拍車をかけた。

両親は今でも直人のことをあまりよくなく思っていて、実を言うと直人が一人暮らしをしているのも、理事長にフラスコ計画加入に当たって金銭的支援を頼んだのも、親との接点を少なくするためなのだ。

また、彼の『異常性』を確かめるために入院した病院の者たちが、彼を『人』としてではなく『モノ』としか扱わなかった、見ようとしなかったということも原因の一つである。

別にすべての人間がそうだったわけではない。しかし、医者が自分から進んで彼に接しようとするものはたった一人を除いて皆そうだった。

『新たな発見をしたい』『異常性を解明したい』『金が欲しい』『フラスコ計画を完成させたい』などという、欲望を持つ大人たちの本質を彼はこのとき既に見抜いてしまった。

このように疑心暗鬼に陥ってしまった彼がその病院で信じていたのはたった三人のみ。

「……失礼します」

「はい、どーぞ……おはよう直人君。今日の調子はどうかな？」

一人は彼が唯一現在も信じている大人――人吉瞳（ひとよしひとみ）。彼の主治医である人物である。

彼女もフラスコ計画の関係者ではあるが、診療外科医という仕事に対する誇り。そして自身が異常性を持ち合わせていたため、異常

性を持つ子供達を少しでも社会へと参加させたいという使命感から――彼女だけは直人（アブノーマル）に対しても、他の子供と何の隔たりもなく接していた。

「毎日ありがとうございます。瞳先生」

また、直人もそんな彼女の意思を感じ取り、そして友達である善吉の家族だということを知り、彼女だけには心を開き、思いを打ち明けていた。

十年以上たった今でも、直人の大人に対する疑念は消えていない。心の底から大人を信じているのは彼女一人だけである。

「めだかちゃーん。善吉君。いるかい？」

そして、もう二人の人物は彼と同い年の少年・少女。

「む？　直人か。今日の検査はもう終わったのか？」

「うん。人見先生が今日はお仕舞いだって」

「そうか……私も今日は午前中のみだったからな。ちょうど良い」

一人は直人と同じく、異常性を持って生まれてきてしまったがゆえに入院を余儀なくされた異常者――黒神めだかである。

彼女は自身が持つ異常性によって、「私は一体何のために生まれてきたのだろうか？」という疑問に頭を悩ませていた。

そんな時に彼らと出会い、彼らに歩む道を照らされてからは二人と共にすごす時間も長くなり、次第には二人の存在は兄や姉と同等の位置にまで達していた。

……彼女もまた異常性によって、異常者であることで苦しんだ人物なのである。

「じゃあさ、直人君もこの後はずっと時間があるんだよね？」

「うん。今日はもう何も用事もないし、大丈夫だよ♪」

「やった！」

そして、もう一人は他の子供と何の変わりもなく、能力（スキル）も異常性（アブノーマル）も持ち合わせていない普通（ノーマル）な男の子――人吉善吉。

彼は瞳の子供である。

本来なら異常者でもないため入院する必要もないし、ここにいる必要はないのだが……瞳の診療外科医という仕事上、育児が疎かになりがちであるため、彼女が仕事中は病院の託児室に預けているのである。

そのため、彼はほとんどの時間を託児室にある遊具を使って時間をすごしていた。

そんな時に直人やめだかと出会い、共に時間を共有してからは彼らと親密な間柄となっていった。

……子供という純粋な思いを持っているからだろうか、彼はあっという間に彼ら(アブノーマル)と仲よくなった。もしも善吉がいなかったならば、直人やめだかはどういった存在になっていたのだろうか……少なくとも、同じ道は歩めていなかっただろう。

この幼いころの出来事が、出会いが現在の直人を作り出していった。

人間というものは幼いころの経験が性格を作っていくというが、異常者は幼いころの経験で性格どころか運命までもが決まってしまう可能性がある。

フラスコ計画賛同者になっていたかもしれない。

過負荷(マイナス)になっていたかもしれない。

自分以外は全て平等だと感じるかもしれない。

世界の崩壊を望んでしまうかもしれない。

……あるいは、その前に心が壊れていたかもしれない。

そのようなＩＦの世界を考えても意味がないということはわかっている。
だが、それでもそれが真実であり、異常者の運命であり、抗うことのできない性（さが）である。

直人という人物の幼いころの出会いが、今の彼を築き上げてきたのだ。

## ３４話　『全治２ヶ月といったところでしょうか』

「……折れてますね。完全に」

「……」

先生はレントゲン写真を見て言う。
うん。やっぱりそうですよね。症状も出てたし、ひょっとしたらとは思っていたが……本当だった。

「六道さん。あなたは一体、無断で外出した先で何をしてきたんですか？」

「……本当にすいませんでした！　このとおり反省しております！！　どうか許してください！！」

箱庭病院へと戻ってきた俺。
だが、そんな俺を待っていたのは担当医の方のすがすがしいほど

の笑顔だった。これほどの笑顔は見たことがない。正直言って怖い。怖すぎる。

……なぜだろう。なぜか先ほどから、俺の真来勘（リライアンス）が発動しっぱなしなんだが。逃げたほうがいいのだろうか？

地下十三階で都城先輩から放たれた一撃必殺の蹴り。それにより、まともにくらった俺の体は耐えられるわけもなく、肋骨がものの見事に骨折していたらしい。しかも、その後壁にたたきつけられたことで背中にもダメージがあるという。

入院患者が医師に無断で外出し、しかも帰ってきたと思ったらなぜか余計に傷が増えている……それは怒りますよね。

しかしながら理由を言えるようなものではない。ゆえに、ひたすら謝るしか俺にはできない。

「……全治2ヶ月といったところでしょうか。

その間、今度こそ絶対に安静していてくれれば大丈夫です」

「……はい、本当にすみません」

本来なら俺は、目が覚めたならば軽い検査をして何も問題がなけ

ればすぐに退院できるくらいだった。それでも多少の間は安静にしているようにとのことだったが。

だが、わずか数時間で俺の治療期間は一気に2ヶ月に長引いた……これ、夏休みがほとんど終わってんじゃん！！

まあ肋骨が折れただけで済んだのはよかったと思うべきか。1ヶ月もすれば少しは動けるようになるだろうし。

……少なくとも、俺一人だったら今頃ここにはいなかっただろうしな。

「まったく。本当にあなたの学校では戦争でも起こっているんですか？

この前六道さんが運ばれてきたときの怪我も、まるで何か巨大な爆発に巻き込まれたような火傷をしていましたし。

……今日とて、あなたの学校の生徒が10人以上搬送されてきたんですよ？」

「本当にすみません。ご迷惑をおかけします」

まさか本当に戦争をしているとは言えない……むしろ、戦争以上の戦いが繰り広げられたわけだし。

彩音たち――地下研究所で負傷した人たちもここ箱庭病院に運び込まれている。
一度にこれだけの生徒が運び込まれたのだ。疑問に思わないわけがない。

……ああそうだ。ちなみに鍋島先輩はこの病院にはいない。
事件の後、あの人は普通に自分の足で帰宅したのだ……あの人の図太さマジぱねえ。

「……それで、その生徒達は大丈夫なんですか？」

「ええ。少なくとも外傷はありませんし、肉体的には何も問題はありません。
……ただ、精神面での傷はなんとも言えません。よほど衝撃的なものを体験してしまったのか、酷いトラウマ状態に陥っていますね。もし彼らが目覚めたとしても……普通の生活に戻るには時間がかかるかもしれません」

「そうですか……」

鍋島先輩や彩音以外の人達も、外傷はまったくなかった。
だがしかし、身体中を巨大な螺子で貫かれたという精神的ダメージは甚大だったらしい。見ただけの俺でさえあれだけのショックを受けたんだ。被害を受けた張本人たちのダメージは計り知れない。

「……まあ、今はご自分のことを考えてください。あなたも重症患者なんですから」

「わかりました……あの、先ほど搬送された児湯彩音さんはどこの病室にいるでしょうか？」

「？　ああ、お知り合いですか？
……彼女は２０８号室に入院しています。意識は戻っていないかもしれませんが、もしよかったら顔を見せてあげてください」

「はい。ありがとうございます」

俺は先生に礼をして診察室を出て、彩音の病室へと向かった。
……彩音がこうなったのは、全部俺の責任だからな。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

コンコン。

彩音の病室にたどり着いた俺は、ひとまず入室の許可を得るためにも扉をノックする。

……だが、彩音からの返事は何一つとして帰ってこない。

「彩音。俺だ……入るぞ」

俺は一言かけてから中へと入る。

彩音しかいない個室は、本当に静かだった。今も彼女は意識を取り戻すことなく静かに眠っていた。

「本当に、ごめんな……」

彩音の手を握り声をかける。
だがやはり彼女から声は帰ってこないし、握っている手からも力は何もこもってこない。
今も意識を取り戻さずに眠っているんだ。あんなに気丈だった彼女が。

……こういうときは彩音に何かしら声をかけてあげるべきなのだろう。だけど俺には、何を言えばいいのか全くわからなかった。
彩音をこんな目にあわせた俺の頭には、彩音への謝罪以外の言葉が浮かんでこなかった。

「明日の朝、また来るよ。だから、今はゆっくり休んでいてくれ」

それは叶わないことなのかもしれないけれど、彩音には聞こえていないのかもしれないけれど、それでもそれしか言葉が出てこなかった。

結局俺は何も出来ずに、自分の病室へと戻っていった。

明日になったら、彩音が目ざめていることをひたすら願いながら……

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1196u/

異常性に導かれし者

2011年11月26日19時54分発行